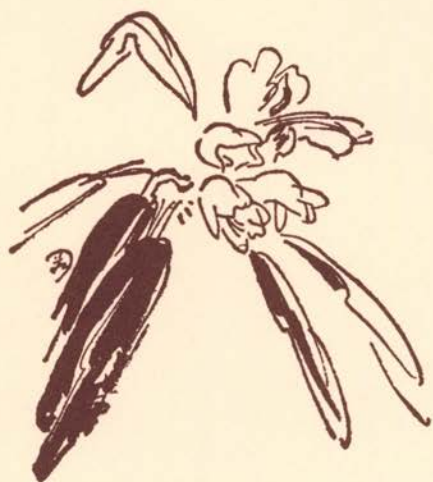


# 岳 山



第二十八年  
第二號





早春の山麓(北アルプス)

英木猪之吉筆



# 山 岳

第二十八年第二號



目次 (第二十八年第二號 昭和八年七月)

口 繪 早春の山麓(北アルプス)

茨木猪之吉筆

本欄

日本アルプスの雪線に就いて  
遮日峯、北水白山、兄弟水

今西錦司 一頁  
橋本秀一 三五

雜錄

ティロールの春  
赤牛岳  
冬の潤澤岳越え  
臺灣の山岳漫談(二)

田中薰 五七  
小池文雄 六八  
島田武時 七七  
沼井鐵太郎 八六

遭難顛末報告

大門山遭難略記(能登志雄)

## 圖書紹介

C. Wilson: An Epitome of Fifty Years' Climbing. (島田巽)―河田植、山とふるさと(松井幹雄)―額田敏、山岳寫眞のうつし方(塚本閣治)―長谷川傳次郎、ヒマラヤの旅(渡邊漸)―山日記(一九三三年版)編輯報告(黒田孝雄)

## 會報

會務報告(一三九) 臨時小集會記事(一四〇) 日本山岳會有志晚餐會(一四一) 圖書基金について(一四一) 新入會員紹介(一四二) 會員訃報(一四四) 退會者(一四四) 前號の主なる正誤(一四四) 「山岳」投稿規定(一四五) 日本山岳會會則(一四六)

## 圖版

遮日峯

岸波義彦 四〇―四二頁

薬水川を経て北水白山を望む

岸波義彦 四〇―四二

赤牛岳主峯

小池文雄 七四―七五

中ゴヤより薬師岳を望む

小池文雄 七四―七五

涸澤岳飛驒側

島田武時 八二―八三

涸澤岳西山稜と北穂高岳

島田武時 八二―八三

## 挿圖



咸南中央部山勢圖

遮日峯附近

クリムルの瀧

涸澤岳附近概念圖

大門山附近

## 附 録

本邦の氷河問題に關する文献

カ ッ ト (表紙)  
カ ッ ト

佐々保雄  
今西錦司 編  
茨木猪之吉  
坂本直行

一  
〇頁



# 日本アルプスの雪線に就いて

今 西 錦 司

今から二十年前の日本アルプスと云へば、まだ岩登りや、スキー登山などと云ふ所謂近代的登山形式の擡頭するに至つてゐなかつた頃であるが、さりとて開拓時代と稱するものもどうかと思はれる様な、一種の中継ぎ時代であつた。併しかう云ふ中継ぎ時代と云ふものが必ずしも沈滞の時期と一致するものではないと云ふ事は、その頃の登山家が各自に論題トピックを携へて山に登り、その見た處、考へた處に就いて盛んに記述してゐる事からも窺はれるのである。これらの論題中でも特に熱の高まつたのは、恐らく日本アルプスの氷河問題に就いてであつたらう。そしてこの問題をめぐつて、専門家も平ひらの登山家も夫々の立場から、甲論乙駁して互に譲らなかつたものであるらしい。

その結論に迄到達せぬ中に、登山家側の總帥とも云ふべき小島烏水氏は突如として米國に去り、又専門家間でも何時の間にか火の消えた様になつて、又この問題に觸れる人は稀となつて了つたのである。併し眞理の探求はかくて已むべきものかは、一昨夏に至り、たまたま仁科山脈中にカールの發見されたのが端緒となつて、碩學小川

博士の研究は再び開始された。一方小島氏も滯米中の考察を纏めて、昨夏「氷河と万年雪の山」を上梓され、歸朝後初めて江湖に問ふ處があつた。今や問題は再燃の機運に向つてゐる。疑問の解決される日は近きにあるであらう。

この機會に際して、筆者は日本アルプスに存在する處の万年雪と雪線とに就いて再吟味を行ひ、尙從來議論のあるカール地形の成因に關しても、聊か私見を述べんと欲するものである。本篇の内容は既に一昨夏に於いて出來上つて居り、昨夏小島氏の新著を讀んだ後に早速原稿を草したのであるが、二三材料の上で不満の點があつた爲、も一度現地を踏査する豫定でゐた處、何時もその餘裕を得ず、この調子では寧ろ不備のまゝにても發表して大方の叱正を仰ぐに如かずと、敢へて舊稿を筐底より引つ張り出して來た次第である。

### 雪蝕説と氷蝕説

日本アルプスのカールの成因に關しては、大體二つの意見に別れると思ふ。その一つは雪線と氷河とを結びつけて考へるものであつて、現在の日本アルプスには雪線を認めないが、カールの形成された時代には、雪線は少くとも飛驒山脈に於いて二五五〇米附近まで降下してゐた。従つて其處には圈谷氷河が發育し、その氷蝕に依つてカール地形が生じたとなすものであつて、之が今迄最も廣く行はれてゐた説である(1)。

他の一つは、之も現在の日本アルプスに雪線を認めない點では一致するが、過去に於ける雪線の降下も認めないか、或は認めた處で、雪線と氷河とを必しも結びつけて考へようとはせず、その主張する處は寧ろ氷河の存在を假定せずとも、單に万年雪の作用のみに歸しても、カール形成の説明としては充分なりとなすものであつて、小島氏の雪蝕説は即ち之である(2)。

以上を前提として、筆者が論議を進めんとするに當り、先づ吟味しなければならないのは、こゝに使用された「雪線」なる文字の内容に就いてである。雪線と云ふ言葉は登山家の好んで使用する處であり、「雪線以上」とか「雪線以下」とか云ふ名前の付いた書物さへある。併し少し突つこんで考へると、その内容が、大變曖昧な言葉である事を見出すのである。それ故最初にこの言葉の持つ内容を整理し、之を區別して、その各々に定義と名稱とを與へた後に之を使用するの無かつたならば、本篇の如き内容の論文は、その意義の大半を失つて了ふものと云ふべきであらう。

### 雪線の種類

北國の冬は平地まで積雪(Schneedecke)に掩はれてゐる。これが春先になつてくると、平地から次第に消え初めて、夏には最早高山の上へでも行かなくては、雪が見られなくなる。秋になると又高山の上から雪が積り初めて、最後に平地まですつかり雪に包まれる。この積雪が次第に山の上に退いて行き、又山の上から迫つて來る現象は、富士の様な山を見ておればよく解る事である。かくの如き場合、ある時季に於いて、積雪の下限の續きになる様な線を指して、之をその時季に於ける雪線と云ひ、かくの如き雪線を總稱して季節的雪線と名付ける。即ち北國の冬はこの季節的雪線が平地にまで下降してゐるのである。

處でこの季節的雪線は、季節の進むのにつれて次第に高く上つて行き、盛夏に至つて遂にその上り得る高さの極限にまで到達する。この時季に於ける季節的雪線の事を、特に氣候的雪線(Klimatische Schneegrenze)と稱するのである。過去に於ける氣候の變遷等を論ずる際に、よく引き合ひに出されるのはこの氣候的雪線であり、

従つて又カールの成因に關聯して論ぜられる處の、雪線の降下と云ふその雪線も、矢張りこの氣候的雪線を指すものでなければならぬ。

氣候的雪線とは、それ故積雪が、盛夏に至つて、丁度それより下に於いては消えるが、それより上に於ては消えない様な、一続きになる處の線であり、従つてこの線以上が「恒雪帯」と呼ばれる所以も此處にあるのである。併し更に高い處まで昇つたらどうなるかと云ふに、氣壓の減少は蒸發を促し、一方降水量は減ずる傾向があるから、遂にある高さに至れば、雪は積る尻から蒸發して了つて、最早積雪を見る事が出来なくなる。此處に恒雪帯の上限があり、その限界を「上位氣候的雪線」とするならば、先に述べたものは之に對して、嚴密に云へば「下位氣候的雪線」と呼ぶべきものである。が實際は地球上の最高峯たるエヴェレストの頂上さへ、尙この上位氣候的雪線には達してゐないと云ふから、これは理論上の存在に過ぎず、従つて單に氣候的雪線と云へば、直ちにこの下位氣候的雪線を指すものと看做してよいわけである。

この他、秋口になつて雨の晴れた後などに富士山を望むと、丁度何合目を堺に、一線を劃して、それから上が新雪で掩はれてゐる様な事がある。かう云ふ場合の新雪の下限は、他では見られぬ程、誠に明瞭な一続きの線をなしてゐるが、その壽命は至つて短く、少し太陽でも強く照り出せば、すぐ不整な、等高線に沿はないものになつて了ふ。こんな場合の雪線を稱して「**一時的雪線**」と云ふ。この一時的雪線と先に擧げた季節的雪線とは、絶えず相前後して進退するから、兩者を嚴密に區別する事なく、之を呼ぶに *temporäre Schneegrenze* なる語を以つてする人もあるが、例へば東京や京都では雪が降つても、この雪は根雪とは成り得ず、従つてこの兩地は共に積雪と云ふものを持たぬから、一時的雪線の見舞ふ事はあつても、季節的雪線を迎へる様な事はないと云ふ風

に、區別しておいた方がよからうと思ふ。

然らば次に、何故に一時的雪線はすぐ不整になるのかと云ふに、そこには勿論降雪中に於ける風當りと風蔭とで、既に降り積つた雪の量が出來てゐる上、更に日が照り出せば、日向と日蔭とで融ける雪の量が違つて來る。季節的雪線と云ふも要するに、かうして變形した一時的雪線の累積であり、その集約されたものに過ぎないから、定義通りに積雪の下限が一続きの線をなすと云ふ様な事は、容易にあり得ない。又望み難い事なのである。然る時は季節的雪線の、これ又一時相に過ぎない氣候的雪線も亦、決して一続きの線で示される様な場合は認められない筈なのである。即ち地形的なあらゆる影響の絶無と看做され得る様な山は、世界中の何處へ行つても求められないのであるからして、季節的乃至氣候的雪線なるものも亦、各々一つの理論的存在でこそあれ、決して實在するものでは無く、従つて未だ曾つてかゝるものを見た人もあるわけでないのである。

かくの如き事情の存する限り、縦んば氣候的雪線を或る高さに假定しても、尙それより上に於いて雪の少しも積らない岩峯が存在したり、或はそれ以下に於いても豊富な萬年雪が残つたりする。それ故に認識し得る雪線と、理論的な雪線との間に、區別を設ける必要を初めて主張したのは、人文地理學の泰斗フリードリッヒ・ラツツェル(3)であつた。即ち認識し得る雪線とは、その山岳の特殊な地形的影響を享けて、盛夏の候に至るも尙氣候的雪線の下に取残された萬年雪の一群を、その下限によつて繼ぎ合はせた様な線を指し、之に地形的雪線(orphographische Schneegrenz<sup>e</sup>)なる名稱を與へたのである。従つてこれより認識し得る季節的雪線とは、又その時季に於ける積雪の最下端を繋ぎ合はした、一つの「地形的季節的雪線」に外ならない事を知るのである。

こゝに於いて吾人の認識し得る雪線とは、文字通り一続きの線をなす、一時的雪線か、さもなくば不連続では

あるが、確實に資料の得られる地形的雪線か、その何れかに過ぎなくなつて了ふ事を知るのである。然してかの登山家連が屢々口にする雪線の如きは、かくの如き嚴正なる吟味を経たならば、恐らくそれは根據のない、空想的産物に過ぎなかつた事を曝露するものであらう。

日本アルプスに於ける、この地形的雪線に關しては、何れその萬年雪を論ずる際に詳しく述べるつもりであるが、氣候的雪線と雖も亦、理論的にはその存在を主張し得る筈のものである。且それは日本アルプスの氷河問題にとつて、最も重要な鍵キの一つである。筆者は更に論議を進めて行く準備として、現在の日本アルプスに於いて、かゝる理論的な氣候的雪線の存在を認め得るものか否か、それは一般の主張の如く果して存在しないものか、若し假に存在しないものとするも、現在の氣候状態の下に於いては、その位置をどれ程の高さに推定し得るべきものであるかと云ふ事を、先づ理論的に求めて見る事としたい。

### 現在の日本アルプスに於ける

#### 氣候的雪線の理論的推定

この問題に就いて眞つ先に注意を拂つたのは、矢張り先覺者小島氏であつた。そして「日本アルプスに果して雪線なきか」なる一文を、本誌第八年に於いて發表した(4)のであつたが、雪線に對する考察が未だ纏つてゐなかつた爲、何等明快なる結論を導き出す事が出来なかつた。當時の氷河學者の多くは、例へば大關氏の様に(5)、單に現在の日本アルプスには雪線なしと決め込んでゐた中で、田中館氏だけは、平均雪線は三二〇〇乃至三四〇〇米であると報告してゐる(6)。その他植物學方面からは小泉博士が、現在に於ける氣候的雪線は、本土中部に



山 名		立 山		乗 鞍 嶽	
観 測 所 の 標 高		2454m.		2760m.	
八 月 平 均 氣 溫		12.5°		10.1°	
氣 溫 遞 減 率 (百 米 に 對 し)		0.6°	0.5°	0.6°	0.5°
氣 候 的 雪 線 該 當 高 度	+4°-3	4371	4754	4277	4580
	+4°+3	3371	3554	3277	3380

於いて四二八七米より高くはないであらうとの推定を下してゐる(7)。

現在の日本アルプスに於ける氣候的雪線の高さを算出する爲に、筆者は次の如き三通りの方法を用ひた。

第一の方法は氣溫の遞減率に依つて、氣候的雪線の氣溫に相當する高さを求めるのである。氣候的雪線に於ける氣溫と云へば、常識的に考へると盛夏に於ける零度等温層と一致するものゝ様に思はれる。併し氣候的雪線と云ふものが、溫度ばかりでなくて、降水量や蒸發量の影響をも受ける複雑な氣候的現象であつて見れば、決してある一定の氣溫のみを以つて、表現しつくされる様な事は無いのである。此處では假りに緯度三五度乃至七〇度の間に於ける氣候的雪線の位置は一年中で最高を示す月平均氣溫が、一度乃至七度なる値を持つ場所に相當すると云ふ、ケッペンの報告(8)に據る事とする。

次に高さによる氣溫の遞減であるが、之が山に依つて違ふのである。我が國では男體山、伊吹山、大臺ヶ原山等に就いてなされた若干の報告がないではないが、残念な事には、未だ日本アルプスに就いてのこの種の研究が發表されてゐない。又熱帯及び緯度六十度迄の温帯の山岳に對して、ハンの與へた平均數値は百米に對して〇・五五度であるが(9)、これは年平均

均であつて、氣温の遞減は又季節に依つて異なるものであるから、嚴密に云ふなら、此處では最高平均氣温を示す月に於ける遞減率を使用せねばならないのである。それで之もケッペンが上記の報告に發表してゐる、最高氣温を示す月に於ける遞減率、百米に對して $\circ\cdot五$ 度乃至 $\circ\cdot六$ 度なる數値を用ふる事とした(10)。

これらを用ひて、立山並びに乗鞍嶽(11)の觀測報告から、その氣候的雪線の高さを求めると七頁の表の如し。

尚之に關聯した二三の興味ある資料を記しておく。平田氏は氣象學方面の材料から八月に於ける零度等温層の高さを算出して、本州中部に對しては四三〇〇米なる値を得た(12)。先に用ひた遞減率によつて、之から氣候的雪線の高さを求めると、四一三三米乃至二九〇〇米となる。

又中野氏は槍ヶ岳頂上三一七八米の、八月に於ける平均氣温を約四二度と推定した上、勿論氷雪を保有し得ざる温度なり(13)と斷つたが、氷雪を保有し得ないのは果して温度のみのせいだらうか。

第二の方法は、積雪日數が高さと共に増加する割合を用ひて、積雪日數の丁度三百六十五日になる様な高さ、即ち氣候的雪線の高さを求めようと云ふのである。ヘブナーが獨逸で研究した處に依れば(14)、積雪日數の増加率は、低地では百米昇るにつれて、平均十五日増し、高地ではそれが平均十日と云ふ事になつてゐる。然してこの増加率の變るべき高さは、所によつて一定してゐないらしい。富山縣船嶽に於ける積雪日數九十日(15)から起算し、假りに百米につき十日の増加率を用ふるとすれば、氣候的雪線の高さは二九三〇米と云ふ事になるが、我が國では積雪日數に關する調査が今の處尙不充分であり、特に山岳地方に對してその感が深いのであるから、かくの如き増加率は勿論研究されてゐず、従つて上述の如き方法に依つて得られた結果は、單に參考にまで出して見た數に過ぎないものである事を、承知しておかねばならない。

第三の方法は垂直分布の理を敷衍し、類推に依つて氣候的雪線の位置を決定せんとするものである。この爲に

は先づ森林限界 (Waldgrenze) の上、幾何の高さが氣候的雪線に該當するかと云ふ事を、知つてゐなければならぬ。處でこの森林限界と氣候的雪線とは常に並行するものではなく、又その間の距離も世界の各地に就いて決して一樣でない(16)。それ故これも氣候や土地の餘程よく似た山岳と比較するのになかつたなら、そこに用ふる數値は無意味となつて了ふのである。併しこの方面の研究も未だ數少くして、適當な資料が得られぬから、氣が進まぬ乍らも、此處では歐洲アルプスに於けるこの平均距離八五〇米(17)を借りて來る事としよう。日本アルプスに於ける森林限界の高さは、平均が約二五〇〇米位である(18)。之にこの八五〇米を加へると、求める氣候的雪線の高さは三三五〇米となる。

さて以上に述べた三方法は、之をも少し詳細に吟味するならば、そこに使用された資料の適、不適を論外に措いても、尙夫々に理論的に缺陷を有してゐて、爲に到底嚴密な批判には耐へ得ないものとなるのであるが、此處ではこの上かゝる點に亘つて論議を試みる事は省略しておいて、要するに現在氷河を持つてゐない様な山岳地方に於いて、その氣候的雪線の高さを、理論的に求める直接的な方法は、未だ一つとして發見されてゐないと云ふ結論を記するに止めておく。

### 日本アルプスの萬年雪

現在の日本アルプスに於ける氣候的雪線の高さを、理論的に求める事に失敗した筆者は、一先づ氣候的雪線を離れ、こゝに改めて認識し得る雪線として、地形的雪線に關する考察から試みる事としたい。その爲には先づその材料となるべき萬年雪の吟味から初めなければならぬ。

萬年雪と云ふ言葉は古くから存するにも拘らず、萬年雪そのものは往々にして唯の殘雪 (isolirte Schneeflocke) と混同され勝ちであつた。否寧ろ、唯の殘雪が往々萬年雪と看做されたのである。萬年雪とは、盛夏に至つても消えない許りでなく、更にそれから越年する様な殘雪 (perrenierende Firnhecke) を意味するものである。それ故會つての様に日本アルプスの登山と云へば、初夏から盛夏の候に限られてゐた頃には、まだ本當に萬年雪は發見されてゐなかつたものと云へる。

日本アルプスの殘雪は梅雨明け頃はまだ仲々豊富なものである。それが夏の太陽にあつて急速度で融けて行く。その上歐洲アルプスなどと較べれば新雪の來方が遅い様だ。それも年によつて違ふであらうが、それでも少くとも九月一杯はまだ確實に積雪を見ない。十月もその前半は積雪の無い年の方が多いのではないか。この事は生物の生活には直接の影響を與へてゐるものであつて、例へばかめむし、ばつたと云つた様な不完全變態の昆蟲が、日本アルプスの高山帯にまで侵入し得るのは、この積雪の無い期間 (Aperzeit) の延長を、その發育に利用する事が出来るからであらう。併し殘雪の方は、九月以後になればもう顯著には融けないと云ふ事を、筆者は既に報告しておいた(19)。それ故九月以降に残る殘雪は、之を萬年雪と認める事が出来る。

かくの如き眞の萬年雪は存外に少ないものである。殘雪に彩られた七月の日本アルプスの大觀に接して狂喜した人が、新雪の降る前に同じ場所から、も一度秋の日本アルプスを眺め直したならば、その赤茶けた、變化の乏しい山の様子に、かくも印象が違ふものかと驚いて了ふであらう。萬年雪などは何處かの谷蔭にすつこんでゐるのか、それともうす汚いその表面の保護色に依つてか、一向見えない。ウエストン長老も、もし秋にばかり歩いてゐたのだつたら、或ひは日本アルプスなんて呼ぶのに躊躇した事だつたかも知れない。

萬年雪が盛夏を過ぎた九月以降でなくては認め難い以上、日本アルプスの地形的雪線も亦、盛夏に之を求め、事は困難である。何となれば日本アルプスの地形的雪線は、日本アルプスの萬年雪を以て決定するより外ないからである。けれども日本アルプスの萬年雪の調査はまだ充分でない。その調査が完成された上でなくては、地形的雪線としての決定的な數字も與へる事が出来ない。それ故こゝには筆者が曾つて報告した劔澤の萬年雪(20)以外で、筆者の知れる萬年雪の分布を報告し、以つてその資料に供する事としたい。

先づ上高地であるが、奥穂高の懸崖の下には、或は岳川から奥穂へ直接ディレクトに登つてゐる澤の中途(一九二二年秋)や、或は疊岩の下(一九二五年秋)などに小さなものを見る。又、下又白から奥又白へかけて、前穂高の山脚をなしてゐる絶壁の下に、ひどく汚れた、一目見ても雪崩のデブリを思はせる様な、残雪の塊りを發見する事があつた(一九二五年秋)。前穂高奥又白側の岩壁の下及び、涸澤のカールの底にも僅かであるが萬年雪を見る(一九三二年秋)。雪崩で有名な針ノ木の雪溪などには案外に萬年雪が残らぬ(一九三〇年)。萬年雪の巢窟は何んといつても立山・劔であり、鹿島槍から白馬へかけての後立山山脈である。

劔澤の萬年雪に就いては重複を避け、立山では御前澤(21)、内藏助澤、眞砂澤各源頭のカール底に、又劔以北では小黒部の中ノ谷や西谷の奥に、多少の萬年雪が残らしい。これは一九三〇年の八月末に後立山山脈の上から觀察した處による。この夏は残雪が一般に少なくて、白馬の大雪溪さへがすっかり融けた——勿論これはジャーナリストの誇張である——などと騒がれた程であつた。かう云ふ年にも拘らず、筆者はカクネ里に入つて、其處に、勿論豫期して行つた事ではあつたが、その豫期以上の大残雪を發見して、驚嘆して了つたのである。

その年の八月三十日であつたから、もうこの時の残雪を萬年雪と看做して大過なからう。いや事實は既に正眞

正銘の萬年雪だつたのだ。その年度の雪はもうそれまでに消えて了つて、後には唯、劫經た奴だけが表面にその姿を現はしてゐたものと思はれる。何れにしてもその氷化の程度と云ひ、裂罅クレバズの開き方と云ひ、劔澤で見たものと殆んど變りなかつた。唯違ふ處は八月末と云ふだけに、太陽の照射は秋と較べてはまだ餘程強かつたから、殘雪は表面から融ける。處でその融雪水(Schmelzwasser)が最早氷化した雪層内に浸透して行く事が出来ない爲、雪面上を流れて、その流れが集つた所に溝を掘る。殘雪の表面にはかう云つた小川の勢ひよく流れるのが至る處に見受けられ、それが又所々にあいた堅穴カタアナに瀧となつて流れ込んでゐる所まで、全く氷河上の現象そのまゝであり、この點は秋の劔澤では見られなかつたものであるから、萬年雪の氷化を示す一つの有力な證據として、特に注意を促しておきたい。

鹿島槍を取巻く澤の中にはカクネ里のそれ程大きくはななくとも、冷の北俣、鹿島本流のアラ澤、白岳の方へ入る本流の奥などにも、尙相當の萬年雪を見る事が出来る。鹿島から北、白馬の大雪溪に至るまでの間にも、平川や松川の南俣の奥には萬年雪は殘るに相違ないが、未だ實地について見てゐない。劔澤やカクネ里の様な大きい萬年雪こそ、もう何處を探しても得られまいが、點々として散らばつてゐるちつぽけな萬年雪は、まだ數へればいくらかも出てくるだらう。それから日本アルプスと表題には云つておき乍ら、斷りもなしに北アルプスの事ばかり論じてゐる様だが、筆者の知る範圍では南アルプスに萬年雪はなく、又木曾駒に就いては何等資料を有してゐないのであるが、本篇に於いては特に必要のある時の外は、そんな事にはお構ひなしに、今後も専ら北アルプス許りを論議の的として行くつもりである。

## 萬年雪の種類

以上に於いて日本アルプスに於ける萬年雪の分布の概念は得られた事と思ふ。筆者は更にこの分布の問題に關して、もう少し詳細に吟味せんが爲、暫くその領域を限定して考察したい。此處ではその爲に再び劔澤流域を選ぶ事とする。

夏の初めに別山乗越でショート・スキーを着けたなら、そのまゝ一滑りで眞砂のキャンプ場まで滑つて行けた劔澤の大雪溪が、日毎にその形を縮少して、臆てカール内に残つた残雪と、雪溪プロパーとに別れる。この兩者の間の隔りはその後も次第に増して行くが、これはどちらかと云へばカール内の残雪の減退によるものであつて、愈々萬年雪として残る頃になれば、カール内としては別山乗越の下にほんの僅かな萬年雪が残るに過ぎない。そしてこの時兩者間の隔りも最大に達して、ざつと五百米許りの開きを作つて了ふのである。このカールの上端、稜線近くに残る所の萬年雪と、雪溪プロパーの萬年雪とを區別する爲に、筆者は假りに前者の事を「上位萬年雪」、後者のことを「下位萬年雪」と呼ぶ事にする。

然る時は所謂劔澤の大萬年雪なるものは、上位萬年雪を意味するのではなくて、それは寧ろ一七〇〇米附近から二三〇〇米附近にかけて屯する、その巨大な下位萬年雪を指してゐるものである事を知るであらう。次にこの二種類の萬年雪の成因並びに性質上の相違を調べて見よう。

先づ考へねばならぬ事は、かう云つた萬年雪となるべき雪が何處から與へられたか、即ちその由來についてである。上位萬年雪からその吟味を初めて見るに、このものはその分布位置から判斷して、自然的な降雪以外に他

からの補給と云ふものを持たない、と云ふのは雪崩に依る積雪量の累加と云ふ如き条件が具つてゐないのである。併し自然的な降雪と雖も亦、地形的な要因としての山脈の方向、及び季節風の方向に影響される。それ故南北に走る日本アルプスが、冬季に西北の季節風を受ければ、雪は勢ひ東側に多く堆積する。その結果として残雪は東側に多く、萬年雪も亦殆んどその大部分は東側に限られて了つてゐるのである。この一般原則はこゝにも適用されて、別山乗越下の上位萬年雪は矢張り東側に残つてゐるのである。

そこで、一度もとに歸つて、この上位萬年雪を、より一般的な下位萬年雪から區別するべき點が、前者には雪崩に依る積雪量の累加と云ふ條件が無いと云ふだけであるとしたならば、然らば雪崩の絶對に起りそうもない場所は何もそんな主尾根近くだけではなしに、もつと低い所にだつてある。そんな處にも亦、この種の萬年雪が見出され得る懸念が無いであらうかと云ふ疑ひが起る。然し筆者の調べた限りでは、かくの如き事實は存在しない。そこでこの萬年雪の分布が主尾根筋に限られてゐるのには、何か他の條件が伴つてゐなくてはならないと考へるのである。

春山の経験者は積雪の爲に、尾根通しの或部分が廣くなつて、夏よりもずつと歩き易くなつてゐる所を知つてゐるだらう。この現象は尾根の風蔭に雪が堆積したものであつて、その積雪面が本當の山稜を掩ふ積雪面と、同一面をなして續いてゐる處も雪庇と同様であるが、あのデリケートなバランスを保つた突出物の方は餘り發達しないで、寧ろ根のあるガッチリした積雪が、稜線から時には五六間も突き出してゐようと云ふものである。こんなのが残雪期になると、尾根からほんの僅か下に、雪堤となつて残つてゐるのを見る。上位萬年雪はこの雪堤と成因的にも形態的にも甚だ似通つたものでないだらうか。この推察は一應は正しい。何となればこの推察に於



いては、兩者の地形的な要因を同一と看做し得られるからである。それならば何故すべての雪堤が残らずに、ある特殊の場所にだけ、それは上位万年雪となつて残つてゐるのであるか。こゝまで追求して行くと、最後には矢張り何か氣候的な要因を引き合ひに出さざるを得ぬ。

この邊で一度方向變換をして、筆者の所謂下位万年雪に就いて考へて見たい。もつと残つてもよさそうに思へるカールには案外万年雪が残らず、反つてそれより下方に遙か多くの万年雪を見る。これは今日の日本アルプスの持つ一つの特<sup>キヤラクテリスチック</sup>性とも考へられる。そしてかくの如き下位万年雪の分布状態に就いては、前節に於いて大略述べたつもりである。こゝにはこの下位万年雪が如何に雪崩と密接な關係にあるかを少し記しておかう。

先に記した奥穂高や前穂高の中腹にかゝつた、或はその山脚の何處かの隅<sup>ぐま</sup>に潜んだ小さな万年雪が、雪崩のデブリの堆積から成る事は殆ど疑ひの餘地無き所であり、又かゝる種類の万年雪は黒部や双六の様な狭谷の、日當りの少ない場所なら、案外低い處にも隠れてゐる可能性があらう。その上かう云つた直接雪崩に養はれてゐる様な万年雪なら、年によつて雪崩は出ぬ事もあらうし、出てもその度数や大きさに相違もある事だから、必しも毎年一定の場所に存在してゐるものとも限らない。一例を挙げれば黒部上廊下の金作澤出合は、恐らく万年雪となつて残るであらうと思はれる様な、立派な雪<sup>スノーブリッジ</sup>橋を黒部本流に架してゐる事もあり(一九二七年八月)、又全然雪橋を見ない年もある(一九二二年及び一九二五年八月)。

かう云ふ變<sup>フラクチュエイト</sup>動のある小さな万年雪は別として、劔澤やカクネ里の様な大きな万年雪迄が雪崩のデブリばかりで出来てゐるものでも無からうが、さりとて万年雪となつて残る程の雪溪には必ず雪崩の影響が伴つて居り、この影響として積雪量の累加はもとより、又雪崩のデブリそれ自身が残雪の氷化を促進してゐるものと考へられ

るのである。實際に大きな下位万年雪の分布位置を調べて見れば解る事であるが、それらは決してその位置から雪崩を起す様な急傾斜面には無く、寧ろ反對に急傾斜面に取巻かれた、比較的傾斜の緩い谷底にあつて、四圍の急斜面から落下する雪崩を悉くそこに集積するには全く好都合な場所なのである。

かう云ふ事實から更に万年雪の分布が、山容と關係ある事を知るのである。即ち山勢の急峻な山では、山の上に積るべき雪が雪崩れ落ちて、谷底に大きな下位万年雪を作るに至る。劔や鹿島槍附近に日本アルプス中の最も大きな万年雪の存する事は、又この爲でもある。この反對に山頂部の緩漫な山、雪崩の減多に起らぬ様な山では上位万年雪の方が下位万年雪よりも豊富であらうか。

上位万年雪は下位万年雪の様に顯著でない。従つてその分布に關する資料も甚だ少ない。これに屬するものとしては、先に擧げた別山乗越のもの、外、劔附近では三ノ窓、小窓、大窓の源頭に小さなが残るらしい。立山東面に並ぶカールの底に残る万年雪の方は、カールに於ける雪崩發生の可能性と、その分布位置の類似性から見て、之は寧ろ下位万年雪に屬せしめるを適當とする。立山では反つてその西側の急斜面に處々小さな上位万年雪を見る。

後立山山脈では今の處確實な上位万年雪を發見してゐない。併しその夏に於ける雪量から推して、白馬と白馬旭との鞍部の雪田などは、その一部分が万年雪となつて残るのでなからうか。白馬以北になると、今度はそれ以南の様に東側が懸崖とはならず、谷は廣く打開けて、山容も亦緩やかである。従つて雪倉、朝日の附近にもつと典型的な上位万年雪が無いものだらうか。筆者は秋にこの方面を歩いた經驗が無いので、切にその示教を待つ次第である。

## 二種の地形的雪線

さて上述の如く日本アルプスには、之を明かに區別する事が出来る二種の万年雪が存在するとせば、その地形的雪線も亦之に従つて二通り考へる事が出来るのである。そこで假りに下位万年雪の下端を結ぶ様な地形的雪線を指して「下位地形的雪線」と呼び、上位万年雪の下端を結ぶ處の地形的雪線を指して、之を「上位地形的雪線」と呼ぶ事とする。

然して始めに與へた定義だけでは、尙その意味が不明瞭と思はれるから、こゝに地形的雪線とは、氣候的雪線の季節的雪線に對するが如く、地形的季節的雪線の一時相であり、然もそれは積雪が最も縮少せる時季——即ち万年雪の状態に至つた時季——に於ける地形的季節的雪線に相當するものとして、こゝに分つた二つの地形的雪線の性質を、も一度詳細に吟味して見よう。

一體季節的雪線なるものに二つ無き以上、之に對應する地形的季節的雪線なるものも亦、決して二つある筈のものではない。それ故もし地形的雪線が、地形的季節的雪線の一時相であるとするならば、同時に二つの地形的雪線が存在すると云ふのは、おかしき事である。然してこの地形的季節的雪線なるものは認識し得る雪線であり、ある時季に於ける積雪の下端を結び合はせて得らるゝ筈のものである。又このものは夏に向ふにつれて、段々上昇して行く筈のものである。それは下位万年雪があらうが無からうが問題ではないのである。それ故それは初夏の頃には、まだ下位万年雪の位置附近をうろつて居様とも、更に季節が進めば、下位万年雪などは取り残しておいても上昇する。劔澤のカールの残雪が雪溪プロバールから切れるのはその爲である。遂に地形的季節的雪線は

その年の中に昇り得る極限にまで達する。するとこの時の積雪の下端は先刻定めた地形的雪線に當る筈である。瓢澤のカールの残雪は次第に消えて行つて、遂に別山乗越の下に残る一つの上位万年雪となつて了つた。その上位万年雪の下端を以つて上位地形的雪線と名付けた。然らば先刻の定義の地形的雪線と筆者の上位地形的雪線とは何處が異なる點であるか。それは積雪と、單なる一個の万年雪との相違である。然し乍ら連續的な積雪 (zusammenhängende Schneedecke) などは、地形的影響の多い日本アルプスでは、最早降雪を見なくなつた六月中旬頃から求め難くなつて了つて、地形的季節的雪線は、地形的に好條件の具つた場所に残る残雪 (isolierte Schneeflecke) —— 勿論こゝでは雪崩の影響の無い残雪 —— の下端を結んで得られるに過ぎない。それ故昇り得る極限に達した時の地形的季節的雪線と云ふものも亦、地形的に好條件の具つた場所に残る万年雪 (isolierte Firnecke) で雪崩の影響のないものゝ下端を結んだものと云ふ事になり、従つて筆者の上位地形的雪線なるものは、この場合先刻の定義の地形的雪線に合致する。

以上から地形的季節的雪線とは無<sup>インデペンデント</sup>關係な存在である筆者の低位地形的雪線なるものは、雪線として大して重要なものでない事が、初めて明瞭となつたのである。即ちラツェル (22) の zweite, tiefere, orographische Firngrenze に相當する第二義的なものに過ぎなかつたのである。

そこで日本アルプスの地形線雪線とは、その上位万年雪の下端を結んで得る處の雪線であると定義しよう。然る時は之が即ち日本アルプスの認識し得る雪線なのである。

處ですぐかう云ふ問題が起つて來るのである。地形的季節的雪線の昇り得る極限の高さと云ふものは毎年一定したものでない。何となればそれはその年その年の氣候状態によつて決まるものであるからである。それ故日本

アルプスなどだと、年によつては地形的季節的雪線が、實際の山稜よりも高い處まで昇つて了ふ事があるのは事實だ。そんな時だと最早その年度に降つた雪は何處を探しても見當らず、其處には唯、少くともその年度以前に於いて蓄積された萬年雪の、鈍く光つてゐるのを見る許りである。

この場合もし先刻の定義に従つたならば、そんな年には日本アルプスに地形的雪線を認める事が出来ないと言ふ事になつて了ふ。然しそんな年でも、古いものは知らぬが上位萬年雪は存在してゐる。これ迄も認めない譯には行かない。勿論この上位萬年雪は、地形的季節的雪線の下に取残されたと云ふ點で、下位萬年雪と同一の運命にあるものとも云へるが、翻つて日本アルプスがもつと高く、従つて何處までも地形的季節的雪線の上昇を追求出来るものとせよ。然してその地形的季節的雪線を、その年度に相當する萬年雪によつて捕捉し得たとしても、それより下には尙連續的にこの古き上位萬年雪の存在する事を考へ得るのである。然らば如何に古いものであらうと、かゝる上位萬年雪の存在する限り、依然としてその下端を結ぶ線が、認識し得る雪線として認められるべきものであると思ふ。それ故筆者は筆者が先に與へた定義の變更を必要とはしない。唯此處に於いて地形的雪線（筆者の上位地形的雪線）とは必しも地形的季節的雪線の昇り得る上限と一致するものではないと云ふ事を付け加へておく必要を生じた。又地形的季節的雪線の季節的雪線に對應する如くに、地形的雪線が直ちに氣候的雪線に對應するものでは無い事を知つたのである。

### 氣候的雪線の定義の修正

そこで假りにこの上昇し得る限度に於ける地形的季節的雪線の事を、改めて「地形的氣候的雪線」と名付ける

事として、これが氣候的雪線に對してどう云ふ意味を持つものであるかと云ふ事を吟味して見よう。

抑も氣候的雪線の研究と氷河の研究とは切り離す事の出来ぬ關係にある。今假りに一つの線を假定して、毎年その線までは雪が消え、その線以上の雪は消えないものとするならば、その線より上では萬年雪が幾らかづゝでも蓄積されて行く筈である。かくして累積された萬年雪は、遂にそれが或量に達した時に、その自重のため、その線以下にはみ出して来る。これが氷河である。そしてかゝる線の事を、もとは漠然と雪線と呼んだのである。そして又この考へから雪線を以つて氷河を二つの區分に別ち、雪線以上を氷河の涵養區域 (Sammelgebiet od. Nährgebiet)、雪線以下を氷河の消耗區域 (Abschmelzungsgebiet od. Zehrgebiet) と名付けるに至つたのである (23)。處でもともと氷河は實在しても、かくの如き固定的な線を、その上に認識する事は不可能であつた。そしてそれは認識し得る雪線としての地形的雪線に對して、理論上の雪線として氣候的雪線の名で區別され、結局歐洲アルプスではリヒター (24) や、エーゲルレーナー (25) により、orometrische Methode に依つてその高さが算出されたのであつたが、かくの如き方法にては尙、依然として氣候的雪線の理論的存在を實證するに足るべき客觀性に於いて欠くる處があつたのである。

ではどうしても實在するものに就いて、その直接の觀察なり、觀測なりに依つて氣候的雪線を求める事は出来ないものであらうか。氷河の母體はその涵養區域の萬年雪 (Höheneis) である。その萬年雪が年々出來てこそ氷河は發生するのである。そこでこゝに年々出來る萬年雪の由來に就いて吟味して見るに、それは筆者の所謂地形的氣候的雪線以上に残るその年度の殘雪が、その年度の萬年雪として補給されてゐるために外ならない。處で地形的氣候的雪線は、その年の氣候狀態によつて、その上昇の限度に變動を有するものである。これ即ちその上に

出来る萬年雪の下限が變動を有する事となる。

それ故地形的氣候的雪線から知る處は、唯その年の状態に限られる。そこで何年かに互つてこの變動する地形的氣候的雪線の高さを求めて、之を平均したならば、そこに初めてその場所に於ける理論的根據の具つた氣候的雪線概念が得られるのである。筆者はこゝに於いて從來の様な、抽象的な、主觀的な氣候的雪線の定義を修正して、之に代ふるにこの「平均地形的氣候的雪線」を以つて、新たに氣候的雪線と定義せん事を提言するものである。従つて季節的雪線も亦、「平均地形的季節的雪線」を以つて表はされる事となるのである。

そこでこの修正された定義に依る氣候的雪線を、も一度日本アルプスに就いて求めて見る。既に述べた如く日本アルプスに於ける上位萬年雪の存在そのものが、それが少くとも或る年には地形的氣候的雪線以上にあつた事を證明してゐる。故に日本アルプスに於ける上位萬年雪の下限の高さ、即ちその地形的雪線は、地形的氣候的雪線の變動の範圍内にあり、少くともその變動の下限に近いものと看做し得るのである。それでその變動の状態に關しては、その下限を知る事が出来ても、その上限に就いては恐らく絶対に知る事は出来ないであらう。従つて實證的立場からも、現在の日本アルプスに於ける氣候的雪線の高さを求める方法は無いのである、唯地形的氣候的雪線と云ふものも、そう無闇に變動するものではあるまいから、今劍澤に於ける地形的雪線の高さを二七〇〇米とするならば、その氣候的雪線は案外近くにあるのではあるまいか。筆者は三〇〇〇米を漸く越す程度の所にその存在を想像してゐる(26)。

## カールの成因に關して

現在の日本アルプスに地形的雪線を認め、これを劔澤に於いては二七〇〇米と定めるにしても、それは別山乗越下のちっぽけな上位萬年雪が殆ど唯一の根據となつてゐるに過ぎない。然して上位萬年雪は平藏澤や、長次郎澤の源頭にも認める事が出來ず、別山や劔の頂上の殘雪は七月末に早くも消えて了ふ。地形的雪線がもしも地形的氣候的雪線の移動の範圍内にあるものなら、この二七〇〇米以上にもつと多くの萬年雪が存在すべきではなからうか。筆者はこの間に答へるに唯地形的條件がこれ以上の萬年雪を存在せしめるに不適當であると云ふ事のみを以つてする。但しそれは現在の氣候下に於いての話である。その現在に於いてさへ、氣候的雪線の位置は案外近いものと想像されるのだ。若し氣候状態が變つて、氣候的雪線が今より百米下降したらどうであらうか。別山乗越の萬年雪が更に大きくなる以外に、今存在せぬ様な場所に、上位萬年雪を見るに至る事も亦想像に難くないのである。

かくして氣候的雪線の下降が進めば、劔澤流域に上位萬年雪の占める面積は益々擴がる。それと同時に地形的雪線も亦下降し、遂に別山カールには鬮谷氷河を見るに至るのであらう。過去に於ける氣候の變化を考へる時、筆者はかゝる鬮谷氷河に依つて別山カールが侵蝕せられた可能性を充分認め得ると思ふ。今假りにこの場合の氣温の遞減を、百米に付いて〇・六度と假定しても、氣候的雪線を今より五百米下降さすのに要する、八月の月平均氣温の下降は僅かに三度に過ぎないのである。

併しこれだけでは雪蝕説の反駁として尙不充分である。それ故先づ雪蝕なる事實の吟味から試みて掛からう。



雪から融け出た融雪シユメルツツサ。水が積雪の底で再び地表に凍りついて、霜蝕作用を起す事も、又それが積雪下にある土砂の運搬作用をなす事もあるであらうが、それらを迄雪自身の直接的な侵蝕と看做す事は出来ない筈である。それ故雪蝕の定義から先づ融雪シユメルツツサ。水の侵蝕を除外しなければならない。

然らば雪自身の直接的な侵蝕とは何を意味するものであるか。雪は雪自身の重量に依つて地表を押し、雪自身の凝縮に依つてその接觸する地表を摩擦する。この二つが積雪の地表面に及ぼす機械的作用である。雪蝕論者の所謂雪蝕とはこれらの作用を意味してゐるのであるか。

併し雪と云つても、降りたての軽い雪から、最早氷に餘程近い性質の万年雪まで種々の階程がある。雪蝕論者の考へる、雪蝕を働く雪と云ふのは、恐らくそんなフワ／＼の新雪ではなからう。だからも一步進めて、それは特定の地點に残る夏の残雪に就いて云つてゐるものと假定する。

残雪が毎年略々一定の場所に出来るのは興味ある事である。そしてその残雪の形から、その名前を得てゐる様な山まであるのである。そして残雪の残つてゐる位置を悉細に調べると、それは屢々凹状を呈し、恰かもこの年々同じ位置に出来る残雪が、長年の間にかくの如き地形にまで侵蝕したものであるかの如く見える。併し乍らこの残雪が先か、それとも地形が先で、かゝる地形的な好條件が具はつてゐる故に其處に残雪が出来るのかは、それを決する前に一應吟味するべきであらう。

雪の地表に及ぼす作用は既に述べた。これを雪蝕作用と云ふならば、かくの如き雪蝕を筆者は否定するものではない。その代りにかくの如き雪蝕なら、雪のある處必ず行はれるべきものであつて、何も夏の残雪のみに限定される特殊能力ではなからう。その上これらの残雪の大部分は、遅かれ早かれ消え去るべき運命の下にある。そ

れは五六月の頃なら、まだ高山の中腹以上の大部分を占めてゐた積雪の、いはゞ残黨に過ぎない。然らば残雪の出来る場所と出来ない場所と云つても、雪のある期間から云へば僅か一箇月か一箇月半位の差に過ぎないではないか。そしてこの短期間に雪の性質が著しく急變化するとも考へられない。雪の性質から云へば、それは積雪の時であらうと残雪になつてからであらうと、少くとも此處で問題となるべき地表との接觸面に於いては、その變化は漸移的であるべきである。それ故残雪の雪蝕だけを問題にして、同じ様に一年の大半を積雪に掩れてゐ乍ら、唯彼より一箇月程早く雪の消えて了ふと云ふ事丈で、他の大部分の場所の雪蝕を考慮に入れないと云ふのは、矛盾の甚しいものである。

又、雪蝕地形と看做される様な處へ、残雪の消えた後で行つて見ると、土砂や石つ塊こぶばかりが出てゐて、植生を見ないから、成る程今でも雪蝕は行はれてゐると云ふ風に解され易いが、残雪の遅くまで残る場所では植物の生育期間 (Vegetationszeit) が縮小される譯である。爲に或時季以上まで残雪があれば、雪は融けても其處には植物が育たない事になる。従つてそんな處は雪の間はまだしもよいが、雪がなくなつて了へば植被が無い爲、風化や土ソフツクン流が行はれるものとしなければならぬ。それ故かゝる場所に現在侵蝕が行はれつゝあるとしても、それは雪以外のものに歸すべく、残雪と雖も雪である以上は、雪の持つ一般性を越えた活動は認め難いのである。併し雪蝕論者の中には氷蝕に對應して、たとへ僅かでもあるにしても、残雪も亦擬氷河的運動をなすものと考へ、こゝに雪蝕の意義を附與しようとする者がある。そしてボウマンの如きは残雪の運動を開始すべき雪量と、斜面の傾斜との關係を數量的に表はしたが(27)、筆者はそこにも尙吟味の餘地は大いにあると思ふ。

ある地表面に對して積雪量が増加して行く時は、雪と雖ももとより運動を起さう。だが雪の地表面に對する運

動は雪崩につきる。特に地表と直接の關係あるものは底雪崩につきると筆者は考へる。然らば何故雪にも裂罅クレバースが生ずるのであるかと云ふ反問が起りはしないか。答は至極簡單である。それは雪自身の凝縮によつて生じたものであると。そしてこの際に伴ふ機械的作用は既に雪の一般性として、筆者の認めておいた處である。寧ろこの作用をおいて何の雪蝕ぞと云ひたい位だ。この残雪の動く動かぬの問題を詳論する事は後に譲つて、こゝに少し底雪崩の作用に就いて述べておかう。

底雪崩の破壊作用は積雪の一般性としては數へられないものかも知れぬが、雪蝕を論ずる限りは之を無視する事が出来ないであらう(28)。しかも當の雪蝕論者は案外こゝに注意を拂はなかつた。こゝに云ふ底雪崩は必しも普通に意味される全層雪崩のみを云ふのではない。筆者の既に述べた様に(29)、發生區域に見る處の底雪崩は可成重要である。即ちこの種の雪崩の特徴は、ある發生區域に於いて、そのある部分のみが地形的に全層雪崩となり、それ以外の部分も、又崩落シュトルツバシ路の雪も地形的な條件から、雪崩によつては地層を裸出する事なしに、遂に残雪として消え去るのである。かくの如き雪崩は年々同じ場所に繰り返へされるものであるからして、全層雪崩となる部分の地表だけは年々雪崩に侵蝕されて、その結果は恰も河水の作用に見られる様な源頭侵蝕(Head erosion)を營む事になりはしなからうか。勿論雪崩の作用は一時的であり、雪崩れないで残る残雪の方は消える迄繼續的に作用するものではあるが、その侵蝕と云つても前述せる程度のものに過ぎないのなら、雪崩によるその方が遙かに優勢なものと考へられるからである。

要するに筆者は雪蝕を全然否定したのではない。寧ろ雪蝕の餘りにも微力である事を肯定するのである。従つてかくの如き微力さでカールを作るなどと云ふ事は問題にならないのである。そこで雪蝕論者も愈々最後の恃みと

して萬年雪を持ち出して來るであらう。即ち現在程度の殘雪では駄目であつても、過去に於いてはもつと殘雪が多量に存在し、その殘雪は又萬年雪となつて侵蝕を行つたものであると。けれども萬年雪が何處までも唯の雪であり、雪の一般性質以上に出ないものとするならば、程度の差こそあれ、それはかの殘雪の雪蝕と何處に異なる處が見出せよう。それ故その場合の萬年雪が、もし侵蝕を行ふものとすれば、そこには雪の有しない擬氷河的可動性を認めねばならなくなり、この可動性は又萬年雪の底の氷化によつて初めてもたらされるものである。即ち氷と云ひ、萬年雪と云ふも、要するにそれは表面の現象を捉へて論ずるからであつて、地表に接し、實際に侵蝕を行ふ部分は常に氷に外ならないのである(30)。これを認めて尙萬年雪の雪蝕などと拘泥する必要が何處にあらうか。それ故筆者は雪が、その種類は積雪であらうと、萬年雪であらうと、もしも先に記述したその一般性質以外に、改めて擬氷河的可動性を有するに至つた時には、之を最早廣義の氷河に含まれるべきものと看做し、その侵蝕は之を氷蝕と呼ぶのを以つて妥當とするものである。更に又現在の日本アルプスのカールに見る貧弱な上位萬年雪の量を、更に増大せしめんが爲には、氣候的雪線の下降を必要條件としなければならない事は、上述した處より明かである。

## 餘 論

以上にて日本アルプスのカールが形成された爲には、過去に於ける氣候的雪線の降下が必要であつたと云ふ從來の持論を、雪線及び萬年雪の吟味から立證した。處で日本アルプスの氷蝕地形としてはカールが常に問題とされ、又その分布もよく研究されてゐるにも拘らず(31)、カール以外の地形に就いては餘り注意されない傾向があ

つた。それ故立山連峯が、そのカール群によつて夙に著名となつたのに反して、後立山連峯では、針ノ木、マヤクボのカール地形が何時も唯一の例證に過ぎなかつたのは、聊か吾人にとつては物足り無いものであつた。

既に記せる處から明かなる如く、カール地形に關係あるものは筆者の所謂上位萬年雪である。然してその上位萬年雪の分布は甚だ地形的條件に支配されてゐる。この事は又カールの分布も同じ様に地形的條件に支配されるべきものである事を暗示するものである。それ故若しカール地形の現存から、日本アルプスの山頂部附近に於いては、カール形成以後に於いて餘り著しい地形の變化が無かつた事を假定し得るものとせば、現在カール地形の認められない様な山は、矢張りその當時に於いても、カール形成に至る迄の上位萬年雪を支へるだけの地形がない程、急峻であつたものと考へられる。

けれどもその場合は現在と異つて、氣候的雪線の降下と云ふ條件が、一つ加つてゐる事を忘れてはならない。それ故地勢が急峻であるため、カールを穿つ上位萬年雪となるべき雪が、總てその下の谷へ雪崩れ落ちたとして、これらの雪は又こゝで萬年雪となつて徐々に蓄積されて行くであらう。即ちこの場合のこの萬年雪が筆者の所謂下位萬年雪に相當するものであつても、かゝる萬年雪が累積して行けば、遂に氷河を涵養する迄に至るものである(32)。何となればこの下位萬年雪は上位萬年雪の一つの變形であり、その位置を變へたものたるに過ぎないのであるから。そしてその低位置にあるために受ける氣候上からの損失は、その深い谷間に隠されてゐると云ふ地形的條件の爲に相殺されるものであらう。

かくの如くして、その東縁が斷層崖に相當するものとされてゐる後立山山脈に、カール地形の存在が如何に貧弱であらうとも、其處には其當時立流な氷河が涵養されてゐたと云ふ事は、カール地形にも劣らぬ歴然とした地形的

痕跡が之を證明してゐるのである。即ちそれは鹿島槍をめぐる冷の北俣や、カクネ里のあの立派なU字谷である。そして現在の日本アルプスに残る萬年雪の代表的なものと云へば、劔澤にしても、カクネ里にしても、皆かう云ふ地形に残つてゐる下位萬年雪なのである。之と比較したならば、カール地形に残る上位萬年雪や、狭谷の日蔭に残る雪崩のデブリ等は、その量に於いても、その擴がりにも比較にはならないのである。そこで一つの疑問が起つて来る。過去に於いてその地形を作つたものも、矢張りこうした下位萬年雪であつた。唯その量が何層倍か大きかつたのに過ぎぬ。然らば此處に現在残つた下位萬年雪こそは、その當時侵蝕を遅しうした氷河の縮少した、將に死滅に瀕した殘骸と見る事が出来ないだらうか。又かう云ふ由緒を考へて來ると、如何に死滅に瀕したものと云へ、現在の下位萬年雪は尙僅かでもそこに流動の可能性がなからうか。否その可動性をその氷化した性質上認めるべきではなからうか。

そしてもしこゝに下位萬年雪の可動性を認め得たならば、先の定義により之を廣義の解釋による氷河と稱してもよい事になるのである。筆者は最後に、この興味ある問題を促へ來つて、之を俎上にのせ、以つて本篇を終りたいと思ふのである。

氷河の氷と、氷化せる萬年雪とは、本質的にその構造を異にするものであるとも云はれるが、要するにそれは一つのものゝ移り行きである。唯現在見る處の下位萬年雪と雖も、その表面まで相當に氷化してゐる。裂隙も開いてゐる。そして融雪水がその表面を流れてゐる。とかう類似點を先づ擧げておいて、さて根本的な相違とは何であるかと問はれたならば、第一にその發生的な相違を指摘しよう。即ち氷河の氷は雪線以上の涵養區域で作られたものが、押し出されて來たものであり、下位萬年雪の氷は雪線以下で現に作られてゐるものである。

又曾つてこゝに存在した氷河が下位萬年雪から發育したものとしても、それは先にも記した通り、雪線以上にあるべき涵養區域が、地形的に雪線以下へ移されたものと考へられるから、従つてその下位萬年雪は實質的には一種の上位萬年雪に外ならなかつたのである。

それは兎に角、現在の下位萬年雪が果して動いてゐるのかどうかは實地に就いて見るより外はない。雪溪に見られる裂隙クレバがその證據にならない事は既に説明しておいた。筆者が長次郎澤及び劔澤本流の下位萬年雪の下に入つて、直接觀察した處によれば、所謂雪溪の底には溪流が滔々として流れ、雪溪の雪は兩岸からの支へに依つて保たれた穹門形アーチの斷面を呈してゐたのである。かの雪崩のデブリが架する雪橋を想像せよ。雪溪とはこの連続的な大規模な雪橋と解するのが、最も正しい見方で無いだらうか。雪橋は動かない。雪溪も亦それが萬年雪から出來てゐようとゐなからうと、動き得ざる様に出來てゐる點に變りはない。

しかし同じ下位萬年雪と云つても、カクネ里に残る萬年雪は、劔澤その他の萬年雪に見る様な雪溪型を呈するものとは著しくその型を異にしてゐる。カクネ里の萬年雪こそは曾つてそこから氷河が発生したであらう處の、その涵養區域に相當する、U字谷の源頭に残つた下位萬年雪である。だからこの雪を指して氷河の萎縮した殘骸だと云ふのならどうだらう。併しこれは別山乗越に残る上位萬年雪に對して、曾つての閤谷氷河の殘骸であると云ふのと同理のものである。

現在の下位萬年雪は、現在の降雪量と、雪崩による補給とで辛うじてその餘命を保つてゐる。もし解ける量と積もる量とが一致しておればその萬年雪は成長も縮少もしない。けれども筆者の觀察せる場合の様に、その年度の雪がすっかり消えて了ふ様では、萬年雪も徐々にその形を縮めて行くの外なからう。涵養區域を持つた氷河でさ

へ、その下限 (Gletschergrenze) は年々移動して、或期間は前進し、又或期間は後退する。それ故一定の場所を占めて動かぬ万年雪が縮少すれば、遂に消え去つて了ふ事も想像される。反對に現在の万年雪が出来たのは或期間の氣候下における累積に依つたものであると考へられる。勿論万年雪と云つてもその實質は徐々に更新されて行くべきものだから、その形態だけに就いて云つても、如上の様な譯で、現在の状態を以つて直ちに地質時代の氷期と結び付け、氷期の氷河から繼續的に、次第に縮少して今日にまで至つたものと解する事は禁物である。殊に氷期後の氣候の變化が繼續的に、溫暖になつたものでない事は、既に色々な方面から實證されてゐる處であるから。

然らばかくの如き僅かの氣候變化で、万年雪が消えたり、或は成長したりするものとせば、現在こそ動かない下位万年雪の雪溪であつても、之が或量まで増大したならば、その自重によつて、今のまゝの位置から動き出す様な事は無からうか。氷期に北米の大陸氷河の中心となつた處は、ロッキーではなくて寧ろ山の無い、ハドソン灣を圍む地方であつた。偉大なる容積の下位万年雪を假定すれば動く事は當然である。けれども我々の場合、その爲に雪線の降下を必要とするのならば、何も下位万年雪のみを固執せずとも、涵養區域も具り、氷河は一人前に發達するに過ぎないのである。

先に記した如く現在の下位万年雪と地表面との關係は案外少い。之に反して上位万年雪の底は地表面と接して居り、又それは下位万年雪よりは急斜面に位置してゐる事が多い。けれども氣候的雪線の下にある、現在のちっぽけな上位万年雪は、之とて瀕死の状態だ。その可動性も侵蝕力も結局認め難いものであらう。そこでも一度現在見る雪溪型の下位万年雪に戻つて、之をアルプスの第二流の氷河 (Gletscher zweiter Ordnung) と比較して見た處で、發生的な相違、形態的な差別は尙嚴然として存在してゐるのである。即ち彼には急傾斜の部分に明か



に之を養ふ上位万年雪の存在を認め得るからである。下位万年雪が如何に擬氷河的形貌を具へてゐても、上位万年雪との縁が無くて、大切な涵養區域に當る部分が、秋になればガラガラガラガラの碎岩を露出せしめてゐる始末では、緩傾斜に残つた雪橋だけで、如何に動かうにも動き様がない。カルクアルペンなどではこの擬氷河的形貌を具へた下位万年雪の事をも氷河と云ふ名で呼んでゐるさうだ。下位万年雪も或る意味では眞正氷河への移り行きの姿である。條件つきの氷河である。併しもつと正確に云ふならばそれは矢張り殘雪であり、万年雪でしかあり得ないのである。

## 要 結

一、雪線なる言葉の持つ内容を整理し、之を大別して一時的雪線、季節的雪線、氣候的雪線、地形的雪線とし、特に氣候的雪線及び地形的雪線の意義について検討した。

二、九月以降に認められる殘雪を万年雪と看做し、日本アルプスの地形的雪線決定の資料としてその万年雪の分布状態を報告した。

三、日本アルプスの万年雪を分つて二種となし、名付くるに上位万年雪及び下位万年雪を以つてした。後者は雪崩の影響を享けるものであり、前者はこの影響を持たないものである。

四、この二種の万年雪から二種の地形的雪線が得られる。けれども上位万年雪の下限を結ぶ雪線のみが氣候的雪線に對して意義を有するものであり、この故を以つて之を日本アルプスの地形的雪線と定めた。

五、從來の氣候的雪線並に季節的雪線の定義を修正して、この兩者の經驗し得らるゝものを夫々地形的氣候的

並びに地形的季節的雪線とし、それらのものの平均數値を以つて氣候的雪線並びに季節的雪線となすべきであるとした。

六、現在の日本アルプスに於ける氣候的雪線の高さは、理論的にも實證的にも之を正確に求める方法は無い。けれどもその地形的雪線の高さより判斷して、劔澤に於いては三千米を漸く越す程度のもものと想定した。

七、積雪の一般性より論じて雪蝕の微弱なる事を主張した。但し底雪崩の侵蝕を雪蝕中に含めるならば、それは相當有力なものと認める。

八、積雪乃至殘雪に擬氷河的な可動性を認める時は、それは既に廣義の氷河であるとした。然して現在の下位萬年雪は一種の雪橋に過ぎないものとして、その擬氷河運動を否定した。

九、カールの成因に關しては、氣候的雪線の下降を必要なる條件とする。然るときは、その成因の説明として當然雪蝕よりも水蝕を以つてするべきである。

一〇、氣候的雪線の降下した場合、カールと無關係に、氣候的雪線以下からも氷河が生じ、その場合の水蝕地形としては寧ろU字谷を遺す可能性のある事を例證した(33)。

### 參 照

- 1 辻村太郎 1929 日本地形誌、一六一—一七〇頁。
- 2 小島烏水 1932 氷河と萬年雪の山、二五〇—三三〇頁。
- 3 Ratzel, Fr. 1886 Zur Kritik der sogenannten „Schneegrenze.“ Leopoldina, Hft. 22, Nr. 19—24.

- 4 小島烏水 1913 日本アルプスに果して雪線無きか、山岳第八年、一一二—一二五頁。日本アルプス、第四卷(1915)、二二五—二二五八頁。
- 5 Oesaki, K. 1915 Some notes on glacial phenomena in the North Japanese Alps. *Scottish Geogr. Mag.*, vol. 31, p. 116.
- 6 Shimotomai, H. 1914 Die diluviale Eiszeit in Japan. *Zeitsch. Gesell. Erdkunde Berlin*, 1914, s. 58.
- 7 小泉源一 1919 日本高山植物の由來及區系地理、植物學雜誌第三十三卷、一九三頁。
- 8 Köppen, W. 1920 Die Lufttemperatur an der Schneegrenze. *Pet. Mit. Bd. 65*, SS. 78—80.
- 9 Hann, J. 1903 *Handbuch der Klimatologie*, Bd. I, S. 214. 岡田博士に依れば、この數値は我が國に對しても適用可なり(岡田武松 1927 氣象學、三六一—四二頁參照)。但しハンは最近に於いては、この〇・五五度を〇・五六度に變へてゐる(Hann, J. 1926 *Lehrbuch der Meteorologie*, 4 Aufl., S. 125)。
- 10 この數値はケッペンが、緯度三度乃至四二度間にあつて、その位置が氣候的雪線より、垂直距離にして千二百米以上離れた、十五個の觀測所の報告に基いて算出したものであり(Köppen, op. cit.)。
- 11 富山縣伏木測候所 1931 立山累年氣象觀測成績、乗鞍嶽の分は梶岡百樹 1929 信濃の氣象(信濃郷土叢書第十二編)に依る。
- 12 平田徳太郎 1922 本邦山地及臺地に於ける氣温遞減率に就て、森林測候所特別報告第七號。
- 13 中野治房 1928 上高地溪谷及附近山岳植物生態調查報告、四頁(上高地天然紀念物調查報告の内)。
- 14 Heber, E. 1928 Die Dauer der Schneedecke in Deutschland. *Forschungen zur Deutschen Landes- und Volkskunde*, Bd. 26, Hft. 2.
- 15 農林省林業試驗所 1927 森林治水氣象彙報第九號、三〇頁、積雪表に依る。
- 16 Brockmann-Jerosch. 1919 Baumgrenze und Klimacharakter. *Beiträge z. geobot. Landesaufnahme d. Schweiz*, 6, S. 27.
- 17 Imhof, F. 1900 Die Waldgrenze in der Schweiz. *Gerlands Beitr. z. Geophysik*, Bd. 4, Hft. 3, SS. 302—306.

- 18 筆者の觀察によれば大體に於いて針ノ木峠—ザラ峠線以南では二五〇〇乃至二五五〇米、針ノ木峠—ザラ峠線以北では二四〇〇乃至二四五〇米である。
- 19—20 今西錦司 1929 劔澤の萬年雪に就いて、地球第十一卷第四號。
- 21 崎田龍二 1931 立山御前澤の谷頭に横はれる氷塊に就て、地理學評論第七卷第九號。
- 22 Ratzel, Fr. 1889 Die Schneedecke, besonders in deutschen Gebirge.
- 23 Brückner, Ed. 1887 Meteor. Zeits. S. 31 (Ratzel, Fr. 1889 Höhengrenzen und Höhengürtel. Z. D. u. Oe. A. V. Bd. 20 (1889)).
- 24 Richter, Ed. 1888 Die Gletscher der Ostalpen.
- 25 Jegerlehner, J. 1902 Die Schneegrenze in den Gletschergebieten der Schweiz. Gerlands Beiträge zur Geophysik, Bd. 5, SS 486—568.
- 26 Ortler に關する Fritsch の報告を參考として擧げると、地形的雪線と氣候的雪線との高度差は平均三二五米である (Schröter, C. 1926 Das Pflanzenleben der Alpen. S. 34 (1889)).
- 27 Bowman, I. 1916 The Andes of Southern Peru. p. 293.
- 28 佐々保雄 1931 登山者のための地質學、山岳第二十六年、五二七頁。
- 29 今西錦司 1931 雪崩の見方に就いて、山岳第二十六年、八九—九三頁。
- 30 辻村氏は Bowman の意味する、流動する萬年雪の侵蝕を、一種の氷蝕と看做した (前出日本地形誌一六三頁)。
- 31 西村健二 1927 日本アルプスに於けるカールの分布に就いて、地理學研究第四卷第一號、その他。
- 32 かくの如き氷河は一種の Lawinengletscher である (小川琢治 1932 日本の氷河時代に關する問題と其研究法、一三三頁)。
- 33 カクネ里に於けるU字谷は、一六〇〇米附近に至るまで甚だ顯著である。

# 遮日峯 北水白山 兄弟水

橋 本 秀 一

遮日峯北水白山紀行 付 咸鏡南道の山一般（覺書）

滿鮮國境の白頭山を中心に南東方一帯に展開してゐる蓋馬高臺は、所謂北低南高の地形を呈し、その南縁邊を形成せる分水嶺（斷層線）に近づくと共に、次第に隆起してゐる。

殊に咸鏡南道の中央部に於いて最も高く、鴨綠江上流の二大支流たる虛川江、長津江の分水嶺をなして、頭雲峯、遮日峯、北水白山、白山等の群山が南北に連つてゐて、小長白山塊に次ぐ鮮内第二の山岳地帯を形成してゐる。

これらの山々はいづれも海拔二五〇〇米を上下し、朝鮮に於いてのみならず本邦においても、有數の高山であるに拘らず、從來交通不便の爲あまり注目されなかつた。

昨春、不圖これ等の山々に心を惹かれ、登高計畫を立て、見たが、白頭山や茂山高原の諸峯とちがつて朝鮮の山の内でも比較的開拓の遅れた、これらの山々には、全く據るべき資料がなく、いさゝか困惑の態であつた。

幸にも、照會に對して、總督府山林部はじめ各地方から、懇切な回答をいたゞく事を得たので、大體の見當もついて、夏休みを利用して出掛ける事にした。

大して技術的困難がある様にも思はれなかつたので、何等特別の用意はしないで、たゞ天幕だけは極く小型のを一個携へる事にした。

最初の豫定では薬水川上流を繞る北水白山、遮日峯、白山及び北方の頭雲峰に登頂の計畫であつたが、運悪く朝鮮特有の豪雨に遭ひ、日數の都合上、後二者は放棄せざるを得なかつた。

八月中旬迄を滿洲で過ごし、八月下旬京義線を南下し、京城に下車し、同夜京元線を経て、北鮮東海岸の咸興府に到着したのは、廿三日の午前であつた。

朝夕は已に涼しい頃であつたが、日中は未だ残暑が厳しくて、地上の風物凡てが白く耀いてゐた。營林署長不在との事で、道廳産業課の日技師に相談に行つた。とにかく營林署の方でも便宜をはかつて下さる事になつた。

非常な好天氣であつたが、連絡の都合上同日は滞在し翌朝出發する事にした。以下記録を摘要すると、

八月廿二日——九月三日（昭和七年）

京城——元山——咸興——松興——白巖山——元豐——道安——漢袋里——雲隱嶺——遮日峯——北水白山——兄弟合水——薬水里——雲隱嶺——元豐——咸興——京城

人夫 魏植九 鄭源教（元豐森林保護區巡視）

地圖 五萬分ノ一 羅興里、雲山里、雲潭、廣大里、楊坪里、陸口里、青山嶺、院洞里 甘萬分ノ一 長津、洪原、甲山、北青、江界、熙川、惠山鎮、厚昌、白頭山、羅南、會寧、吉州、城津

## 赴戰江の上流

北鮮の都會の朝は雲が低く、陰鬱な空氣が街々を蔽つてゐた。西咸興驛から私鐵に乗り咸興の町を後にした（朝鮮鐵道咸南線）。營林署の方々が驛迄見送つて下さつた。

列車は城川江の廣々した河原に沿つて北上し、晝前に終點の松興シヨウコウに着いた。こゝからインクラインに依つて、

平地帯（東海岸平野）と山地帯（蓋馬高臺）との間の斷層約一〇〇〇米を、一氣に昇る。

約一時間を要して、白巖山（一七四一米）の東鞍部に達した。霧がしきりに針葉樹に去來する高原の眞晝である。下界は曇つてゐたのに、この一三〇〇米の高原は却つて晴れてゐる。

こゝ蓋馬高臺の南邊上に下り立てば、一帯が北方に緩かに傾斜してゐる丘陵性の高原であつて、乾き切つた黃褐色の草丘の重なりが蕩々として北へつゞき、見渡すはるか地平の果に濃藍色の山波が走つてゐる。その内でピラミット形の平頂な峯が遮日峯と思はれた。山際のは埃メラルドに冴えて雲一つない。

一帯の風光は朝鮮といふよりも滿洲めいてゐて、鴨綠江の流域に入るの感を深くする。この邊は下流一帯にかけて、長津江の支流たる赴戰江の水源地であつて、數年前迄は大密林であつたが、朝鮮窒素肥料會社の貯水池が下流に造られてから、開發され交通も自由になつたのである。

こゝから更に、玩具の様な鐵道が北へ通じてゐる（一日三往復）。我々の乗つた列車は丘陵の間を縫つてゆる／＼と下りて行く。山火事で焼き拂はれた枯木の幹が、白い陰慘な林をなして、線路の兩側に連つてゐる。可憐な高山植物の遅れ咲きも多い。赴戰江の源流は無限のうねりを作つて、淵をなし、瀬を早み、原野の中をキラキラ光つて流れてゐる。兩側の丘陵に市松模様を持つ火田が増えた頃、宿泊豫定地の元豊に着いた。

すぐ森林保護區に行き、石山主事に何分の援助を願つた。人夫の世話をしていただく。事務所の前にはチウウノスケサウが植ゑてあつた。元豊は戸數二百戸位の町で、家は比較的新しく、街並も揃つてゐる。材木の集散が行はれるこの沙土の町は北滿かシベリヤの町の様な氣がした。

夜になると高原の冷氣が肌にしみて、宿（朝窒農林部）のオンドルの暖氣が快よい。窓を開くと、大空には海

原を航行する汽船の船尾燈の様に大きな星の數々が瞬き、山犬の啖り泣く様な悲鳴がしきりと聞えた。

翌朝、戸外は白く霧が罩めてゐたが、次第に晴れて、その内に立派な天氣となつた。停車場の前から眺めると、原野を距て、遮日峯、北水山の淺黄色の山肌が朝陽に輝いてゐる。支脈上にある最高峯北水白山も一寸見えた。南から來た汽車に乗り、終點道安で下り、更にトロッコに乗つて、赴戦江岸の矮林や木立の茂つた濕地に沿つて進むと、前方に貯水池の黒すんだ水が表はれた。幅五町位の山峽が洋々たる水を湛えて屈曲しつゝ北方へ伸びてゐる。

發動機船（一日二往復）は山峽を縫つて北上する。右岸は斷崖つゞきで白波が岸を嘯んで居り、左岸はゆるやかな丘陵状をなしてゐて畑や人家が點在してゐる。出發後卅分、右岸に取入口があつた。

この貯水池は昭和六年度完成したもので、主として興南の朝窻工場の所要電力發電用に使はれてゐる。長さ五里、幅約十町で天然の地形をよく利用してある。大體において、廣大里圖幅（五萬）の赴戦江岸の一二〇〇米の等高線がその水域らしい。この工事の爲に莫大な費用と貴重な人命が失はれた。廣大里、漢堡里等水底に沈んだ部落も少くない。水はトンネルによつて南送され、分水嶺を越えて、平地帯へ一氣に一〇〇〇米落下する。

貯水池の北端は漢堡里西方の長さ二町高さ二〇〇呎の堰堤であつて、これによつて赴戦江の北流を堰き止める。水は分水嶺の反對側へ落されるのであるから、實質的に云つてこのダムが東海岸と西海岸の分水界である。天然の分水界を移動せしめた人間の力も亦偉大なりといはねばならぬ。

ダムで下船して、赴戦江に沿ひて少し下ると、小漢堡の町に出た。こゝから南へ坂を登り、再び貯水池の岸へ



出た。この邊では貯水池は東へ半里近く入江をなしてゐる。

三時頃、漢堡里ハンポウリの谷の入口に出た。楊柳や叢の散在してゐる河原で、所々に白い砂地があつた。それは砂金採取の爲に醜く掘り返へされてゐた。

川の左岸に白砂を敷いた立派な道が通じてゐた。路傍には百合の花や秋の七草千草が瞭亂として咲き亂れ、道を時々愛らしい綺リスが横切つた。それは何となく自然味の溢れた道であつた。

道は川の左右に沿つて上つて行つた。河幅は次第に狭まり、河床は深くなつた。何時の間にか我々は山あひの中に入つてゐた。

河岸の段丘は相當發達してゐて、その上には農家が時々あつた。白い花の咲いた馬鈴薯の畝や、家々の白壁を、夕陽が平安と寂寞の色に彩つてゐる。凡てがアルペン風の風景畫である。

斜陽を背に浴びて道を忙ぎ、南洞の谷との出合の坪上徳伊トクイ（鑛山事務所がある）に着いた時、已に日は蔭ろつてゐた。此處から先は道も狭まり、道端に灌木や小草が蔓り出した。聽て行手に明日越す豫定の二〇一三米の峠が現はれた。上部一〇〇米は草原の斜面をなしてゐる。道は森林に入つた。溪流は見えなくなり、音のみが消えた。

その日は上洞サントウに泊つた（一五四〇米）。家は漢堡里最奥の一軒家である。今年六月一名の日本人が遮日峯へ往復したと聞く。大井氏を指すのであらう。

日暮れても大空にひろがる残光がいつまでもこの谷間を明るく照してゐた。

遮 日 峯

朝來小雨が降つた。昨夕峠の上にかゝつてゐた鯖雲は雨の前徴だつたのだ。これから先は未知の道なので、自重して滞在する事とした。

家は典型的な火田民家であつて、簡單極まる建方である。荒削りの丸太作り、泥壁の三間に五間位の堀立小舎であつて、長方形を三分して、中央を土間、片方を牛小舎、片方を臺所及び居間とする。臺所と居間の床は土壇で築き、下にオンドルを通ずる。屋根は樺皮で葺き、上に石を置く。非常に素朴であるが、防寒的に出来てゐる。

昨夜一諸に泊つた旅人連は、小雨降る中を、雲隠嶺（二〇一三米峠）を越えて豊山の方へ行つた。皆平地帯の離村者であつて、三水郡の方へ行つて火田民になるとの事であつた。北鮮の山地には到る處この様な漂泊者が多く、朝鮮の文學や民謡にはよくその氣分がうかゞはれる。さはれ、近代文化の波に追はれて山間を流浪する彼等の姿に、一掬の同情を灑ぐ者は私のみであらうか。背に荷を擔つて希望の嶺を見上げてゐる彼等の白衣の姿は、聖書の中の一節を思ひ起さす——。

八月廿七日 雨催ひの層雲が四方を蔽つてゐて、昨日に劣らぬ悪い天氣であつたが、晴れさうだつたので、急ぎ出發した。林の下道はしつとり濡れてゐた。乳色の霧が樹々の梢を閉ざしてゐる。しばらく上つて丸太橋で左岸に渡つた（地圖の右岸點線路は誤）。

森林が時々疎らになつて、野菊や高山植物の生えてゐる草原が現はれた。對岸に大きな澤が斜に入つてゐるの



遮日峯

岸波義彦



薬水川を経て北水白山を望む

岸波義彦



が霧中に見える。

その内森林は無くなり、一面に露おいた草の斜面となつた。一筋の道が霧の中を先へ先へと現はれて、我々を導いた。峠の上部は少し急であつて、徑が稻妻形についてゐる。

漸く雲隠嶺（クムカシノリ）に着いた。嶺といつても峠である。祠などはなく、杖が一本立つてゐるに過ぎない。豊山への道は森林を分けて東へ下りて行く。あたりは霧の爲に灰色がうつてゐて、彼方の針葉樹の輪廓が幻想的に見える。

磁石を頼りに南へ尾根を登ると、すぐ森林が始まつた。縦と落葉松の混合林であつて、下草には一面に蘚苔が生えてゐる。歩き易いが、それでも時々倒木があつて、邪魔となつた。尾根を一〇〇米も登ると、矮小な偃松の下生えが現はれ初めた。その偃松の群が次第／＼に増すと共に、喬木は疎らになり初め、二二〇〇米邊では、白樺と巨大なる偃松との混淆となつた。

偃松の海をこいで行く内に、我々の周圍には岩石の灰色が次第に目立ち初め、纏て一面の岩石の散在する草の斜面となつた。

森林を出た頃から天氣はよくなり、薄日さへ射し初めた。

草の間に見つけたツルチックの實を吸ひつゝ、尾根の一角二三四八米に着いた。廣潤たる原であつて、三角點は見出せなかつた。

眼前に展開した尾根や峯々の様子は、内地の山々などとは全く異つた光景であつて、この世のものとも思はれなかつた。海岸の砂丘の様ならかさゝと潤達さを持つた尾根が、前方面から左方にかけて、大空にいくつ

の鈍角を畫いて、屏風の様につらなり、そのピロイドの様な光澤を持つた、偃松の密生した側面は左下の廣く深い谷へと、美しい弧線を描いて雪崩込んでゐた。

正面には西遮日峯（約二四〇〇米）の三角錐が最も高く、遮日峯主峯（二五〇六米）をかくしてゐる。左端即ち谷の彼岸に、頂上の平夷な山が、臥牛の様に横たはつてゐるのは、北水白山（二五二二米）であらう。頂上の中央に三角點が立つてゐる。

尾根の上は、地勢上、準草本帯の景觀を呈し、所々岩石が無言で聳つてゐる外は、あの上越國境の山々の頂で見る様な丈二三寸の黄金色の水草が一面に生えてゐるのみである。こゝでは夏があまりに短い。一年の大半は雪にとざされ、七月八月は日がやくばかり。萬象生命なく、唯永遠の死あるのみ。

遮日峯の頂上に立つたのは一時頃であつたらうか。頂上は思ひもかけず、全く平らな一町四方の正方形の原であつた。西端の崖際に三角點の標石があつた。

太古の準平原の名残りであらうか、この様な純粹に平らかな山頂がこの世にあらうとは、今の今迄想像しなかつた。山頂といふよりは天上の庭園といふ感がする。

北尾根は盛り上つたガレをなして、藥水川の支谷へ出張つてゐる。その向ふの北水白山は、こゝから見ると、流石巨きく雄壯である。

南の崖には巨大な双子岩がそぼ立ち、その側には人夫達が常ならぬ角度より眺むる彼等の故郷の姿に見入つてゐた。眼下には、午後の陽に翳らふ新興高原の全幅が展開し、遠白む赴戰江の岸に元豐里が微かに見えた。

今彼等は、日夜太陽がその頂を照らし星辰がその空に輝くのを眺め暮して來た、故郷の山の頂に立つ。生來數

十年間その日々の生活と離るべからざる關係にあつた山の頂に立つといふ歡喜を持つのだ。

## 北水白山

比較的狭い尾根の突起を二つばかり越して、左折して北水白山への支脈に移ると、尾根は著しく廣大さを増す。この尾根といふには餘りに膨大な大地の連続が、我々の前に枯草の限りなき鋪道を展げる。高低も殆んど無く、人は全く氣附く事なくして一つの峯から次の峯へ到達する。

ビロードの様な枯草の鋪道を歩いて行く内に二四六八米丘の北東へ出た。渺茫たる曠野である。その霜枯色の草地には灰色の岩屑が螺鈿の様に鏤められてゐた。北の崖際を歩くと、清水が岩間に空の白雲を浮べて湧いてゐるのを見付けた。これは朝來初めての水であつた。附近には樞松も多く、露營地として好適である。

上空には禿鷲が一羽この鞍部を南から北へ越さうとして、風の爲か、ためらつてゐる。上の方は風が強いらしい。北水白山の頂上は、遮日峯よりもはるかに広い長楕圓形の曠原をなす。西南の端に登ると、原の中央に積雲を背景にして大三角點が立つてゐる。端から三角點迄歩くにも相當の時間がかゝつた。三角點の下に焚火の跡が佗しく残つてゐる。

頂原の廣さ、短徑四町、長徑十町、四圍の廣漠たる眺望と、中央の三角櫓を除いては、二五〇〇米を越す山頂である事を象徴する何物もない。

我々は今半島における第三位の高山の頂に立つ。周圍の大地は、無數の山々が押し合ひ、へし合ひ、波立ち、抱き合つてゐた。斜陽が雲間からこの情景を照らし、山河の或る部分は暗く蔭ろひ、或る部分は微妙な青磁色に

映えてゐた。

北の涯には、奇しくも白頭山が黝色くろくの樹海に守られて君臨してゐる。富士山を大きくした様な、左右に等しく張つた、裾野の雄大さは流石に滿鮮の山の盟主である。それは山全體が嚴肅な重力となつて、全視野を壓し、見えざる引力が我々を引きつけて止まなかつた。奥の方には雲が垂込めてゐて、白頭の頂ははつきりしない。東北方に見える小長白の山波も暗い天氣の爲によく見えなかつた。

白頭山の南方で一旦低下した大地が、南に近づくに従つて次第に隆起するあたりに、頭雲峰トウウンボウ（二四八七米）が、青磁色の樹海の中に、紫紺色の嘴狀の怪奇な頂を擡げてゐる。その南方の東谷山トウコウザン（二三二九米）は森林と草地の鋸齒狀に入りまじつた美しい臺地を示す。東谷山の山勢が藥水川に沿つて東へ伸びた處に、白山（二三七九米）が鐘狀の山容を現はしてゐる。明後日登る豫定なので、リズムで登路を詳細に觀察した。

直ぐ足下は偃松の綠色に蔽はれた斜面であつて、その下方には藥水川溪谷が眞黒な森林に包まれて無氣味な沈黙を守つてゐる。

南空には淡い色彩の安水白山アズミシラカミが高い。

西には、大空に銳角をえがく遮日峯を中央にして、今日通つて來た尾根が、黒い陰影の面を南北に連ねる。その尾根の彼方には、黒味を帯びた山ひだが幾重にも走つてゐる。目立つものとしては、赴戰江の對岸邊に頂の分裂した、八ヶ岳の様な蓮花山レンカサシが逆光線に煙つて空を黒々と切り抜いてゐた。夕日にきらふは平北境の山山——狼林山もあの中の一峯であらう。

雲が相當出てゐるのにかゝはらず、一眸の内に廿万地圖十二枚分の大觀が得られた程、大陸の地平線は廣くあ



つた。

暫らく見渡してみると、私の心は周囲の雄大な眺望に驚かなくなつた。その初めに心を打つた壓迫と驚異の感  
は消え失せて、箱庭でも眺めてゐる様に思はれた。しかしそれだけ山々に親しみを増したと言へよう。内地の山  
々に比してはるかにゆるやかな山河の高低起伏は、一見平明に見えて、その實は無限の陰影と脈絡を藏してゐて、  
いくら見ても見果てぬ光景であつた。

暮色は次第に我々を襲つた。何といふ印象的な光景であらう、この北水白山頂の霜枯れの野の黄昏は——。毅  
然として風雪を犯して立つ大三角點、柔かい地上の枯草、暮色と共に次第に鮮麗さと落着きを増す周囲の山々の  
色調、あたりの無氣味な靜寂さ、さては今しも遮日峯に没せんとしてゐる太陽。

頂原には西よりの最後の榮光が射す。三個の人影がなが／＼と地上に蔭を落した。と思ふと日は遮日峯の蔭に  
かくれてゐた。

東方にはこの峯と同高同形の峯が三つ四つ平行して竝んでゐる。北水白山とはこれらの峯々の總稱である。暮  
れ易い高山の夕暮は、我々にそれら凡てを訪ねるに充分な時間を與へなかつた。

### 兄弟合水

蒼茫として暮れて行く山頂を後にして、一度西南鞍部（約二四六〇米）に戻つて、其處から北へ澤を下りた。  
薬水川方面から北水白山に上下できる唯一の澤であると聞いてゐた澤である。白樺まじりの偃松帯を過ぎ、喬木  
帯に入ると、間もなく澤は平坦になつたので、薄明をたよりに樹下に露營の用意をした。澤は上部はいくらか急

であつたが、瀧は一つもなく、歩きよかつた。

夜半雨に變つたので、焚火の傍に寝てゐた人夫達をテントに入れた。小型天幕に三人も入つたので窮屈な一夜であつた。

朝醒めると、やはり秋雨の様な雨が降りしきつてゐた。溪流は増水こそしないが、已に薄濁つてゐたので、直ぐ下る事にした。

澤は山の右裾を巻いてゐるので、主として左岸沿ひに藪の中を漕いだ。雑草や、發育不完全な灌木が生えてゐる外に、倒木があつたり、伏流が潜んでゐたりして、相當の難行であつた。

暫く行くと、對岸の樹々の上に、一大巨巖が欹ち、その上部から濡灰色の頭大の奇岩が、烟る雨脚の中に、氣味悪く我々を見下ろしてゐた。その直ぐ下流で左岸に本澤カザリが合流する。水量は殆んど同一である。合流點に思ひもかけず小舎掛があつた。平らな屋根の、苔蒸した小屋で、内部はひどく濕つてゐた。

澤は次第に幅と水量を増した。瀬は早く、淵は青く、徒渉は次第に困難になつた。倒木が到る處に丸木橋を渡してゐる。樹齡何百年といふ巨木の間を分けて樹々に斜して流るゝ水流には、えも云はれぬ凄愴美があつた。

少し下ると、左岸に又々小さな小舎があつた。その下流で西股が合する。水勢は東股と殆んど同じだが、勾配は少し急かも知れない。朽ち果てた倒木が澤を埋めつくしてゐる。

右岸に鮮かな踏跡を發見したのはそれから直ぐであつた。踏跡づたひに、見ちがへる程大きくなつた澤に沿つて下ると、雲隠嶺から豊山に通ずる立派な小徑に出た。

漸く小降りになつた雨の中を、東へ進むと、右側に森林が切れて火田が表はれ、燕麥の穂波の脊景に民家の烟

が立つてゐた。露营地から随分時間がかゝつたが、それでも午前中に到着し得た。家に入つても雨はなか／＼止まなかつた。時折雨脚の向ふが明るくなつて對岸の針葉樹の斜面が現はれたかと思ふと、それが直ぐ白く烈しい雨沫にぼかされた。

薬水里ヤクスイリの最奥の一軒家に辿りついた日の翌日も、霖雨ツクシメが降り続いた。我々は八月の最後の雨に遭つたのである。この雨の後には大陸には透徹した秋空が訪れるのであらう。時々小降りになつた時に、附近の寫眞を撮つたりした。主人の言ふ所を綜合すれば、我々の下つた澤は兄弟合水ケイテイカッスイと云ひ、例の奇岩は榻岩タダツツと稱する由。去夏やはり内地人が來たと云ふ。

こゝは薬水川ヤクスイガハ最奥の段丘で、三町歩ばかりの火田と、川とを埋め残して、あたりは一面に森林である。薬水川はこゝで始めて川幅を擴げて、白い河原を持つ。内地の山村と異なり、兩岸の山勢はいくらかゆとりを持つて迫つてゐる。家の壁から出た木製の煙突から、白い煙が雨の中をゆら／＼と昇つて行く。しかしこの平和な光景の裏にも、火田民の血の滲じむ様な營みのある事を忘れてはならない。

雨が止まないいで、白山も前人未踏と稱される頭雲峯も放棄して、明日新興郡側から歸京する事にした。

## 雲 隠 嶺

灰白色の雲が低く、今にも降り出しさうな空であつた。木々の梢を襲ふ霧を眺めつゝ、出發した。家の後の林の中に小道がよく踏まれてゐた。魂を灼きつけた山々を去る悲よりも、里に出る喜が強い。雨で増水した薬水川

が、樹々の間にとう／＼と飴してゐる。細道は氣持よく濕つてゐて、時折赤松の根が出張つたり、淺綠色の水藻の流れてゐる小川が横切つたりして、極めて繪畫的であつた。

崇々嶺チヨチヨシイ（二一八八米）との分岐點も過ぎ、針葉林下の傾斜地を電光形に登る。森林の盡きた處が頂上であつた。新興郡の上空はいくらか晴れてゐて、展望が利いた。

峠の東側は尾根迄森林で、木蔭には紫色のトリカブトの群落が咲き誇つてゐる。西側は草原で、往路辿つて来た小徑が茶色の斜面をうねりくねつて下方の森林帯へ隠れ入つてゐる。今日は先日とちがひ霧も立ち罩めてゐないので、崇々岩チヨチヨシベツの方もよく見えた。

峠の沈黙シヅメに暫らく休息した。針葉樹と草原との配合は大菩薩峠を思ひ起さす。

上洞で午食し、漢笠川に沿つてゆる／＼下つた。南洞の谷間には水紅色のテフセンイハギクが咲いてゐた。かくて貯水池の岸に出た時はすっかり疲れて了つてゐた。「これで今年の夏山も終つた」と思ふと物足りなかつた。

その夜は宿（小漢笠南鮮屋）の清潔なオンドルの上に長方形の蒲團を敷いて、ゆつくり寝た。夕方から夜來雨聲がひどかつた。

船が七時に出るといふので、早起きして貯水池へ急いだ。切角早く來たのに崖上の船長の家は未だ戸が閉つてゐた。我々は船長が用意するのを待ちつゝ崖の上に座つてゐた。——それは初冬によくある様な陰鬱な朝であつた。貯水池をめぐる周囲の丘陵は一面の霧に鎖され、鋼鐵色に底光りする湖の面には狹霧が幽かに這つて行く。

## 咸興及び興南

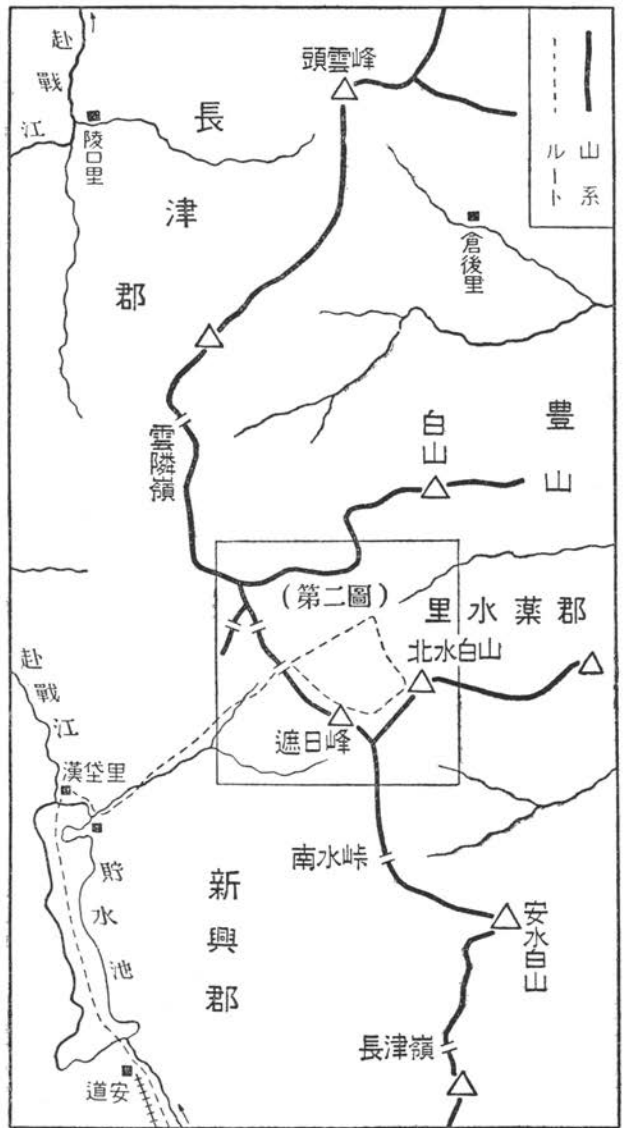
インクライン不通の爲に、元豐で一泊し、翌日赴戰嶺を歩いて下りた。石山さんは峠の上まで送つて下され、鄭氏とは松興で別れた。かくて再び咸興の地を踏んだのは、爽かに晴れたその日の午後であつて、地上を冴々と秋風が流れた。夕方、奈良井署長と住友の中澤さんに招かれ、夜中澤氏の御宅に泊つた。虎にも食はれないで、よく歸つて来たといふので、大變歡待された。

朝鮮は古來文化が北から南へ進んだので、北鮮には古都が多い。咸興もその一で、李朝の起つた土地、今後咸南の登山者に親しまるべき町である。城川江、萬代橋、盤龍山など、来た日に中澤さんに案内していただいた。

翌日は興南ユンナムに行き、前田先輩に案内されて、朝室の工場や町を見て、その夜、無事豫定を果たした満足を感じつゝ、なつかしい咸興の地を離れた。

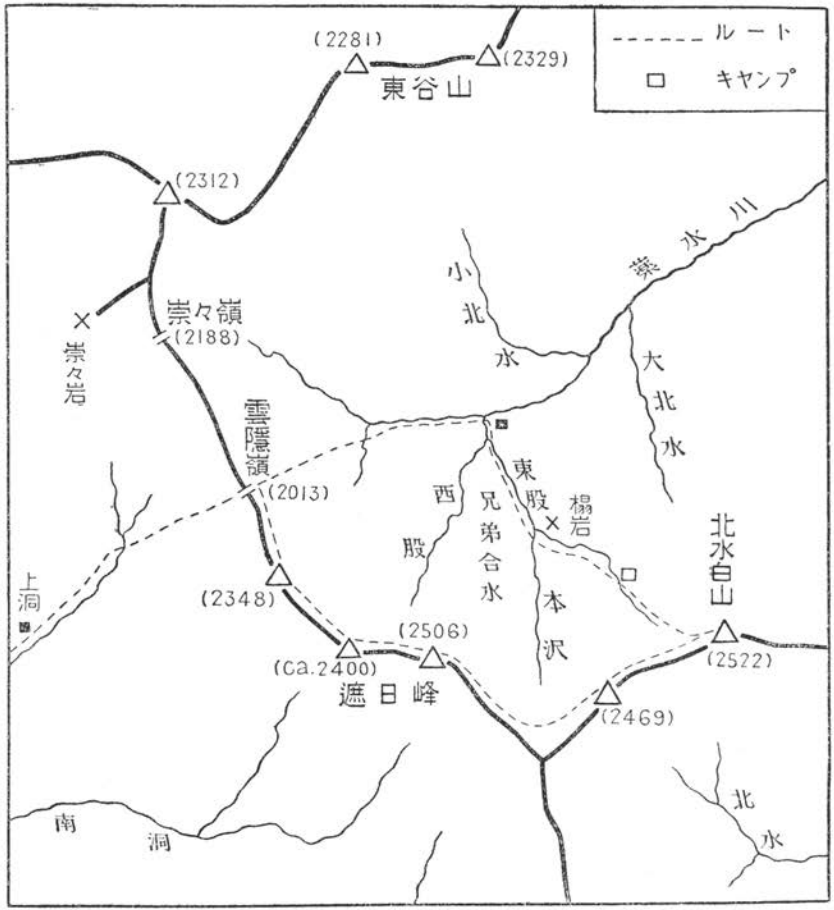
今次の旅行に際し、京城山林部の伊藤課長、松岡技師、佐藤技師、咸興營林署の奈良井署長、小森氏、佐々氏、神谷氏、石山主事、道廳の林瀬技師、石川氏、一高先輩團の中澤氏、前田氏、阿部氏に一方ならぬ御醜感を蒙つた。殊に奈良井署長、中澤支店長、前田氏、石山氏には御忙がしい中を私一個人の爲に種々御世話下され、さぞ御迷惑をおかけした事と思ふ。

この稿を閉づるに當り、つゝしんで以上の諸氏に感激と感謝の念を表する次第である。尚又、山旅の忠實な伴たりし鄭・魏兩氏に對しても、心からなる謝意を表したい。



第一圖 咸南中央部山勢圖

遮日峯 北水白山 兄弟水 橋本



第二圖 遮日峯附近

五

後 記

北水白山及び遮日峯の頂が何日何人によつて初めて究められたかは、極めて興味ある問題である。測量隊及び山林部の施業班が比較的早く入つてゐる。又それ以前にも豊山方面から登山者があつたといはれる。要するに地方的には比較的名の知られた山であつた。登山者としての最初の人は、昭和六年八月の岸波義彦氏で、同氏は七月下旬から八月上旬にかけて約二週間を植物採集を兼ねてこの山間で過された(昭和七年四月植物學雜誌參照)。

以上はいづれも東側の豊山方面からで、北水白山への登路は、南方よりは北水が、北方よりは兄弟合水が多く選ばれてゐる。西側の新興郡から登つた人では、七年六月に遮日峯に登られた大井次三郎氏が最初であらう。

岸波氏の紀行は、歸京後同氏より特に送附していただいた記録によると、七月末薬水里を出で、兄弟合水の西股に登りつめて、尾根に出で、遮日峯北水白山を縦走して大北水から薬水里に下られたもので、途中遮日峯直下に二泊、南側の北水水源に一泊してゐられる。天氣は大體良かったものの如くである。

白頭山(二七四四米)を朝鮮第一の高山とすれば、前述の北水白山(二五二二米)は威北の冠帽峯(二五四〇米)に次いで、朝鮮第三の高峯であり、同じく遮日峯は(二五〇六米)は第四の高峯である。その外威鏡南道には南胞胎山(二四九四米)、頭雲峰(二四八六米)、白山(二四七六米)等、朝鮮における五位、六位、七位の山々が存在する。又蓮花山(二三五五米)、東谷山(二三一九米)等注目すべき山も多い。

今、未だ登山の黎明期にあるこれら威南の山々について簡単な解説をなすのも無意義ではないであらう。



南胎山

白頭山より南東に走る摩天嶺山系に屬する。詳細に云へば、主脈から南方に突出したる支脈上

にある。北鮮東海岸の新北青から定期自動車によるか、或は新義州から船によつて鴨綠江上流の惠山鎮に至り、同所から一日で山麓胞胎里に着く。駐在所から山頂迄二里、從來登山者がなかつた事もないらしい。山としてはその北方にある北胞胎山の方が險阻であるといふ。この邊は十月から三月迄積雪期で、嚴冬には平地でも氣温零下四十度に及ぶ土地である。参考地圖 廿万、惠山鎮。

頭雲峯

北水白山遮日峯と同一山系に屬し、その北端に位する。豊山郡熊耳面倉後里から往復八時間。嘴

狀の特異な山頂は附近諸峯中にあつて異彩を放つ。参考地圖 廿万、長津、五万、楊坪里、陵口里、青山嶺、院洞里。

白山

熊耳面の白山を單に白山と稱する。六年八月初め岸波氏が登られた。記録によると、藥水里より

白山車谷山間の澤に入り、その右股を上り、第一日は二〇〇〇米邊に露營し、翌日惡天氣を冒して山頂に達してゐる。参考地圖 五万、羅興里。

東谷山

藥水川水源の北岸を西南から東北へ走る極めて奇妙な山であつて、長さ約一里幅約十町の臺地狀

をなす。森林と草原の配合が美しい。樞松が割合に蔓つてゐる。最高點は凡そ中央の二三一九米の突起である。この山は藥水里から見ると西乃至北の方向に當るのに拘らず東谷山と稱するのは、南にある北水白山の北に對してかく命名したのであらう。小北水から登る。

尙藥水里から北水白山に登るには、小北水の下流對岸の大北水が最短路である。

序でながら述べるが、兄弟合水とは水勢相等しい二股が合する澤に名づける普通名詞的な固有名詞である。

朝鮮の山には、北水、兄弟水、遮日峯、白山、雪嶺、冠帽峯等、普通名詞的な固有名詞が到る處にあるのには驚く。参考地圖 五万、雲山里

蓮花山、参考地圖 廿万、青津 五万、蓮花山

以上で咸南山岳の概況を終はる。咸南の山々は本邦山岳界の處女地であつて、今後の登山者を待つ所が多い。それは大らかな尾根や澤と幽玄な原始林より成り、本邦に於ける最も登り易き種類に屬する。この點、同じ朝鮮の山でも小長白山脈の澤や金剛山の岩峯が比較的險絶なのに比して大なる相違であらう。

咸南の山に見るべきものは、その森の深さであり、尾根の廣さであり、廣漠たる山頂の眺望である。鬱蒼たる原始林のひろがり、闊達たる尾根の重なり。單調なる線と色彩の奏でる山上の哀曲。それは尾根や溪谷の變幻の妙を示す穂高や劍の峯々と對蹠的地位に立つ。後者に近代的絢爛さがあるとするれば、前者に原始的な素朴さがある。

その森林と平頂の美を誇る咸南の山々は、この國の登山界において明治傳統の正統派の登り方が已に古典的と認められてゐる今日においては、一部アルピニストの關心の對象とはなり得ぬかも知れないが、荒み果てた都會青年の心の對象として永遠のオアシスとなるであらう。

### 雨期の問題——

朝鮮は七月八月が雨期に當り、この二ヶ月間に一年降雨量の六割が集中され、降雨日數は月の半ば以上に及ぶを普通とする。故に從來の紀行文を見ても、増水に對する苦心が強調されてゐる。蓋しこの雨は半島の山を技術

的に困難視せしめる唯一のものであるからである。しかし澤はいづれも地勢緩漫で、廊下などはないから急激の危険はない。下流の方が危険率は多い。人夫が雨や寒氣に不用意である事も困つた事の一つである。とにかく夏季登山者は雨に對して慎重な用意を要する。

この雨期は七月の雨期と八月のそれとに大別される。七月の雨期は通常十日前後に始まり、下旬半ばに終る。連日霖雨が降りつゞき、各河川は一年間の最大増水量に達し、各地で鐵橋が流失したりする事は年中行事となつてゐる。

七月の雨が連続的に降るのに反して、八月のそれは通常三四回に分かれて降る。即ち、四五日間豪雨が降りつゞくが、その後四五日間は霽れるといふ具合である。それでそれらの小雨期の中に晴天を掴む事は可能である。殊に七月の雨期と八月の第一回の小雨期との間には晴天がつゞく事が多い。

この七月と八月との雨期の性質の相違は、前者は低氣壓の滞留により、後者は颱風の襲來による事が多いのに起因する。

### 冬季の狀況——

近年朝鮮の山には冬季登山の對象として好適なる事が示された。已に咸北に江原にスキーによる登山記録が作られた。

咸南に於いてもその山地帯（分水嶺以北の地）は冬季積雪多く、スキーは元豊附近の外各地で現に行はれてゐる。漢堡川の奥、上洞の村では、積雪は冬季四尺に近く、澤も埋つて了ふと聞いた。

その後新興郡東上面元豊の石山蕃氏の來信などを綜合して考へると、氣象、雪量、交通等いづれも申分なく、そのゆるやかな地形と相まつてスキー登山の絶好地を提供してゐるのである。

積雪期は十月乃至四月で、雪量は一ヶ月一尺、年最多量は多い所で六尺、少い所で二尺以上はある。天候は大體晴天が多く、降雪日曇天日三分ノ一で、平均一週間は好天氣がつゞく。氣温は三寒四温の順序で訪れる。

雪質は完全な乾燥雪ださうであるが、平常新雪なき時は、恐らくクラスト或は硬砂状をなしてゐるのであらう。蓋し、日射と風の強い故である。而して降雪は西北風よりも南風の影響に依る事が多いとも聞いてゐる。

火田民家は冬季根據地として理想的であるといへる。

薬水里を中心にして白山、北水白山、遮日峯、東谷山への放射狀登高の如きは絶好のスキールトである。來る春には是非あの山々にスキーのスプールを印したい。あのテフセンカラマツの森やユニークな尾根が白雪に粧はれた光景は想像するだけでも誘惑的であらう。

(昭和八年五月五日)



## 録 雜

### ティロールの春

田 中 薫

この一文は前號所載「ティロールの冬」の續きである。  
即ち一九三〇年五月の山旅の記である。

### 若葉の南ティロール

伊太利には思はぬ長居をして五月に入つた。

ローマから北上する長い汽車の旅、ポロニーヤまではヴェニスに行く横山大觀畫伯と一緒に、「どうして斯う伊太利は元山ばかりで？」等と云ふ風に聞かれたが、その夜一人ボルザノの宿に着いて冷えんとした替氣に打たれた時は、伊太利にもこんな潤つた良い所があつたのかと急に生氣づいたのであつた。

—

停車場と古町との間にあるプリストルといふホテルは誰にでも勧めたい程居心地の良い宿であつた。南ティロールは大戦の結果、伊太利が奥國から取り返したばかりで獨逸語が話されて居り、店の看板にもほんの申譯に伊太利語が添へてある。ファッショ青年隊のルックサックの行列が町の廣場を壓してゐるが、土地は固々伊太利のものであつたとしても、此處の山人はどうもファッショには反りが合はないと見えて、白い眼でこれを見送つてゐる様であつた。第一この邊の物靜かな山の氣配が騒々しい事を歓迎せぬ様である。

五月六日、流石伊太利の空で、芳ばしいばかりに碧い。一寸でも高い處に登つて見たい。山鐵道の中でコ

ーレンバーンといふのに乗つて見る。降された處は一〇二〇メートルばかりの山上の牧場で、牧草の濃く軟き中に勿忘草、堇、黄のプリムラ等が水々しく咲いてゐて正に五月の長閑さである。そこからブラ／＼登つてモンテ・ポザ Monte Pozza (1615m)あたりまで行くと、春は未だほんの淺く、枯草の中にクロッカスが咲き出した處であつた。往きにバーンで登つた處を廻り道して歩いて降る。暗いタンネの森があり、森の中の一寸した草原に明るく日の當つてゐるのが美しい。次第に麓に近づくと花の数は愈々増して行く。よく見ると、何かしら花を附けてゐない草は一つもない。雜木の緑は次第に濃く、夏は遠慮勝ちにしるのびよつて來る様であつた。料亭のテラスは若葉に埋まり、白いテーブルの上で茶を飲んだ。給仕の女はスキスの様に黒衣にレースのエプロンこそかけてゐないが、皆清楚で親切で、口數少くドイツ語で話した。

二

翌日はメラノに行く。本當はドロミーンへアウトプスの遊覽を試みる筈であつたが、昨夕から雨になつ

たので、朝九時四十分の汽車で平凡にメラノの町に遊ぶ。汽車は直ちにオーストリアに向ふ本線と別れ、エツチ (Etsch) の本流に沿ひ、西方オルトラ山彙に通ずるヴィンチュガウ (Vintschgau) の谷へ入つて行く。車窓の眺め、——林檎の花は既に過ぎて、日本なら葉櫻を賞す可きところ、牧場は四方に延びて、マーガレットの白花が秋の稻田の様に風にゆらいでゐる。メラノの驛前は公園の様な廣場になつてゐて、霧れかけた雨雲の上に新雪に粧はれた恐ろしく高い山が、幾つも／＼顔を出しかけてゐた。

このメラノの町はそれ自身一つの公園の様なものである。山で、暖かで、濕潤で、空氣が清く、花が多く、何の道も、何の横丁も、何の川沿ひも悉く私の心を捕へた。私は多分最も良い季節にめぐり合つたのであらう。雨後の新緑といふ最も良い條件をつかんだのもあらう。大山脈の南麓といふ地理的條件から云つて、ヒマラヤの南、カシミアとか、アルプマリタイムの南、リビエラとか、オストアルペンの南、メラノとかいふ例は世界に求めても余り澤山は無いのはあるまい

か。

大通には電車があり、その両側がマロニエの並樹、その外側に歩道、それから生垣、芝生の庭、蔦のからんだ住宅。生垣には忍冬のような種類の白や黄の小さな花が澤山咲き、藤の花も盛りである。庭の無い様な家は殆んどなく、家は四五階の木造、ホテル、パンション、サナトリヤムが多い。町の角はカフェになり、緑樹の中にカジノがある。パッサーの川沿ひのプロメナードをゾロ／＼と人が通る。近年リビエラの町々は、モントルウの眞似をして花合戦（バタイユ・ド・フリール）を創めたりして、新興イタリヤらしく大いに宣傳に努めてゐる。

余り問題にしてゐなかつたこのメラノが頻りに私の心を惹いて、一週間位は居て見たい。そして晴れ間を見てドロミーテンを見て行きたいといふ氣がした。併しウイン行の日程が定まつてゐるので、その夜北にブレンネルを越えてしまつたが流石に後髪を引かるゝ思ひがした。

## クリムルを訪ねて

（この章前號「ティロールの冬」挿圖参照）

一

ウインの滞在を終へて巴里へ歸る途中、ツエル・アム・ゼーに降りたのは五月二十一日の夜更けであつた。

朝七時に眼が醒めると直ぐ二階のテラスに出る。丁度此處から町の一本通りがガラ／＼坂になつて正面に見下される。此處でもティロール特有の濃緑と褐色が總てを支配してゐる。無器用に彫刻の施された褐色の手擦りや深い軒、黄色い壁、濃緑の窓枠、戸口の上に突出た鹿の首、面白い物が積木でも重ねた様子上へ／＼と重り合つてその奥は黒いタンネの森となり、更にその上にシュミッテンヘーエの残雪が見える。

舞臺の上での街の叙景の様に朝の人達が盛んに此の坂道を右往左往する。學校通ひの子供、女學生が通る。これは近代的な簡単な洋装をしてゐる。白っぽい流行のトレンチコートやベレーがこの田舎町にも入つて來てゐる。中年以上の女や土地のつまましい娘達は白の

ブラウスの上に黒か紺のチョッキを着、黒か濃緑のスカートをつけてゐる。前垂れを掛けたものも多く、中年以上の女がスウェーターを着ればそれは皆濃緑色だ。ササラの様な毛をつけた帽子の男、彼も濃緑色のチョッキに鹿角の釦をつけ、褐色の半ズボンをはいてゐる。大きなルックサックを背負つて山靴を鳴らして行く休暇を利用した山歩きの乙女も山に出掛けて行く。彼等の用ふる黒、濃緑、褐色は皆この土地の自然の持つ色だ。タンネの森、樺の幹、落葉の色なのだ。

二

名物の蜂蜜で朝食を済ますと例によつて一寸でも高い處に登らねばならぬ。ザイルバーンに乗つて町の背後に聳えるシュミッテンヘーエ Schmitenhöhe (1968m) へ向ふ。ツエル・アム・ゼーの町はツエラー湖に張り出したシュミッテン・バッハ Schmiten Bach の大きなデルタの上に發達し、背後は標式的な扇状地をなしてゐるから町の道はその傾斜面をグン／＼登つてその根元に達した處に牧場があり、ピラがあり、その中にバーンの發着所がある。

麓は日が當つて、長閑だつたのに二千米近い頂上は残雪が深く、上からもチラ／＼春先の雪が降つてゐた。ホーヘ・タウエルの連亘は八合目以上を一直線に區切つて雪雲に頭を没し、彼の名峯グロス・グロックナーも明かに指呼し得ない。ポツ／＼降り出すと間もなくタンネの深い森に入り、麓近くまでずつと／＼とした樹下の道である。森の端れ、ツエルの町の一目に見渡せる牧場の一隅に満開の林檎と櫻が二三本あつた。その下で晝を描いてゐたら村の子供が立止まつて「シエーン」と御世辭を云つてくれた。子供が去ると頭の直ぐ上で「キキッ」と啼く動物がある。リスである。櫻の木の上に登つてゐたのがその根元を私に陣取られたので、降りるに降りられず困つてゐるのであつた。

三

翌二十二日輕便鐵道に乗つてピンツガウ (Pinzgau) の谷に入る。今朝は良く晴れてゐる。町の坂道から既にグロス・グロックナーの青い氷が見えてゐる。谷の美しさは發車と共に始まる。走る方向には、ホーヘ・



タウエルンの連亘、後方にはザルツブルグの方にぬける北の谷の山々が見える。二等車に乗る者は私只一人、後尾の車室なので景色を眺めるには絶好だが一寸恥かしい気がする。三等に乗つて村の人達と一緒になれば良かったと思ふ。

右側が二千米臺のキッツビューラー・アルペン、左側が二千四百米のホーヘ・タウエルンの前山、勿論残雪は眞白だ。これに挟まれて東西に打ち開いたビンツガウの谷一杯に展げられた牧場。タンボボ、キンボーゲ、三色堇、勿忘草、デージー、オダマキ、リンドウ、その他百花燦亂の眞只中を汽車が通つて行く。線路の枕木も油等で汚れてはみず一杯に花で埋まつてゐる。停車中に一寸降りて花を摘む。嘗つて三里塚の御料牧場の中を汽車で走つた事があるが到底この美しさには及ばない。牧場は谷壁にも及んで居て、南側に於て八〇〇米位に達してゐるに對し、日當りの良い北側に於ては一二〇〇米に達し、人家はその中腹に點々と丸木小舎を並べてゐる。

驛毎に乗り降りする三等客を見てゐるのも興味があ

る。男物の麥藁帽を黒布で作つた様な型に金のモールと長いリボンを垂らした優美なものを戴いた婦人が其處此處にゐる。ナシ・ナルコスチュームの古本の頁から抜け出した様な連中が實際に生活してゐるのを見るのは不思議な楽しさである。私はそれをピレネーの山中で味ひ、ブルターニュの田舎で眺めたが今又このティロールの奥に来てこの喜びを得たのである。

谷は次第に狭まつて奥山は前山にかくされ、本谷に直交する南北の谷に出會ふ毎にホーヘ・タウエルンの雪がのぞく。そしてその谷の出口には必らず兩側に一對の段丘があり、その上に村がのつて居て教會の塔が一本宛立つてゐる。或物は雪山を抜いて空に聳え、或物は黒く小さく山肌にかくされてゐる。時に人力の尊きを見、時に人力の弱小を感じる。又谷との出口は同じ位の間隔に並んでゐるからそのデルタの上に發達する本谷の町々も同じ様な間隔にある。停車場を東から拾つて見ると Kaprun, (Kaprun); Stubach, (Utten-dorf; Felb, (Mittelsill); Hollersbach, (Hollersbach); Habach, (Habach); Unter Salzbach, (Neukirchen);

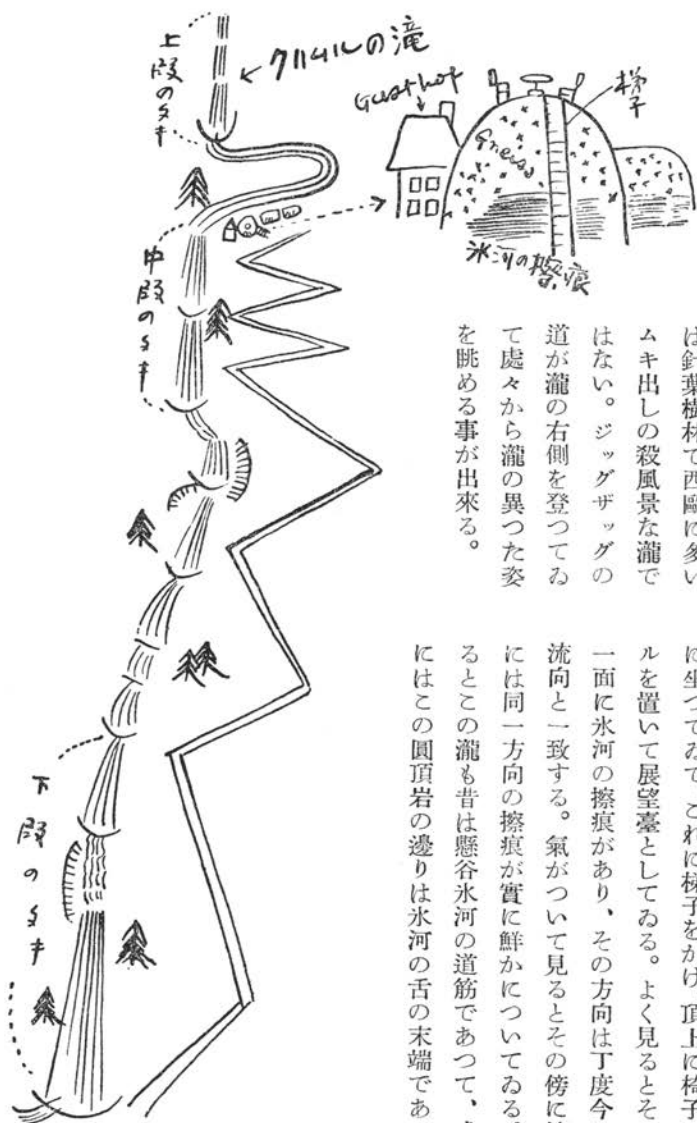
Ober Salzbach, (Wald); Krimml, (Krimml).

五十三キロの北の谷を二時間半程で、終點フォルド・クリムル Yord Krimml に着く。とうとう春のクリムルに來たのだ。私が此處まで來たのは故辻村伊助氏のスウイス日記の手引きに依る様なものである。辻村氏がクリムルの一つ手前のローゼンタール、グロスベネデイガーで汽車を捨て、クリムルまで歩かれたその途中の花の美しさが私をさそつたのだ。辻村氏を案内したビール樽の様なクリムルの驛長さんにひよつとしたら會へるかも知れぬと思つたからだ。あの紀行の中に「私は誰の畫だつたか忘れてしまつたが、ティロールの六月と題した、マーガレットが原一面に咲きそろつた、ブルーの濃い綺麗なのを、タイトで見ることがあつたが、………」と云ふ一節があつて、私はその當時、その繪をエハガキで見付けて今も持つてゐるし、ロンドンに行つた時、タイト畫廊でこの本物を見るのを忘れなかつた。それは June in the Austrian Tirol と云ふ畫で、エディンバラの人、ジョン・マックウイルター John Mc Whirter の作。一八九二年にロイヤ

ル・アカデミーに出たものである。この畫も又私を茲まで手引した畫である。一體私はかうした甘い畫は好まないのであるが、これが本當の景色である事が判つてから旅の思出のよすがとして改めてこの畫のエハガキを眺める氣がする様になつたのである。

自然はこんなに美しいのに皮肉にも今は旅行シーズンではない。ホテルは唯一軒「瀧の宿」Holer's Hotel Krimmler Falle といふ小さなが開いてゐるだけであつた。狭い部屋ながらレースのかゝつた小綺麗な窓から一面の花野が見渡される。人の良い老主人、一寸シツカリ者のおかみさん、十七ばかりの娘、下婢二人といふ家で客は私一人。

外に出る。ツエルで盛りだつた林檎の花は此處では未だ蕾が固い。三色堇、勿忘草が足の踏み處もない様に咲いてゐる。クリムルの瀧は辻村氏は馬鹿にして見なかつたと記してあるがベデカーにオスト・アルペン第一の巨瀑とあるので見に行く。瀧の形容は文字にしてみつまらないから挿畫に依つて讀者の御想像に任せ、今は雪解の多い時だから夏よりは遙かに立派で



ある可き筈だ。クリムル水河から流れ出るクリムラー・アッヘ (Krimmler Ache) の流れが無数の瀧の連続をなして、凡そ三八〇メートルの急崖を落ちて行く。周囲

は針葉樹林で西歐に多いムキ出しの殺風景な瀧ではない。ジグザグの道が瀧の右側を登つてゐる處々から瀧の異つた姿を眺める事が出来る。

落水は大體上、中、下、の三段に分かれてゐる。中段の瀧の上に瀧の宿といふ家があつて茶を飲ませるがその傍に巨大な片麻岩の丸岩が土饅頭の墓か何かの様に坐つてゐて、これに梯子をかけ、頂上に椅子、テーブルを置いて展望臺としてゐる。よく見るとその腹には一面に氷河の擦痕があり、その方向は丁度今日の瀧の流向と一致する。氣がついて見るとその傍に続く巨岩には同一方向の擦痕が實に鮮かについてゐる。して見るとこの瀧も昔は懸谷氷河の道筋であつて、或る時代にはこの圓頂岩の邊りは氷河の舌の末端であつたであ

らう。

夕刻寒さを感じて茶店に入ると眼の下に夕闇の迫るクリムルの草原が見え、教會の白壁と針の様な尖頭とが小さく見えた。薄暗い室内の壁に大きく翼を開いた山七面鳥(?)の剝製があつた。「一九二四年五月、グライフワルドの森で射止む」と札が附いてゐる。この鳥はクリムルの宿にも一羽飾つてあつた。珍禽であらう。茶店の娘はアウワハンといふ鳥だと教へて呉れた。林中靜寂なる時はばたけば何か嵐でも起しさうな不思議に物凄しい鳥であつた。宿に歸つてザルツアハの川鱒(Forelle)を澤山御馳走になつた。

四

翌朝も清々しかつた。花野に出て朝露を踏み、近所の丘に登つて見たりした。午後約束して置いた村の娘さんが二人コスチュームをつけて來て呉れる。黒地に金モール、黒リボンの帽子、白地に赤や緑で刺繡した大きな肩懸け、紺の上衣、黒天鵞絨のミイデル(胸當て)、時色の大きなサティンのフェルトツア(前掛け)これがピントツガウの薦たげた古風俗である。人に見ら

れるのを恥かしかるので少しく離れた丘の陰の花野に坐つてもらつて寫生を始める。座に満ちた野花とこの二人の乙女、何れが美しいか判らぬ。そして畫はちつとも描けない。詩ばかり展開してしまふ。

何年か前に大塚金之助氏が滯獨中の一夏をティロールで過されたと云ふのでその時の思ひ出を話された事があつた。その時大塚さんは齋藤茂吉氏の歌「ティロールの山のはさまを導きし乙女の姿思ひ出にけり」を口づさんで、私にその心を傳へられようとした。今、この若きティロールの乙女達と共に野花に埋まつてゐる事は、正に齋藤氏の心であり、大塚さんの心であると思はれて、自分ながら妙に酔ひ、水彩畫の方は正に失敗に終つてしまつた。

その中驟雨になつて娘達は晴衣をぬらすまいとあわて、幾つかの牧場の柵を越えて歸つて行つた。ナッシュルコスチューム等と云ふものも博物館に陳列された薄穢い死物では一向有難くないが、かうして實際生きてゐるのを見ると比類なく美しいものであると思つた。

## キッツビューエル再遊

一

二十四日は土曜日、よく晴れた。汽車でミッテルン Mittelstall に引き返して下車。驛前の宿に荷を預けて、ザルツアッハの川岸を散歩する。矢張り此處も花野、水に臨んで川柳やボブラが若葉をきらめかしてゐる。小學時代に日曜毎に捕虫網を持って蝶を追つた相棒がウィーンに留學してゐて、三月下旬にはウィーンの町端れでミヤマツマキテフが取れたと自慢してゐた。そのミヤマツマキテフがこの邊では五月中旬の今、出盛つてゐる。一寸の間に帽子で三翅を得る。日本では高山蝶中の稀品、日本アルプスでは割合近年になつてからの發見で一時騒がれたものであつたと記憶する。

ミッテルシルから北にキッツビューエルへ自動車が通ずる。乗合も今は休んでゐるので一臺出させてドライブする。キッツビューラー・アルペンを越す峠を、パス・テッレン Pass Thurn (1248m) と云ふ。峠の手前に

ある同名のホテルまでの登りが景色が良い。グロス・ヴェネディガーの氷河が素晴らしく眺められる。峠を越すと大森林で花も少く、北斜面らしく淋しく寒い。四十分足らずで懐しいキッツビューエルの町に入る。

ホテル・ライッシュ Hotel Reisch に宿を取つた。その足で冬厄介になつたドクトル・エンゲル老人を訪ねる。わざと庭へ廻つて聲をかけると二階の窓が開いて二番目の娘、マータが顔を出した。もう二年近い月日が経つてゐた。ウィーンに留學中のトニーと親戚に手傳ひに行つてゐる末娘を除いて皆喜んで迎へて下された。夜ゆつくり訪ねる事にして、ハーネンカム (1635m) へと、ザイルバーンで登る。

スキ一のゲレンデも見違へる様な花野だ。此處はマールガレットの白花が多い。同じザイルバーンの箱に吊るさがつた客の中に、冬スキー行をした案内人のフックス君がゐる。今日は事務家らしく鞆等抱えてゐる。山の話が出る。彼は遠くカイゼルゲベルゲが残雪を美しく光らせてゐるのを眺めて、夏はあれと一緒に登らうと頻りにすゝめた。私は夏にはもうこの邊に來られ

ない豫定になつてゐるのが淋しくて、多分來られるだらうと云つてしまつた。

頂上には雪を割つてクロッカス、黄色の莖や、リンドウやプリムラが咲いてゐた。私は此處でも夕方の山を歩いて降つた。路傍に聖像が立つてゐて村の子があげたらしい草花が凋れてゐるの等はピンツガウの谷でも見て來たが、この邊では日本の道祖神の様な形式になつたものが澤山あつた。登山者の爲めの道標が良く發達してゐる。赤と白とか、緑と白とかの對照色を二色宛用ひて、或は樺杭に或は木の幹に石垣に中々氣の利いたやり方がしてある。日本でも妙にボーイスカウト風の事をするより斯ういふのを眞似た方が良くないかと思ふ。

二

夜、エンゲル家に遊びに行く。去年の夏は私の友人夫婦が一週間程滞在して呉れたといふ。それは東大の神田盾夫君夫妻の事であつた。「私のドイツ語が大變上達した。恐らくウィーンとクリムルでおぼえたのだらう」等と云はれる。實はこの前の冬のようにドイツ語

の名手が傍にゐないので多少勇敢に話せるからなのだとは彼等には思ひもよらぬ事であらう。

キッツビューエルの畫家で、ワルデン A. Walde といふ若い人がある。その作品が、エハガキにもなつてゐるし、私の宿のサロンにも澤山ある。多少グロテスク。だが中々良い味があつて私は好きになつた。黒とコバルトと赤と白とのマッスで描かれた畫である。遅くまでその畫を眺めて寝る。

二十五日はよく晴れた日曜日で町の廣場は教會に行く正装の人々で賑ふ。コスチュームは黒が原則でフェルトツアの色で齡が判る。水色、綠色、鳩羽色、海老茶等の種類があり、地はサティン様の光るものが多いが、ピンツガウの田舎とは異り此處では本當の正装をしてゐるのは中老年人に限られ、若い者は都會風なのが多かつた。それだけ古習は崩れてゐるのだから、こんな風俗の見られるのももう永い事ではあるまい。

翌日、午前十時四十分の汽車まで、もう一度町を歩いて見る。花盛りのマロニエの下で、もう夏らしい一家團樂が見られる。フックス君が子供連れで歩いて來る。

もう一度サヨナラだ。

車窓、どん／＼後になつて行くインの谷を飽かず眺め盡す。この谷にも花は多いがピンツガウには及ばない。インの谷の美しさは森林だ。そしてそれもキッツビューエル附近と、サン・アントを中心として、ランデックとブルデンツとの間だけだ。

この日スキスに入つてウエーゼンに下車。ホテル・スペヤ Hotel Speer に泊つた。これも辻村氏の寫真で見た春のワーレンゼーを見たかつたからであつた。ホテルも後に調べたら偶然同じ家であつた。

この行は終始余りにセンチメンタルで、今、當時の手帳を綴り合すにも一寸恥しい氣がする。

(昭和八年五月一日稿)



## 赤牛嶽

小池 文雄

### 豫 察

嚴冬期の赤牛嶽及び深雪の東澤谷を訪ねんとの考を起したのは一昨年の夏だつた。折目が皺くちやになつた地圖を擴げて見てゐる間に段々強くこの山に素き付けられて行つた。

昭和六年の十二月下旬、左の如き豫定の下に遊行を試みた。即ち、濁より烏帽子小屋に入り三ッ岳を経て三ッ岳南側の谷を下り東澤に出で野營、それより二〇五〇米の所に落ち込む澤を登り詰め、二七七一米獨立標高點の南の鞍部に取り付き尾根を経て登頂。

併し現地に行つて見ると、烏帽子登山道の夏路以外には冬期に於ても適當のルート無く、山毛樺立尾根の輪標による登りが非常に苦痛で、多量の食量、野營具を負ふての登高に精力の大半を浪費し、烏帽子小屋入りをした時は、祕境東澤に降る事が仲々大物であり、

六

一山越えた隔絶の谷底での雪中野營の困難さを想ひ、加ふるに、東澤下流の一ノ澤に獵師用の掘立小屋があると聞き、これは前シーズンに食糧を揚げて置かなくては、到底物になるまいと見切りが付いたので、烏帽子岳、三ッ岳の登頂のみに止め三ッ岳頂上より東澤谷を俯瞰し又赤牛岳東面の積雪状態を偵察しただけに終つた。

越えて昭和七年一月より三月までの間には米を揚ぐべき機會なく、三月卅一日より四月五日迄の僅かの休暇を利用して大町より濁——船窪乗越——針ノ木谷——小屋まで行き乍ら、時日の余裕が無く、も一步と云ふ所で平の小屋より引返してしまつた。

併しこの行の不動澤——船窪——針ノ木谷のスキーツアは楽しき想ひ出を残した。  
前二回の失敗に鑑み、ルートの再吟味を行はねばならなかつた。嚴冬の東澤谷に入るに就て大體左の登路を考へた。

一、濁——山毛樺立尾根——烏帽子小屋——東澤小屋  
この案に就ては濁澤溯行、不動と南澤の鞍部に到り



主稜を越えようかとも思つたが、濁澤の一四〇〇米邊に大瀑があり冬期も埋らず、スキー登路とする事不可能で、ルートは夏路の外無かつた。

二、大町―針ノ木峠小屋―平ノ小屋―東澤一ノ澤小屋  
これは三月の経験よりすれば、針ノ木谷の雪崩と、南澤との出合より下流があまりよいスキールートでないのと、平小屋―東澤落口の間の黒部本流の徒渉が少くとも二、三回はあると覺悟しなくてはならぬ。

三、芦嶮寺―立山温泉―平ノ小屋―東澤小屋、これも同様、平ノ小屋―東澤間が難物である。

四、有峰―上ノ岳小屋―三俣蓮華小屋―東澤

この案はツアーとして最も面白いものであるが各山小屋に食糧燃料の準備を必要とし、限られた少數の日時を以てしては遂行覺束ない。

五、水股―湯股川―三俣蓮華小屋も悪くはないと思つたが、湯股の徒渉があるか無いかは自分には未知であつた。

結局見直したのが距離に於て最も近く、最も勞力的ではあるが、雪崩の危険もなく、又僅かな日子で決行

出来る、濁―烏帽子越えを採つた。

東澤から赤牛への登路は、赤牛東側の小谷の中、頂上直下の東側の最大の澤より數へて南へ三ツ目、三ツ岳の澤と眞正面に落合ふ澤（中ゴヤ澤）が圖上に於ても最も登高度少く、澤の傾斜もゆるく、尾根に取付く附近の地形も先年三ツ岳より望んだとき最もよささうなのでこれを登る事に決めた。

米は昭和七年の十月中旬、三斗餘を烏帽子小屋へ揚げて置いた。

尙、冠松次郎氏著、「黒部」所載の、十月下旬、東澤乗越附近よりの赤牛岳の寫眞や、立教山岳部報所載の、逸見氏の「黒部より赤牛岳」等の寫眞は大いに參考になつた。

拾月中、芦嶮寺、立山登山案内人組合に、越中側より五色、木挽山の尾根の状態を問ひ合せた處、状態は悪くて、冬期通過不可能の旨、返信があつた。黒部本流は架橋するか徒渉せねばならず、事によつたら、東信歩道が通れるかも知れぬとの事だつたが、結局越中入りは日數がかかるので中止した。

準 備

食料に就ては主食を米とし、副食物には含水炭素を多く含むものを携行する事にした。この點野菜は最も適當したものであるが、重量が増すので勢ひ制限されざるを得なかつた。

鹽分補給として鹽辛。その他粉ミルク類、乾柿、乾葡萄、鰯、鱈の粕漬等風變りなものまで携行した。

スキーは東澤谷の深雪を顧慮し長大なものを持つて行く事にきめた。

ビッケルは最も短いのが幾日ものスキー及び輪櫟行軍に邪魔にならぬと考へた。

日 記

十二月廿五日、午前十時大町對山館着、兼ねて約束して置いた櫻井一雄、弟親次も見えた。食料品の買入れ等してゐたら、大町の人等が五六人、中山スキー場へ行くとして、車を招んで、旅館のスキーを借りて自動車に積込んで出掛けてしまつた。

僕等が出發しようとしたら櫻井のスキーが無い、スキー場行きの自動車の運轉手君、早合點して一緒に積込んで持ち去つたものとわかる。

今日の間には合はぬから、明日濁に一日滞在して、輪櫟のみち踏みをしてゐる間に、使のものに送り届けて貰ふ事にして、午前十一時出發。

道普請で自動車は大出の少し先までしか行かぬ。十二時僅平着、晝食、葛の湯より少し先の山の神邊よりスキーを履く。午後三時濁着、不動の瀧の凍結状態は昨年より莊嚴味が少なかつた。附近一帯山麓は昨年より雪が少い。

十二月廿六日、晴後曇り、今日は雪踏み、三人で出掛ける心算だつたが大町より使が来る筈なので、一人留守をして、櫻井兄弟二人で荷を若干持つて、三角點の所まで道踏みに出發、留守番も退屈。小屋の前の庭でスキーを遊ぶ。正午になるも使ひは來なかつた。

午後二時半二人歸る、二二〇八米三角點の少し上方まで行つて來たといふ。

弟、親次、スキーを取りに三時半大町へ向け出發、

明朝歸着すると云つて出て行つた、精力的なのに驚く。夕頃より氣温上昇し五時頃降り出したボタ雪は吾等を憂鬱にした。今日の折角の踏跡が埋りやしないかと心配する。夜になつて稍や小降りとなる。夜、星かすかに見ゆ曉方近く雪やむ。

十二月廿七日、朝七時頃出發の用意をして居たら、弟がスキー擔いで威勢よくやつて來た。相不變ゴム長靴である。それでよいかと云つたらゴム靴の方が、水が浸みないで、雪の中でも足を焼かなかつたと獵の時の事を云ふ。藁靴の人の方が却つて足を焼いたとの事。彼のこの言は十餘日の雪中行軍の後完全に裏書された。

午前八時出發。昨日の輪櫟の跡は約五寸許り埋つたのみ。大變助かる。正午三角點着、晝食、この邊の雪量は前年と大差なし。此所よりは、昨日揚げて置去りにした荷も加はつたので、ルックは急に重くなつた。加ふるに新雪のラッセルだ。堪へ難き勞苦だ、交互に先頭をやる。雪が比較的縮つてゐたので膝位で、昨年よりは樂である。

二時五分烏帽子小屋着、二時間に三百八十米の登高の割合だ、輪櫟としては遅い方でもなかつた。状態の悪い時は一時間、百二十米も出でぬ時もある。

小屋の近くの雪中に隠して置いた米を掘り出したが、少しも傷んではゐなかつた。小屋の中を片付けて排雪する。火が燃され、莖が敷かれ、ルックの中から各々の食料、寢具、道具等が爐邊に散亂する。今年の秋米を揚げた時、薪も取つて置いたので、乾いて居り煙くない。床下へ埋め置いた罐詰が凍つて裂けさうに膨れ上つてゐる。

薬師の稜線の彼方に日が落ちると急激に暗くなる。

十二月廿八日、未明、降るばかりの星空。天氣がよいので東澤に降る事にする。三斗の米を加へたので各々の負擔量は倍加して、親次は一人で二斗を背負つてしまつた。他の荷物と共に八貫餘だ、スキーは相不變の荷厄介で雜木には引掛り、風には吹かれて、身體を揺ぶられる。一ノ澤へ下りるには小屋より直接三ノ澤へ降りずに、烏帽子、南澤岳を縦走して南澤岳の北の肩より下りるのださうだ。輪櫟で這松、硬雪、岩石の

ガレの主稜を歩く。息が切れる、風が強い。十時、南澤岳の頂上着。薄い高層雲が陽を被ひ、黒岳の上空が曇つてゐる。十時十分、南澤岳双峰の中の鞍部を降り始む。一ノ澤右股を下る。

南澤岳より派出した二三四五米の支峯が左下手に見える。百米も降つたら風が弱くなつた。(この澤は陸地測量部の五萬圖幅には、黒部川と東澤谷落合の千米も下流に合流してゐる様に書いてあるがこれは間違ひで、東澤と黒部との合流點の三、四町上流の東澤谷に落ちてゐる。これは尾根の高い部分の走向が雄山の方に向つてゐて、黒部の本流に合する如く見えるが、下流の部分はひどく西南に屈曲して切れ込んでゐる爲めに誤り書かれたものらしい。) 五百米も降ると本澤(左股)と一緒になる。此處を左股と云ふさうだ。谷の傾斜は急で到る所、雪崩デブリーで荒されてゐてスキーは履かれぬ、輪楥でさへ困難である。氣温や、雪質によつては随分危険な澤である。

二時間半程下つたら、谷の傾斜がゆるくなり、東澤の本流らしき低地が眼下に見えだした。下の黒ビンカ

の頭の側面が見える。上廊下を下流から縦に見る所である。黒ビンカが物凄く黒部谷にそげ落ちてゐる。午後一時半、大樹と岩石とに囲まれた小河段丘の南面にある掘立小屋に着いた。

この邊は、黒部溪谷としては珍らしく、明るい感じのする日當りのよい所で、雪の積り方も少く、三、四尺内外であつた。小屋の中は雪が吹込んで居り土間である。蒲團が藁に包んで梁に吊るしてある。梁と云つても、立てば頭が支へる程度だ。中の古い枯葉や、雪を排出して唐檜の青枝を敷き、薪を集め、どうやら起居出来る様にするまでには並大抵の事ではなかつた。

餘裕が出来たので黒部合流點へ散策する。小屋より約一町程で一ノ澤と東澤谷との合流地點に達す。河床は大塊の岩石よりなり、水がその間を奔落して行く。東澤を更に三四町降ると合流點に達する。黒部川は珍しく静かな瀬を成して下流の岩壁の屈曲に吸はれて行く、この邊は徒渉が出来さうだ。

歸り着いて、焚火の前に坐してくつろぐ。焚火は吾々の慰安、炊事、和樂、凡ての中心であり、凡ての精

力補給の根元である。火は四六時中絶やされぬ。直径一尺程の長さ六尺の丸太を爐にくべて置けば翌朝まである。焚火が盛んになると屋根の雪が融けて雨洩りがある。餘裕が出て来ると屋根の洩るのも氣になる。爐べりの五尺角の材木が、食卓ともなり、机ともなる。寝間と爐の境でもある。

大鳶が雪に霞んで夜は靜かに更けて行く。

十二月廿九日、吹雪 今朝は遅く起きた。

今日は東澤谷の偵察、鋸等を持つて小屋を午前八時に出る、右岸について行く。落差の極めて少い谷であるが初めの十町程の間は屈曲甚だしく、行手は見えぬ。

水勢を見ると可成長い澤だ、これでは澤歩きに大分時間喰はされさうだ。小屋より一時間程で、二ノ澤合流點に達す。東澤一帯はスキーによい。三十分程で三ノ澤合流點、架橋して南岸に達す。三ノ澤より四五町にして右岸が岩壁で行き詰り適當な雪橋も見當らぬので止むなく、唐檜の大木で架橋、重くて對岸に立て掛けるに一苦勞だつた。櫻井親次がゴム長靴の威力を示してそのまゝ河の端には入つて、うんうん持ち上げた

のは滑稽であつた。

十一時過ぎ東澤谷の東と云ふ字の邊で晝食。これより上流では本流の架橋は一ヶ所で濟んだ。

十二時三十五分地圖の谷と云ふ字の所まで行く。此所は中ゴヤ澤の一ツ手前の澤と三ツ岳西南の大澤との合流地で高原状をなし黒岳、三ツ岳、野口五郎、赤牛の一部等が見え氣持よい。此處より引返す、雪は朝より小止みない。

午後三時半小屋歸着、非常に疲れた。

十二月卅日、吹雪一日止まず。夕頃稍々小降りになつたすきに薪を寄せる。

木挽山と大鳶の尾根にかゝる雪雲の一去一來を氣にしながら明け暮らす。夜十二時頃眼醒む。戸外に出て見れば満天の星、キラキラ瞬きすぎる程だ。スゴ乗越の雪稜が白く光つて見える。土間の濕氣があがつて腹の工合が悪く、身體に元氣がない。天氣は二三日續くと空頼みして、明日は一日休養と雪の落付くのを待つ事にした。櫻井の提言に動かされた故爲もあるが身體のコンディションが未だよくなかつたのだ。

十二月卅一日、朝はぐつすり寝込む。屋根のすき間からコバルトの空が見え、久し振りで冬には珍らしい明るい陽光がさし込んでゐる、今日は大晦日。

午前十時明日の行程を容易にするためシュプールをつけに行く。櫻井兄弟は小屋に居残る。昨日の跡が吹かれて全々なくなつてゐる。銀砂の様にさらさらした嚴寒の雪を蹴る味は他では容易に求められぬ。ゾームが素的によく利く。昨日の半分の時間で三ノ澤上手の大丸太の一本橋の所に到着。雪と河水のしぶきで凍つて危い。ルックサクとスキーを二度に運ぶ。四ノ澤附近より引き返す。歸途気温上りワックスに雪附着し滑らず、陽は暖い。下流には雄山、上流には黒岳、赤岳、ワレモノ澤の鞍部等が麗朗の山膚をさらしてゐる。十二時半小屋歸着。

午後小屋の附近でスキーを楽しんだり黒部合流點までスキーで降つたりする。午後二時頃より曇り出し、小雪ちらつき出しさしも良かった天候はたちまち悪變した。夕頃に至つて本降りになり、今朝大英斷を以て、出發しなかつたのが悔いられてならぬ。千載一遇の好

機は遂に去つたか。

案内者の意見を採用した事が今更残念である。

一月一日、吹雪 昭和八年は明けたれど一向意氣揚らず。午後より幾分小降りになる。夕刻天氣恢復の兆見える。夜半星見え晴れる。

一月二日、快晴 絶好の天氣、一昨日より一日半吹雪いたので新雪二尺。小屋附近の積雪六、七尺となる。雪は深いが今日を措いて行ける日は無いので、早くより支度する。

午前六時四十五分明るくなつてから出發。卅一日のシュプールは跡形もない。コンデションは矢張り卅一日の方がよかつた。二人はスキー、一人は輪襪。息せき切つてついて来る親次が氣の毒である。午前十時、廿九日の到達地點に着く。少憩して小晝食を採る。森林中の乾粉雪は歸路の滑降に無上の魅力を感じしめる。

中ゴヤ澤は初めの内は傾斜がゆるく直登高出来るが二百米も登ると、ジックザックに切らねばならぬ。降雪中に起つたらしい、雪崩の條痕をかすかに認める。



赤牛岳主峯

小池文雄



中ゴヤより薬師岳を望む

小池文雄





午前十一時半二三五〇米の谷の中段をスキーデポとす。少憩して輪標に履き換へ、深雪に胸までもぐつて奮闘する。五十米も登ると谷が扇状に開き純白の大斜面が展開する。スキーの方が能率的であり降りる滑降を誘ふ事頻りで、スキーを置いて来たのが惜しい。雪質、斜面の具合と云ひ、斯程にまとまつた絶好のゲレンデは白馬、八方邊りにも一寸無い。陽光に照

らされた雪の大斜面からは軽い霧が立ち揚り早くも午後の曇を豫知させる。重き歩みも、近づき来る蒼空と共に軽くなり十二時三十五分、待望の中ゴヤ鞍部に達す。薬師の東壁が陽を受けて輝き、黒岳は南に高く連互する。嗚呼如何に久しくこの景を憧憬した事か。風が強い。暖い茶と蜜柑とパンとで晝食。十二時五十分、西風に抗しつゝ赤牛頂上に向ふ。途中三ツばかり小隆起を越すのだが一寸した登りでも今は堪へ難く苦痛である。輪標の縮紐が切れた。締め直す手先も覺束ない。こんな山稜はアイゼンと輪標を一緒に履いたら都合がよいと思ふ。櫻井は慣れたもので岩石の斜面でも輪標でどンドン行つてしまふ。

二ツ目の隆起から見返した槍、穂高は素張らしいものだつた。先程スゴ乗越にたむろしてゐたガスは、早や赤牛の頂巔をかすめてどンドン押し寄せて来た。眞面に受ける西風の猛威は凄い。あえぐ呼吸に歩並も疲れて、一時五十五分漸く赤牛頂上着。あたりは早や混沌のガスの世界、三角點の朽ちた杭が斜に雪上につきさゝつてゐる。

意慾は達せられた。低徊暫し、一面の雪、腰を下す場所もない。直ちに歸路に就く。雪上に印された往きの足跡を見逃さじと只、機械的に歩くのみである。

三時二十分スキーデポに歸着、二百米程降りてからスキーを履く。深雪が適度にブレーキするので急斜面でも飛び過ぎぬ。澤を下りきると東澤本谷の樹間を縫ふ樂しき滑降。櫻井一雄はスキーの先を突込んで折つてしまつた。先端は仲々見付からぬ。この良雪をみすみす、輪標で揉みたくるのを思ふと氣の毒でならぬ。今朝の跡があり輪標を持つてゐたので、不幸中の幸だつた。

午後五時十五分小屋歸着、輪標隊も六時前に歸り着

いた。歸りは夜に入ると思つてゐたら明るい内に歸られて何よりだつた。

夜は焚火を圍んで、無言の思ひ出をたどる。目指す山が登れて愉快だつた。黒岳へも行きたいが日數が餘裕少いので又の機會に讓る事に決め明日歸ることにする。

一月三日、吹雪 朝の内はほんの少ししか降つてゐなかつた。東澤小屋を始末して八時半出發一ノ澤を溯る。初め一時間程はスキーで行く。十時十五分二股。十一時三十分標高二三〇〇米邊で晝食、高度が増すと共に風と雪とが加はつて來た。深雪の輪櫓の登りは殊に辛い。十二時四十分南澤岳頂上。

雪つぶての西風は刺す様に痛い。岩石に一面に、エビのシッポが附着してゐる。烏帽子との鞍部に下りてほつとする。烏帽子東側の風陰側は雪がぼくりぼくりと股まで落込み困難した。クラストでもない。板狀雪崩の成因となる風運搬雪が結晶細かく靜かに積つたものらしい。

二時、烏帽子小屋到着、雪吹き込み居らず。烏帽子

小屋の便所は遠く雪の中で使用不可能、外が寒いので苦痛、改良を望む。

一月四日、晴 朝八時小屋を後にする。藥師、赤牛が肩より上を桃色に染め出されて何とも云へず美しい。四五町の程をスキーで降る。小さなガレの上で輪櫓に換へる。ガレのへつりの時、スキー杖を落したりして手間どる。

山毛櫓立尾根の一七〇〇米邊で、對岸の不動の崖に猿が二匹盛んにキアキア啼いてゐる。此方でも奴鳴つたが鐵砲が無いのを覺つてか、安心したらしく、間遠く啼き乍ら崖を這ひ廻つてゐた。

十時五十分濁着、金原氏に禮を述べて高瀬みちを、午後四時大町に歸る。

東澤谷は又元の靜寂を保ち続ける事だらう。

## 冬の涸澤岳越え

島田 武時

一九三三年一月二日、白出澤より涸澤岳西山稜を登り涸澤岳をトラバースし三日涸澤を下り上高地に至りし記録。

既に三一年の冬、吾々は穂高連峯の飛驒側登路を計畫した。三二年の冬、笠ヶ岳の登高の際、豫定の白出澤方面を觀察して置いた。併しながら、種々の障害はその年のこの計畫を放棄せしめるに至つた。自來一年間、私の胸中にこの方面の登攀計畫が往來した。

自分の貧しい山の經驗と技術をもつては、自分は最初から連峯の飛驒側登路を奥穂高岳附近に限定して居た。この方面の飛驒側登路として、吾々のパルテートの豫定したものは次の三つであつた。

白出澤の登降に依る奥穂高岳への往復。

西穂高澤より西穂高岳に至るもの。

涸澤岳西山稜(蒲田方面にては蒲田富士と云ふもの、白出、瀧谷間の尾根)に登るもの。

降路として考へたものは前記登路の下降及び涸澤の下降。奥穂高岳よりジャンダルムを経て天狗澤を降るものを考へた。

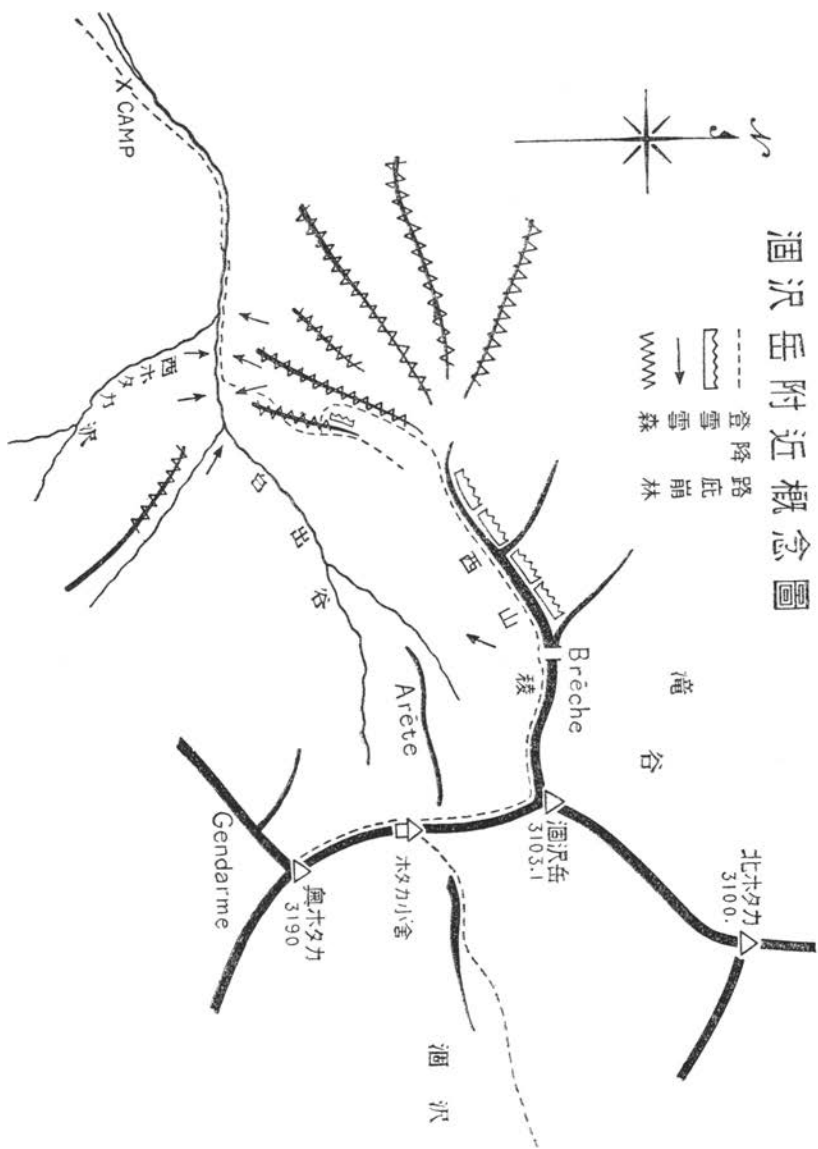
殆んど全部の登路は穂高小舎に一泊を要するので餘程の幸福に恵まれざる限り同一路を上下することは絶望だつたから、吾々はその時の積雪状態に依つて何れからかに決定することにした。更に登降距離を極度に短縮するためにビワツクの準備をなし、根據地を穂高温泉に置くことにした。

一九三二年十一月、全部のビワツクの用具、ザイル、食糧品を穂高温泉に準備した。

十二月二十九日、高橋君は北海道から、私は乗鞍岳から、そして大倉は栃尾からと、三人は中之湯で落合つた。一年振りの再會である。笠ヶ岳と同一メンバーの、パルテートは成立した。

三十日、積雪四尺の安房峠を越した。気温上昇して牡丹雪が降つた。峠からはガスのはれ間に霞澤岳を望

### 潤澤岳附近概念圖



んだ。

平湯への降路は積雪少なく相當悩んだ。平湯からは晴天となり乗鞍岳附近に盛んな白雲の往來を見た。夕方栃尾に着いた。

三十一日、最後の食糧準備をなしたが、食糧のみにて相當な荷となつた。辨次の長男も穂高温泉まで同行することとなり荷を分擔する。

天候が悪ければ苦痛に違ひないが、こんな平地を歩くに惜しい快晴だつた。蒲田附近では樹氷の前山の彼方に粉雪を捲き揚げて居る西穂高岳、南岳を、次に槍ヶ岳を眺めた。午前中に穂高温泉に着いた。北アルプスには珍らしく小さく整つた感じの良い温泉である。

午後ピワックに要する装具、食糧を持つて出掛ける。

温泉から直ちに左岸に移り全部夏道沿ひに歩いた。道は案外に悪く、途中小鍋谷出合に着いたときには、時間的に、もはや白出谷出合までの希望を捨てた。貝堀谷出合で荷を置いた。スキーをとばして遅く温泉に歸つた。

一月一日、朝小雪だつた。今後の天候の豫測でテン

トに泊りに行く豫定計畫は、白出澤出合の状態に相當の時間を要する爲、根據地をテントに移動することにし、雜品を残して殆んど食糧の全部を運ぶことにした。

吾々の數日間のキャンプ・サイドは白出澤出合間のやゝ上流である。巨大なタンネの樹下にテントを張り、床にはタンネの樹枝を厚く敷き詰めた。

このピワックには水を使用しなかつた。これは探査不十分だつた爲だが、キャンプは更に西穂高澤出合附近まで前進し得る可能性は充分有る。森林地帯に入れば雪崩の心配はない。アルバイトの短縮の爲にも、もつと前進することは必要である。

夕方既に谷間に入つた吾々の眼前に素晴らしい樹氷の前山を置いた中ノ岳がその偉容を誇つた。

ガスは次第にはれ、樹氷が夕陽に輝くの眺めて吾は明日の天候を確信した。そしてその幸運を祝した。夕食を早くしてシューラフザックにもぐり込んだ。

吾々のピワックの使用品は簡單だ。防水布に羽毛を入れたシューラフザック、カムチャッカ産の犬毛皮のウ

エストコート、トナカヒ或ひは毛布製のスノーコート、それだけである。吾々は殆んど寒さには苦しめられなかつた。勿論、テント内にランターンも、懐爐も使用しなかつた。翌朝シューラーフザックの入口は凍つてバリ／＼になりテントの内側は眞白になつて居た。併しながら色々な點からしてシューラーフザックはスマイスがカメット征服に用ひた二重のシューラーフザックか、これは私見であるが内側をフランネル位のものにするのが望ましいと思ふ。

二日 十二時 吾々は緊張して眼を覺した。空には星が瞬いて絶好の天候だ。吾々はこのチャンス逃しては何時又この天候に巡り合ふことか、しかし又なんと幸運なことか。

焚火とコップ、エル二個の全能力をあげて出發の準備をした。

二時出發となつた。始めからの豫定どほりスキーをテントに残し輪櫟のみ使用する。眞黒のタンネの森の中の廣い白出澤を登り始めた。軽い雪はラッセルの膝まで埋る。ランプの光に照されて輪櫟で活潑に進んで

行く。

谷は西穂高澤の出合からは著しく狭くなつて居る。左右からの雪崩のデブリーの土堤を越して行く。

デブリーは本谷に入つて長く流れて居るもの、又谷を横断して向ひ側の壁に押し上げて居るものも有る。全部三十一日以前に押し出したものらしく、デブリーの上部に二尺余の新雪を覆つて居る。

二日前に吾々の觀察した天候を列記すれば

三十日 穂高温泉附近で小雪

三十一日 快晴 主峯は強風

一日 午前中小雪 午後晴

四時半 瀧下に着いた。昨年冬期押し出して附近の樹木を根こそぎ薙ぎ倒し、更に衝突した小尾根を崩した谷全體の大雪崩のデブリーは大塊となつて残つて居る。そして完全に氷化して谷一杯にオーバーハンダルのしかゝつて居る。この氷塊の下部に沿ふて左の谷に入り、更に夏路どほり瀧をまく小尾根に取付いた。五時半、吾々は全く安全地帯に入ることが出来た。

當時に於ける白出澤の状態は、西穂高澤出合より瀧

下に至るまでの積雪はデブリーの上に二尺以上の積雪が有つた。

吾々は前記の天候に依つて豫測した谷の積雪は完全に間違つて居た。

又昨冬粗雑ながら笠ヶ岳からの觀察よりしても白出澤は殆んど太陽の影響を受けることがないが、しかし瀧を中心とした上下はその影響なくしても降れば必ず全部が落ち盡すであらう。

吾々の登高の際にも谷はデブリーにて埋り水流の露れて居る場所は一ヶ所のみだつた。

かゝる兩側よりのラヴィーネットツクの多いそしてその積雪の状態の豫測しがたい谷の登高は吾々は極力避けねばならない。

これ以上谷どほしの登攀は斷念した。そして吾々の意見は尾根登攀に一致した。

登路を尾根に決した以上、吾々はその行程を急ぐ必要はない。(しかしこれは又吾々の早見でもあつたが樹木の有るこの尾根の登攀には余儀ないことでもあつたのだが結果は西山稜下に於て現れた) 焚火をして暖を

とり夜明けを待つた。タンネの巨樹の梢に焰が隣めくと岳鳥が不思議相に覗きにやつて來た。靜寂な周圍の巨樹の下の焚火は太古の原始人の生活である。

六時半、漸くの薄明りを利用して登り始めた。直ちに夏道に分れて尾根筋を登る。

珍らしくやせた、そして急傾斜をなした尾根である。樹木はその岩に喰ひつく様にして立つて居る。又岩は樹木の根に依つて支へられて居る様な光景でもある。

木と岩の尾根をトップには肩を借し、セカンド以下には手や足を借して引張り上げて登つた。吾々はこの小さな支稜を登り詰め、潤澤岳西山稜の主稜下に着くこの短かい距離に四時間を要したのだつた。

太陽は既に西山稜の南面一杯に輝いて居る。潤澤岳はその特異な姿を眼前に現した。笠ヶ岳はその下半身をミルク色の雲海に隠し下半身をピンク色に輝かして居る。

改めて吾々は周圍の景觀を展望した。この小尾根のアルバイトは吾々に寸時の展望も許さなかつたのである。奥穂高の北面も西穂高岳のそれも未だ陽も受けず

に眞黒である。

吾々は支稜を登り切り、主稜の南斜面に取付かんとした利那、豫想もしなかつた難關に直面してしまつた。その斜面は凡そ二百米突前後のものだつた。

三十一日の強風のためか、あるひはそれ以後の無風状態のもとに降り積つたか、その積雪が不安定な状態となり、トップの數歩の踏込みとともに音をたてゝ落込んだ。更に斜面をトラバースせんとしたるとき、斜面は陰鬱な音とともに微動し上部に龜裂を生じてしまつた。吾々はまだ龜裂で終つたのみだつたことは大きな幸福だつた。雪崩が生じてしまへば支稜をはなれたばかりの二番、未だ支稜をはなれなかつた三番も共に捲き込まれたことであつたらう。

この斜面の下部の雪は小雪塊となつて無數に轉つて居る。吾々はかゝる上部の登攀にもつと温度の影響を受けざる以前に通過しなければならぬ斜面があることを豫想しては居なかつた。尤もこれは強ち温度の影響を受けざる以前に於ては絶對安全とは斷言し得ざるも危険の率は比較的小となるであらう。今朝の焚火で

夜を明した時間が惜しまれた。

この登路はこれで完全に絶望だつた。吾々はこゝで斷念しなければならなかつた。再び支稜を降つて安全地に引返した。

安全點に立つて更に登路を調べた。吾々の立つて居る尾根の左方の支稜まで尾根の隆起を見せて居る。そして、可成りクラストして居るらしく表面は輝いて居た。併しその尾根までの谷の横斷は如何にするかが問題だつた。

吾々はこの谷の横斷の安全點を發見する爲に再び尾根を降つた。漸く吾々は谷の深まつた一點にそれを得て一人づゝ慎重に渡つた。雪質は粉雪、よく落付いて居た。併し吾々は絶對安全と思つたわけではなかつた。今にして思へば少々亂暴な沙汰だつたかも知れない。辿りついた尾根の雪は主稜までクラストが連續して居た。十一時半、漸く主稜の末端に取付くことが出來た。吾々はこの主稜に着いて始めて安堵の中食を取つた。今朝から、九時間のアルバイトの緊張も幾分かゆるんだ。





濁澤岳飛驒側

島田武時



濁澤岳西山稜と北穂高岳

島田武時



天候は益々良好だ、微風だにない、笠ヶ岳方面の雲海も動かない。冬のアルプスにこんな良い日は滅多に望み得まい。

主稜は瀧谷側に巨大な雪庇を形成して居る。墜落を防止してアンザイレンシクランボンをつける。

この主稜は穂高連峯の飛弾側の展望臺だ。

北穂高岳はその物凄い断面を展開する。その北頂あたりから頻りに呼ぶ聲がする。

雪庇はブレイッシュからなくなつて居る。ブレイッシュの山稜は百米突位の距離ながら完全にアレートとなつて居る。慎重に交互確保して渡る。

瀧谷側から急激にガスが上昇して來た。笠ヶ岳を包んで居た雲海が活動しはじたのである。

ブレイッシュから頂上の山稜は全部マーブルクラストして居た。岩には皆、蒼氷が附着して居る。氷で結ばれて居るこの状態は夏よりは遙かに歩きよい。エックェンシュタインに物いはせて登る。

ブレイッシュの急斜面を登り切つてからは吾々は時間節約上連続登攀で頂上に向つた。

四時半頂上に着いた。終日好調だつた天候も頂上に着くと同時に完全に崩れた。ガスと寒風が襲ひ頂上の休息も許されない。休む間もなく穂高小舎に急ぐ。五時吾々は小舎に着いた。

三日、朝來強風だつた。二日以来の降雪量は甚だ僅少だつた。吾々は白出澤の下降は昨日の登攀の際既に斷念して居たし何時變るとも分らないこの風ではジャンダルム附近の通過も困難と思はれたので、最後の涸澤を降ることにした。

風のおさまるのを待つて居たら天候が悪くなりさうなので辨次の希望の奥穂高に向つた。果して頂上に着く頃より吹雪となり眼も開けて居られない。

午後、直ちに涸澤を下降する、鞍部からのザイテングラートを下る。相當クラストして居るので輪漕では困難なので涸澤岳側を降り小舎建設地に着いた。

涸澤の下降について多く云ふ必要はない。少なくとも二三日は大した積雪もなく又變化した雪質もなく安定した状態に有つた。池の平まではデブリーを認めなかつた。

池の平から本谷の合に出るまでに二三の新雪上層雪崩らしき小デブリを認めたのみだった。

吾々は全行程を輪樑で終始した。落込んで苦しんだ場所は穂高小舎から池の平までだった。吹雪は池の平で止んだ。横尾本谷の合からの林道は簡単に歩けた。

徳澤小舎に入る頃は既に日も暮れた。小舎では會員初見君にお茶の御馳走になり、更につかれた身體を進めて上高地に向つた。

素晴らしい月夜だった。吾々の山行の終りを祝福する様に。

全て當り前の様に、簡単に吾々の友人二人を奪ひとつてしまつた常念岳のピラミッドがおだやかな銀色に輝いて居た。

後記——輪樑使用に就いて

最近、吾々は多くの輪樑の研究の發表を見て居る。以下少しくその使用に依つて得た経験を述べる。

輪樑は古くから存在して居た割にスキーに壓倒されて居た。

吾々はこゝ二三度の山行は全部輪樑を使用して居る。そして輪樑がその缺點を考へられて捨てられて居た多くのその缺點に對して何等の苦痛を感じなかつた(スキーと比較して)ことは事實である。

登降に際してはむしろスキーに優る點を多々發見して居る(これはスキー術そのものの巧拙に關係して居ない)。

小さな經驗に依つて觀ればスキーに比較して確かに落込む。併しながら引き揚げる場合の表面の抵抗の僅少なために大した勞力を要さない。これは濕潤雪の場合のスキー登降に苦しめらるゝ事が多い。更にトップのシュプールをたどれば殆んど勞力を要さないのである。これはスキーと同様である。

登高に際してはジックザキングに歩く必要はない。

相當のアルバイトの登降によつてつかれた身體を以つて、スキーデボイよりスキーをあやつるよりは輪樑で谷底を眞直ぐに降つた方が遙かに早く且つ疲勞を少なくする。勿論、登高の際のシュプールをたどればなほ能率をあげ得る。

輪樑の齒は木であるが、硬質の木材を使用して有るから、そのピックを鋭くすることに依つて、スキーにはエッジの利かぬ程度のクラスト上もなほ且つ安全に歩き得る。スチールエッジ・スキーの及ぶところでない。

又スキーに依る雪崩の發生も輪樑なるために幾分避け得らるゝことも確かである。既に又雪崩に遭遇した際に於ける場合も、その例を常念岳一ノ俣の救援隊の遭難に見て考へて居るのである。

勿論、輪樑使用はアプローチの短い穂高岳、劔岳等の如きに使用すべきであつて、白馬岳、乗鞍岳、立山等の如きはスキーの使用は當然である。

輪樑、スキーのコンビネーションは勿論必要なことながら、何れをえらぶべきかに至れば吾々は躊躇なく輪樑を採る。アプローチの短かい山ではスキーに比較してより多くの利益を認めて居るからである。

スキーをエンジンとするゲレンデは生命を脅かす危険な丘陵状の山々にこれを求む可きである。

輪樑の縮具については既に多くの研究があるが自分

等は普通飛驒の人々の使用するものそのまま靴に使用して居る。簡單なもの程、寒い時に締めなほしが容易である。横を踏んで苦しむのは最初だけである。縮紐は皮がよい。皮も毛のついたまゝのものゝ方が靴が滑らなくて良い。決して雪が付いて苦しむことがなかつた。

吾々の使用するものは、栃尾の大倉が作るものである。上州、越後、南アルプス方面のものに比較して斷然拔んで居る。吾々は一箇の完成した藝術品として使用して居る。

同行者 高橋榮一郎君 大倉辨次郎君

所要時間 潤澤岳登高

キャンプ(二・〇〇)―西ホタカ澤出合(四・三〇)―尾根上の焚火(五・三〇―六・三〇)―潤澤岳頂上(四・二〇)―小舎(五・〇〇) 一九三三、二

## 臺灣の山岳漫談(二)

沼井鐵太郎

前號には、三五〇〇米以上の臺灣高山に就いて述べた。但し前文に就いて少しく訂正補足する箇所がある。

第一、一五二頁所載新高東山の初登者は本多林學博士と齋藤音作氏一行で、時は明治二十九年十一月である。

秀姑巒山・ウラモン山の項に初登は伊藤技師としたが、これは誤りで、秀姑巒山の方は大石浩氏であり、ウラモン山が伊藤氏である。なほ本誌二十七年三號に新名「秀姑巒山脈」によつて鹿野氏はこれ等の山々の精細な紀行と覺え書を發表されてゐるが、氏の平生の態度にも似ずマボラスを誤稱のまゝ認めようと提言された事に對しては筆者等は反對である。臺灣山岳會で目下印刷に附しようとしてゐる「新高登山地圖」には舊誤稱マボラス山をウラモン山と改め、秀姑巒山はそのまゝ

六六

として編輯されてゐる。南湖大山の項にてマビーサン山の事を書いたが、南湖大山東峰からこの山への縦走は昭和二年三月吉井隆成氏一行によるものであつた。

シミタ又はバボー・ムトロップの項で、この嶮山へ大霸尖山方面からの登攀が昭和六年北田、宇佐見、井上氏等によつて始めてなされた事には動きはないが、その試みは以前一回あつた。即ち大正十二年十月五日新竹州大湖郡モギリを發した新竹州の次高山探險隊は六日目大霸尖山南の連嶺最低鞍部に出で次高山に向つたが、シミタの絶頂下二町位の所で登攀不能となり憾みをのんで引返したといふ。當時シミタを次高山北角と考へてゐた様である。この行の最後迄の登攀者は中間警部及び蕃人一名のみであつた(山岳二十二年三號六十一頁參照)。

關山の項で、大關山蕃害事件は昨年末になつて漸く結末を告げ、犯人は未歸順蕃のラマタセンセン及びタロムと共に謀した蕃人等なることが分り、彼等は直ちに逮捕された。一般のこの地方入蕃禁止もやがては解かれるであらう。

大水窟山の項で、大賀・後藤氏等がこの山だけで引返してゐると書いたのは、大水窟山及び秀姑巒山だけでと補足する。

菩萊主山の項で、登高行第八年一二五頁によれば、トロック蕃名はレギヤツカサツサ（日陰の山の意）と呼ぶ由を補足する。

以上主なる訂正補足終り。次に三五〇〇米以下の臺灣高山に就いて山日記を見ながら、やはり高度順に話すことにしよう。

### ホルボと東巒大山

山日記にある東巒大山（三四六五米）は鹿野君によると南東峰（三四八五米）と併せて蕃稱ホルボといふ。故に表には東巒大山（三四八五米）とするか、或はホルボ（南東峰）を入れるかするべきである。文化人初登の記録者は昭和六年九月鹿野君である。

リリヤハ山（三四四一米）及び

ルムラモル？（三四二〇米）

リリヤハは蕃地々形圖大社圖幅で一三五六尺の山

で東郡大山の南西一キロ半の所にある。昭和六年夏鹿野君の踏査によつて山名を知る。

ルムラモルは蕃地々形圖畢祿山圖幅で中央尖山南東五キロ半の中央山脈上にある一一二八六尺の山、文化人の初登は昭和七年八月臺灣山岳會の千々岩助太郎、宇佐見守、齋藤三男、田口與四郎氏等だが、蕃名はシカヤウ社稱呼（鹿野君による）但この邊は内タロコ蕃シラック社の狩獵區域である故その蕃名を正名としたいが、昨夏の縦走隊は記録を紛失したので不明、故に？の符號を附したのである。この山は巨大な地壘狀のマッシュイヴな相貌だが、南面・西面の崖は寧ろ中央尖山以上に惡場で墜石が多いらしく、流石勇敢なタロコ蕃人も稜線通りは通らない。縦走隊も東方遙かに避けて通つて背後（北側）から登頂した。

### 合歡山・合歡山東峰・北合歡山

合歡山東峰は近時東合歡山と呼ばれる方が多い。合歡山又合歡主山はトロック蕃これをルギヤフ・ポウラウと呼び（登高行第八年一二〇頁によればレギヤツカ・ドゥ

ユク)、山背などらかな、緩やかな方の臺灣山岳の典型である。文化人の初登は大正三年十月、例のタロコ大討伐の際野呂寧氏一行となつてゐる。東合歡山のトロッコ蕃名はデユギヤック・ショオウン、初登は同前、北合歡山の蕃名はデユギヤック・ウシルン(トロッコ蕃)、マヘヤン・ポウラウ(タロコ蕃)で、初登は恐らく同前の頃であらう。明かな記録は昭和三年臺中州側から直登した小林勇夫氏のものである。東合歡山は山勢稍急で特にその西・北面は急な岩場もあるが、北合歡山は合歡主山より更に悠々たる山背で、若し多量の積雪時にでも行かうものなら、上州の四阿山あたりを思ひ出すだらう。又北合歡山の山體主部は寧ろ中央山脈脊梁から西に外れてゐる様である。タロコ峽の宣傳は終に水源のこの山々をも巻き込んで、タビト霧社間の道路開鑿に關する新規豫算も取れる事になつた。嘗て砲をひいた軍隊道路は大方破壊してしまつた故、横斷道路が開通し駐在所が山上に出來れば、北部中央山脈の登山には便利になるであらう。

## 桃 山

これはモモヤマと發音し、領臺後遠望上の山容からつけられた山名らしい。蕃名はピヤナン社、シカヤウ社あたりではスバカロ又はスバカロといふ。文化人の初登は大正十年山林課の大石技師の一行で、「山と溪谷」十六號に昭和四年八月吉井氏の初登とあるのは誤りである。この山は中々形がよく、登山も簡單であるが、登山家には一回きりしか登られてゐない(昭和四年夏臺北高校の船曳氏一行)。昭和五年の春キヤワン溪畔の宿りにて海拔五千五百尺の清冷な流れで水浴し乍らこの山を見つめてゐる時、何かしら筆者の記憶おぼろげなる上高地の昔を思ひ出した。シカヤウ社蕃人は昔桃山の肩を越えてガオガン方面へ旅したものであるといふ事も聞いた。

## シンカン山

この山は麓の蕃人達には一種の靈場視されてゐるものだ。新高山あたりから見るといかつい肩をして一方



の覇者たる風貌を示してゐる。初登は昭和五年四月吉井隆成氏、第二回は昭和五年七月、慶應義塾の先輩大賀道高氏、現役の後藤氏等の組である。この組は私かにシンカン山の初登と岩場を覗つて來た様だつた。吉井氏の初登を筆者が知つたのも、大賀氏等來臺の直前であつた（登高行第八年参照）。なほシンカン山にはその後臺北一中山岳部が登つた丈である。又、登頂せりや否やは疑問だが、故森丙牛氏の残した地圖を見るとシンカン山附近を朱線で越えたもののやうに書かれてある。臺灣登山史上の初期に於て最も進取的だつた同氏の事故或は登つたのではあるまいかと筆者等は思ふ。

## 畢 祿 山

蕃稱はデュギヤック・タハフーリ（トロック蕃）、ムッタライホル（タロコ藩）。初登は記録の上では昭和四年一月小林勇夫、藤井隆、平澤龜一郎、鹿野忠雄その他の諸氏及び筆者の組となつてゐるが、大正初年タロコ討伐の時に既に登られてゐなければならぬ筈である。その後は昨年八月千々岩氏等がタロコから登つて中央尖山

の方へ行つてゐるし、本年一月に專賣局煙草工場の若い人達が同じくタロコから往復してゐる。畢祿山も一寸變つた山で、特に東稜のぎざ／＼が遠望上の特徴となる。南方鞍部は俗に畢祿鞍部と稱し小池があるが、此處で鹿野君は高山上の珍らしいシジミ貝を發見した。

## トンノフ・コワレ（三三七七米）

この山と次を畢祿山・丹大山の間に入れる。蕃地々形圖シルビヤ山圖幅で次高山の西方約六キロの地點にある一一四三尺の山。初登記録は昭和二年十一月伊藤、上野、吉井氏等の次高山・大雪山・小雪山縦走の時得られた。蕃名トンノフ・コワレは吉井氏による。

## シボボス山（三四七二米？）

蕃地々形圖公埔圖幅でシンカン山の西方八キロ餘の所にある一一四五六尺の山かと思ふが、確實ではない。初登者は吉井隆成氏、昭和五年五月の探險。

## 丹 大 山

蕃名はトンノリンハルといふ。初登は大正十三年十

一月大石浩氏の探險調査隊によるとせられてゐたが、昭和五年五月、小林勇夫氏の馬太鞍溪源頭の調査により、大石氏は最高點の一つ手前で戻られたらしい事が判つた。従つて初登者は小林氏一行となるべきである。因に記す、丹大山とウラモン山(舊稱マボラス山)の間の地形圖殆ど一杯の長い山脈も、昭和五年に丹大山とウラモン山の兩方面から調査隊が進んで文化人の足跡をつけてしまつた。

### シカヤウ大山 (三三六四米)

山日記丹大山の次に入れる。蕃地々形圖シルビヤ山圖幅で次高山南東凡そ三キロ半の所にある一一〇〇尺の山、蕃名はバボー・ルコワッサウであるが、シカヤウ社から見て次高山をおほひかくしてゐる大塊なる故を以て、いつとなくシカヤウ大山といふ通稱になつてしまつた(シカヤウはヤ、ウ、と文字通り發音する事)。文化人の初登は大正十二年七月十二日伊藤太右衛門氏等である。以來次高山登山者は殆ど全くシカヤウ社からスカイラン溪を遡りシカヤウ大山へ登つてから行く

のである。次高山登山のらくでない事は五千尺の溪畔からシカヤウ大山一萬一千尺迄可成り急な大斜面を一氣に登らなければならぬからである。

### 薔萊主山南峰 (三三五七米)

蕃地々形圖薔萊主山圖幅に記名されたこの山はその東方の一一〇七八尺の最高峰に移すべきである。従つて山日記の同山標高を表記の如く訂正し、且つその位置をシカヤウ大山の次に持つて行かなければならぬ。この山の初登は陸地測量部員大正三年頃と思ふ。通常能高越えをする人々が序でに登るのは低い方の峯(三三三五米)である。山日記にはこれを西峰として附記すべきである。この峰の蕃名はレギヤッカ・レヒグンといふ由(登高行第八年二二六頁參照)。

### ワシバン山 (三三五五米)

蕃地々形圖郡大社圖幅で東郡大山の南々東四キロの所にある一一〇七三尺の山。蕃名は昭和六年の初登者鹿野君による(山岳二十七年三號鹿野君の稿附圖參照)。

## 白姑大山

山日記には八姑大山と誤記してゐる。假名でハック大山とするが最もよい。

## イザワ山 (三三四二米)

蕃地々形圖シルビヤ山圖幅で大霸尖山(ビヤナン社圖幅)北西約三キロの所にある山、いつの頃からかこの山名になつたが、伊澤か井澤か漢字が不明である。蕃名は新竹州竹東郡の桃山蕃人はルギヤフ・バイタマンといひ、同郡テントン社・パスコワラン社・メントユ一社等の蕃人はバポー・カレー(マダラ溪上流のカレー溪の頭位の軽い名か)といつた。新竹州から大霸尖山に登る時に通過する山だ。文化人の初登者は不明だが、記録としては昭和二年夏生駒氏及び筆者等が最初である。

## カボワラン山 (三三三三米)

イザワ山の次、能高山南峰の前にこの山を置く。蕃地々形圖シルビヤ山圖幅で次高山の西微南方約八キロ

の地點にある次高山・大雪山連脈上の一一〇〇〇尺の峰。東隣は一〇六八〇尺のタナン山である。初登は昭和二年十一月伊藤、上野、吉井氏等の一行である。

## 能高山南峰

この山の初登は能高山初登者の中井宗三氏ではないかとも想像されるが、根據がないので記録の上では大正六年十二月警察職員が最初となつてゐる。登山家としては昭和四年三月臺北高校の船曳、齊藤氏等が最初である。

## 南双頭山

昭和五年四月下旬吉井隆成氏一行が初登の記録を得た。その登頂コースは打訓社クインよりラクラク溪・ココス溪の間の尾根を登り、頂上から更に南方に向つた。

## 卑南主山

ビナンシュザンとよむ。セブクン蕃の稱呼はサカキバンといふ。初登者は吉井隆成氏、昭和二年十一月、

登頂當時は雪が降り霧氷を生じて帝國最南の雪景が麗はしかつたといふ。所謂内本鹿越又は卑南越と稱する中央山脈横斷道路は石山の山腹から卑南主山の南を越すやうになつてゐる。又中央山脈は卑南主山附近から三千米以下に低くなつて南方の大武山に到つて再び三千米を抜くのである。卑南主山はその北方に最近臺灣には珍らしい高山湖(遙拜ノ池と命名さる)が発見された事で注目すべきである。

### 干卓萬山

カンタバン山とよむ。干カシと卓カシの間違ひ易い故假名の方が適當である。初登は大正十三年三月殖産局の山下新三氏一行である。蕃地々形圖萬大圖幅の記載は崖を誇示し過ぎてある。この山と卓社大山その他無名峯巒の一群の山塊は遠望上甚だ音律的であり、蕃人狩獵隊と共にワンダリングを試みたい感を抱かせる。そうしたことは目的は他にあつたらうが、嘗て(年代不明)警察の人々によつて凡そ一週間カンタバン山塊の山行がせられた事があるさうだ(元霧社分室主任高井警部

の談による)。

### マカウバ山(三三〇三米)

干卓萬山の次にこの山を入れる。蕃地々形圖ハック大山圖幅で白姑ベック大山の南西二キロの地點にある一〇九〇〇尺の山。

### カシバナ山・郡大山

カシバナ山の初登録は大正十三年十一月大石浩氏一行、郡大山のそれは大正十五年十月である。登山家の記録は前者にはなく、郡大山の方は昭和六年七月三十日鹿野忠雄君が東埔から一日で往復した事を知るのみ。

### タロコ大山

漢字では大魯閣大山と書く、最初の記録は大正九年七月山崎嘉夫、伊藤太右衛門氏等一行である。全體タロコ大山は中央山脈の昔葉主山北峰から東派した可成り長大な複雑な山脈中にあり、名のある山はタロコ大

山一つ位に過ぎないが、九千尺級以上の無名の山巒は重疊して遠望上鑑識が中々困難である（これは一面臺灣山岳の特色でもある）。最初の探險隊もいづれがタロコ大山の絶頂か判然としなかつたさうである。この山脈は又、今流行の大タロコ地域の兩雄——タツキリ溪と木瓜溪——の分水嶺になつてゐる關係上、將來觀光横斷道路などの通ずる運命を持つてゐるかの如く思はれる。

### ボッコル山

タロコ大山の次に入れる。蕃地々形圖シルビヤ山圖幅で次高山の北西約三キロ半の所にある一〇八四五尺の山。初登記録は昭和二年十一月伊藤太右衛門、吉井隆成、上野忠貞氏等の次高山・大雪山縦走の際に得らる。然し大正十二年新竹州から次高山への探險隊がこの山を通過してゐるかも知れぬ。ボッコル山はシイロン・ボッコル（シイロンは池の意）から來た名であるといふ。因にこの山の東南山腹鞍部の南にゴンゴスクッシャといふ調査隊の野營地がある。それから次高山

稜線を上つて來ると一萬一千二百尺の所にシロン・ハガイといふ地名がある（以上地名は吉井氏による）。

山林課調査隊の通過した翌々年即ち昭和四年夏、臺北高校の登山隊は新稱上ノ池、下ノ池といふ二つの小池を發見し寫眞を撮影したりしたが、これ等は恐らくシロン・ハガイと同物であらう。筆者も昭和五年の春次高山北方の行進の首途にこれ等の存在を確かめたが、若し一年中池水の涸れることがなければ、上ノ池は恐らく日本最高の池であらうと思つた。序でに次高山から北西流する溪谷はハブンカルチンといひ末は大安溪となるものである。

### 卓社 大山

初登記録は大正十一年三月山下新三氏一行となつてゐる。登山家の記録としては昭和三年七月下旬登頂した鹿野忠雄君の詳細なる記録が本誌第二十六年第一號に掲載されてゐる。なほこの前に某農林學校の學生が登山したとかいふ話もあるが判然としてゐない。干卓萬山の項參照。

## 小 關 山

マショヅカン山(三二四六米)

初登記録は昭和五年十月山林課八木、平原氏等の一行による。この以前即ち昭和二年十一月吉井隆成氏一行は卑南主山から雲水山を経て小關山に達しやうとしたが、臺東廳下の蕃狀不穩の爲雲水山の手前で縦走を中止して引返したさうである。

## 能 高 山

能高山の次に入れる。蕃地々形圖郡大社圖幅で東郡大山の南西五キロの地點にある一〇七一二尺の山。初登の記録は昭和六年九月二日鹿野忠雄君。登山の立場から見て面白い岩山であるさうだ。本誌第二十七年第三號對一二〇頁の憶測圖並に第二十八年第一號の東郡大山塊の紀行參照。

八通關山(三二四二米)

能高山北峰、同南峰などと區別する爲、これを能高山などといふ向もある。初登は臺灣蕃地探險の初期時代に中井宗三氏であるとの話もあるが、年代は大正三年頃といふより外はない。登山家の記録は昭和四年

玉山(舊稱前山)は廢し、屏風山の前にこの山と次のタナン山を入れる。

春臺北高校山岳部が根據地を能高駐在所に置いて北方から登り更に南方に越えたのが恐らく最初であらう。能高山の山頂には巨岩壘々としてゐて頗る豪壯であるらしい。遠望上も骨のある立派な山容である。蕃名はリギャッカ・トモンといふのが報告されてゐる(登高行第八年一二八頁參照)。

八通關山は蕃地々形圖新高山圖幅で八通關の東方にある一〇七〇〇尺の山をいふ俗稱だが、餘り良名とは申されない。そのわけはそまゝ、八通關とは新高山の蕃名パットンクワンに當てた支那文字で、吳光亮の開いた横斷道路の要路に當り四通八達の意味から現在の八通關の地名となつたものらしい。これが既に誤つてゐる所へその向ひの山だから八通關山だとは少々不穩

當である。八通關の屯所としての地名は間違つても生きた面白い名であるが、どうも山名に迄及ぼすのは感心しない。いづれ正確な蕃名を探つてから改稱をすすめたいと思ふ。初登記録は不明、但その中腹迄は屢々寫眞撮影のために登られる。

### タナン山 (三二三六米)

蕃地々形圖シルビヤ山圖幅で次高山の西南西約七キロ半の所にある一〇六八〇尺の山。初登記録は前述ボツコル山と同じ。この山の北東隣は三三七七米のトンノフ・コワレ、西隣はカボワラン山である。

### 屏風山

トロック蕃の蕃名はデユギヤック・プタカンカーロといふ。初登記録は大正三年タロコ討伐當時の軍隊及び警察官隊であらうと思ふ。蕃地々形圖昔萊主山圖幅には合歡山東峰の北面から溪を渡つて屏風山・昔萊主山北峰との間の隆起(一萬二百尺以上)を越えトボコ溪に下る路を示してゐるが、この軍用道路は他の合歡越

軍用道路中最も荒廢に歸して今日跡をとゞめてゐないさうである。

### 大武山

蕃稱はカボロガンといふ。初登は明治四十二年十一月野呂寧氏等。帝國最南端の一萬尺級高峰であり、頂上稜線迄タイワンツガの美林を以ておほはれ、山勢雄偉、登山地として優秀な山だが、最近臺灣南端が國防上重要地點となつた爲、大武山、南大武山等を含む地形圖の發賣が禁止され、おかげで登山者は頗る不便を感じてゐる。登山紀行は臺灣山岳第四號參照。

### 劍山 (三二二七米)

ケンザンと讀む。大武山の次に入れる。蕃地々形圖ハック大山圖幅で大雪山の南東約六キロの地點にある一〇六四九尺の山。今迄登山記録は知られてゐない。次高山南稜(正確にいへば南西稜)の山脈の南端にあるピークで、北方から見ればやさしい山だが、大甲溪沿岸からこれを望むと嶮怪な削立をしてゐるのである。

命名は昭和年代の初、時の軍司令官がつけたといふ。署名はシカヤウ社稱呼ブレホンといふ由。

## 尖 山

センザンと讀む。初登録は昭和五年六月近藤盛雄氏。登山家としては昭和六年八月上旬鹿野忠雄君の南駐在所からの單獨行がある。因に臺灣にはこの尖山をはじめとして單に尖山なる山名・地名が少くない。その他何々尖山と他の字を附したものを入れれば可成りな數になる。所が尖山必ずしも尖銳な山とは限らないので、殊に平地近くには饅頭形の尖山さへある。臺灣人は一寸大地が盛り上つてゐれば民族的に大げさに尖とつけたがるものと見える。但臺灣高山では尖山は大體尖つた山、大山は大體雄大な山を指して言つてゐる。

## バトツノフ山

初登は大正九年六月山崎嘉夫、伊藤太右衛門氏等の一。營林所事業地として阿里山、八仙山と共に有名な太平山から南湖大山に行く時にはどうしても通過す

る山である。

## コハン山(三二〇八米)

バトツノフ山の次にこの山と次の能高山北峰を入れる。コハン山とは蕃地々形圖ハック大山圖幅で大雪山の南西約三キロの地點にある一〇五八五尺の山で、初登録は昭和二年十一月伊藤、上野、吉井氏等調査隊が次高山から大雪山を経て小雪山に向ふ時に通過されたものである。

## 能高山北峰(三二八二米)

蕃地々形圖菁萊主山圖幅で菁萊主山南峰と書かれた峰の南方三キロ足らずの所にある一〇五〇〇尺の山。有名な能高越の峠は舊道は、この山の北の緩傾斜地を過り、最高點は池ノ端紀念標地點の三三〇八米(陸地測量部の結果による)であつたが、新道は能高山北峰の南方鞍部によつて中央山脈を横斷し、最高點は二八六〇米の能高駐在所附近だが、鞍部は二七一七米(道路に標示の八九六六尺換算)で、結局中央山脈横斷點



は大約六百米の低下となつてゐる。序でに記すが、この新道の西側は例の霧社事件以後駐在所が増加された丈で峠頂上附近以外は變更はないが、東側は半ば以上舊道と全く別のコースを取る様になつた。即ち舊道は菁菜主山の東山稜側の山腹を通つて木瓜溪（菁菜溪といふ方可ならんか）に下り、蕃地々形圖に表示された天長山の大斷崖は山上を越してサカヘンに出たものだったが、新道は、能高山北峰の東山稜に添つて下り、最近又菁菜溪駐在所からサカヘン迄天長斷崖を水平に通る新道の開鑿を完了せんとしつゝある。この工事によつて能高越東側の嶮は緩和されると共に、人によつてはタロコ峽以上との稱ある木瓜溪の峽谷美、原始林美を遺憾なく味はへるので、趣味的旅行者にとつて有難いわけである。

能高山北峰の事に戻るが、この山の初登は能高山と同じく大正三年頃中井宗三氏であらうと思はれる。文献の上では大正八年九月乃至十一月に濁水溪上流地域調査隊として安東軍山、白石山方面から北行縦走して探つた山崎嘉夫、大石浩、古川良雄、黒澤慎介、市川雄一

朝日藤太夫、財津久平、久布白兼治諸氏である（大正九年三月二十日臺灣總督府營林局發行「濁水溪上流地域治水森林調査書」〔非賣品〕参照）。尙右の調査書には能高山北峰の別名を南花山と記載して居るが、最近南華山の字も見受ける様である。登山家としては能高山の項に掲げた臺北高校山岳部の一隊が記録を得てゐる。

#### ハイノトーナン山

五萬分一蕃地々形圖關山圖幅にはハイノーナン山とあり、三十萬分一臺灣全圖にはハイノトーナン山とトが入つてゐるが、後者の方が正しい様である。山日記にもさうなつてゐる。初登記録は昭和五年四月山林課調査隊の八木久左衛門氏の一行が關山から縦走して行つたのがそれである（臺灣山林會報五四號三九頁参照）。

#### マビーサン山

南湖大山々塊中の一峰で、本稿當初に既記の如く昭和二年三月吉井隆成氏一行が南湖大山東峰から縦走して行つたのが最初の記録である。

## 白 石 山

初登は大正八年十月、山崎氏一行(能高山北峰の項最後の箇所参照)。白石山附近は臺灣中央山脈でも最も廣潤な高原状山背をなし、將來ハイキャンパーの焦點たるべき地形を有してゐる。登山家としては昭和四年三月臺北高校山岳部の一行が能高方面から縦走してゐる丈だ。白石といふ名も臺灣では少くない地名である。

## ウハノシン山

山日記にはウワノシン山と出てゐるが、これはウハノシン山の方が正しい。筆者が昨年六月關山越當時調べた所によればセブクン語でハノセンとは燕の事で、燕が澤山居るのでついた名だといふ。セトシは蕃語音の聞きやうでどつちにもなる。伊藤太右衛門氏等の臺灣高山初登調査(臺灣山岳第六號八十六頁以下)を基礎として種々調査しても著名な一萬尺以上の高山で何人も登つた記録のないのはこの山一つ丈である。昨年初夏筆者は關山登山の第二案として關山越道路から蕃路に

従つてウハノシン山西鞍部に出でこれからウハノシン山を越えて關山に到るか、或は尙蕃路に従つて關山溪(ウキキン溪)上流より關山南肩に達しようとして計畫したが、雨天の爲果さず、その後も蕃害事件によつて決行しないのである。

## ウマボンゴ山(三二二六米)

安東軍山の前に入れる。蕃地々形圖郡大社圖幅でウラモン山(舊稱マボラス山)の北西五キロの地點にある一〇三一六尺の山。初登記録は昭和六年八月四日、鹿野忠雄君が無双駐在所から登つてゐる(本誌第二十七年第三號鹿野君の稿参照)。

## 安東軍山

往々安東郡山と間違つて書かれてゐる。然し本當は何れが正しいか筆者も調査の機會を得ないである。初登は大正三年から八年の間に陸地測量部員がなし、次で大正八年十月、山崎氏一行が通過してゐる。能高山北峰の項参照。この山へは登山家は誰れも行つてゐない。

## 西巒大山

初登記録は明治四十一年十二月の昔、伊藤太右衛門氏の一行である。登山家としてはまだ登頂はしてゐないが、昭和六年の秋に臺灣山岳會の田代、高尾、岡野、出羽、小原、吉田諸氏によつて臺北から往復足掛四日間で登山が試みられた事がある。

## 關門

關門山と記す人もあるが、舊清時代の中央山脈横斷道路の遺跡として關門と丈にして置く方が奥床しい様に思ふ。初登記録は明かに蕃人に次いで清朝の地方官一行だが、領臺後の最初の登行は大正五年に佐藤善吉氏による。昭和三年の冬筆者は丹大社よりこの關門越を計畫し、花蓮港廳側からは出迎えの搜索隊迄出た事があつたが、同行者一人もなく經費も莫大に上りさうなので中止して合歡山行に變更した事があつた。以來未だ登山家としては何人もこの由緒古い峠道を探つた者はない。一時この廢道を改作し將來の東西臺灣交通

要路とすべく測量調査隊の出た事があつたが、大體の路線測量のみで中止になつた。この峠越は東西兩方面の蕃人が互に往來し同系統なる爲に、臺灣中央山脈横斷に通有な人爲的困難が伴はない事は好都合である。

## 大石公山

初登記録は昭和五年五月山林課の小林勇夫氏一行が馬太鞍溪源頭森林調査の目的で丹大山の方からトラヴァースしてゐる。この山の北方鞍部はバットラインと稱し、水溜りのある野營地である。バットライン・關門の間は二時間行程、丹大山・バットライン間は六七時間の行程である。

## 小雪山

初登記録は、大正五年營林署技師綱島安吉氏一行である。因に八仙山・ハック大山と大甲溪々谷を挟んで對峙してゐる大雪山・小雪山の連脈は臺灣に於ける林木の大資源であり、當局もこれに着目して昭和二年十一月の調査（大雪山の項参照）以來大々的の調査を續行

したが、經費その他の關係上未だ伐採事業には手を染めてゐない。なほ登山家としては昭和四年七月臺北高校の次高山より縦走的登山があるのみである(大雪山の項参照)。

### 望郷山・雲水山

これより以下が一萬尺以下の高山となる。望郷山の初登は明治時代早くから屢々登られてゐる。雲水山の初登記録は昭和五年十月八木氏、平原氏等一行が作る。

× × ×

以上で三千米以上の現在迄名を知られた山が終つた。これからそれ以下の臺灣では第三流、第四流等々の山々になるが、これ等については初登記録その他の調査が充分でないから、山日記の訂正補足を本位として、極く簡単に記す事にする。

### ブラックサン山

初登記録は昭和五年五月吉井隆成氏一行。關山越道路からよく見える黒いどつしりした山だ。關山越の

イモスで筆者の聞いた蕃名はトンコといふ。

### コルボ山(二八八三米)

石水山の次に入れる。蕃地々形圖、公埤圖幅でシンカン山の東三キロ足らずの所にある。

### 鹿林山

タータカ駐在所はこの山の北側山腹にある故、實は鹿林山駐在所とするべきであると思ふ。なほ最近阿里山・新高山自動車道路はこの山迄開通し、同時に山頂迄徒歩道路の開鑿をする事になつたが、草生地高性山岳の典型として又好展望臺として鹿林山にかゝる施設を見る事は阿里山・新高山開發上喜ばしい。但頂上に玉山靈臺とかいふ無理矢理の美名を附してゐる事は例によつて感心しない事である。

### 錢頭雁山

新高山の南玉山からこの山を経て南面山に到る山稜は未記録地だが、この錢頭雁山の命名も地形圖の稱號

が正しきか否かは疑問である。

## 南大武山

初登は明治か大正のはじめ頃中井宗三、森丙牛諸氏が登つたらしい。登山家としての新しい記録は昭和三年正月大武山（北大武山）から縦走した臺灣山岳會の一行が有してゐるばかりで（臺灣山岳第四號參照）その後の登山者はないやうである。

## 霧頭山

判然たる記録の上では昭和二年伊藤氏、吉井氏等が最初である。これから大武山迄の縦走は、昨冬から今春にかけて臺灣山岳會で計畫されたが終に實行に至らなかつた。

## 東埔山（二八〇九米）

陸測五萬分一地形圖新高山圖幅により、この山をスーラバタン山の前に入れる。トンボ山と讀む。これから沙里仙溪にかけては大正十五年五月本會員北田正三

氏の一行がはじめて探險されてゐる。

## キナジー山

キジナー大山ともいふ。

## 三錐山（二六〇六米）

昨年發行になつた陸測圖「グウクツ」によつて舊標高を訂正し順位を下げる。蕃地々形圖と約九十米の差はひどすぎる。サカダン社駐在所橋口房一氏によれば三錐山のサカダン社蕃人稱呼はヂギヤック・ムクラアである。初登は恐らく大正三四年のタロコ討伐當時と思はれるが不明、その後一二回調査測量隊に登られてゐる。この山はその南方山足（山腹以下）が有名なタロコの大斷崖（直立四千尺と稱する）である事で注意すべきである。

## 鹿場大山

ロクヂ・ウダイサンと讀む。蕃語の意譯らしい名稱である。初登は明治四十一年十月野呂寧、森丙牛諸氏

の探險隊である。この探險隊は大湖への歸途辛くも蕃害を免れた。なほこの探險は大霸尖山、次高山、南湖大山方面の地理を明かにした初めのものである。昭和年代になつて登山家にも屢々登られ、臺北、新竹あたりから、二日乃至三日の登山地として知らるゝに至つた(臺灣山岳第六號參照)。

## 大 塔 山

この山は阿里山蕃に靈地とされてゐる山である。風景上から云へば阿里山鐵道車窓觀及び阿里山各地の風景の過半は大塔山を盟主とする塔山一帯の大岩壁に歸すべきである。裸岩の高さも本島一流のものだが、その幅のある點では恐らく臺灣一、日本一ではあるまいか。勿論尾根筋や北側からは歩行で登れる。大塔山その他の阿里山諸山については田村剛氏著の「臺灣の風景」が殆ど唯一の參考書である。

## 二子山(二六三六米)

山日記には二五七五・八米とあるが、その北峰はこれ

よりも高い。

## 塔 山(二四九〇米)

那坑山の次に入れる。阿里山の塔山とは別物で、花蓮港廳にあり、蕃地々形圖加禮宛圖幅で八二一八尺の山。

## 祝山と新望嶺

祝山は嘗て民政長官だつた祝<sup>イヒヒ</sup>氏の姓をとつた山名である。祝氏が初登者といふ意味ではない。この山は普通の阿里山訪問者が沼<sup>チヂ</sup>の平から新高山觀望に出かける所で、相當の施設がしてある。新望嶺、セブクン蕃の稱呼はバインハランといふ。

## 塔 山

阿里山の塔山は蕃名ホフツプといふ由。

## 萬 歲 山

これも阿里山中の一峰だ。最近高山氣象觀測所が建

設され、去三月十五日開所式が舉行された。

### ポアーバ山（二四六〇米）

ダイボボ山の次に入れる。陸測阿里山圖幅。

### 清水山（二四〇七米）

セイスイザンと讀む。時に大清水山といふ事もある。

陸測グウクツ圖幅によつて、標高を訂正し順位を下げる。蕃稱は舊石碇子社等の外タロコ蕃はデギヤック・タドス（タドスは兀の意）、サカダン社蕃人はヂギヤック・スコッコクといふ。初登は大正五六年頃陸地測量部員の様には思はれるが、判然たるものは昨年夏陸地測量部員の一行である。登山家として又東側直接海岸からの登攀は筆者等の行が最初である（會報二十二號參照）。

### 七脚川山

蕃名チカソワンを支那人が七脚川と當字をしたのである。初登は何時だか分らないが、登山家としての記録は昭和二年八月中旬、臺灣山岳會花蓮港支部の一行

がはじめてである（臺灣山岳第三號參照）。

### 三星山（二三五一米）

知本主山チヂの次に入れる。陸測濁水圖幅、山日記五七頁の三星山は恐らくこの三星山の違ひであらう。

### シヤカロー大山

山日記のシヤカロ大山を訂正。

### 針山（二三〇三米）

タナイク山の前に入れる。蕃地々形圖能高山圖幅で七六〇〇尺の山。

### 大尖山（鳶嘴山）

山日記には稍來山シヤライの附屬としてあるが、これは著しい岩峰である故獨立させるのが本當である。臺中から二日行程の山として二三回登山家にも登られてゐる。これと新竹州下の加裡山は共に臺灣中級山岳中の尖山型の代表者として我々の小登山の對象である。

メキーホル山(二二二〇米)

この山と次の二つの山々を加裡山と水社大山との間に入れる。メキーホル山は蕃地々形圖コーゴツ圖幅で七三二五尺の山。

五又崙山(二二〇〇米)

又、ポスコといふ。陸測阿里山圖幅。

飯包服山(二一九七米?)

蕃地々形圖阿里山圖幅。

加裡山と水社大山

加裡山の著名はルギヤフ・ペンラウフオンといふ。昨年二月から登山家の訪るゝ所となつた。水社大山は日月潭なる臺灣唯一の湖水の邊に立つ山として注意すべきものがある。登山家もこれに登つてゐる。

タマン山

臺北附近の秩父型の山——南勢溪流域の山々の内の

最高點である。登山家にも再三登られてゐる。

玉 里 山

タマン山の次に入れる。陸測玉里山<sup>クマザト</sup>圖幅。

ムカナン山(二二三六米)

ポオトン山の次に入れる。蕃地々形圖コーゴツ圖幅で七〇七八尺。

ク ル 山

山日記にバボークル山とあるのを訂正。バボーは蕃語山の意、山クル山ではをかしい故クル山又はバボー・クルとするが至當である。

崙 天 山(二二一〇米)

陸測圖公埔圖幅によつて標高訂正。順位を上げる。

アラシ山(二〇九九米)

この山と次の二つの山々を鳳林山の前に入れる。ア



ラシ山は蕃地々形加禮宛圖幅で六九二八尺の山。花蓮港の近効登山地として選ばれ、登山家にすでに登られてゐる。山日記のアラシ山は削る。

夫婦山 (二〇九七米)

蕃地々形圖番業主山圖幅で六九一九尺の山。

シャデル山 (二〇九一米)

蕃地々形圖知本主山圖幅で六九〇〇尺の山。

横岩山 (二〇四七米)

この山と次の山を大里仙山の前に入れる。横岩山は陸測東勢圖幅。

バックン山 (二〇四七米)

又は鹿湖山(宛字)である。蕃地々形圖油羅山圖幅で鹿場大山(シルピヤ山圖幅)の北西稜線續き、加裡山と谷を隔ててゐる六七五五尺の山。

奇觀臺 (二〇一五米)

關刀山の次に入れる。陸測新高山圖幅。これも阿里山の一峰である。

× × ×

山日記には臺灣の分丈二千米以下の山は載せてゐない。凡例に書かれた方針も一應尤もではあるが、地方別に高度表を掲げる上はやはり掲載すべきである。

二千米以下五百米以上の臺灣山岳

(陸)と書かざるは蕃地々形圖

林田山 <small>リンデン</small>	一九八七米	花蓮港	鳳	林(陸)
藁箕山 <small>ノシチ</small>	一九八三米	臺南	中	埔
フクフクオ山	一九七六米	同	同	
大尖山	一九七五米	臺中	埔	里(陸)
タリリク山	一九六一米	臺東	大	武(同)
李嶼山 <small>リトシ</small>	一九六〇米	新竹	李	嶼山
ナホナホ山	一九六〇米	臺東	大	麻里(陸)
ケンドオウル山 (アチウラ山)	一九五三米	同	ケンドウル山(同)	
棲蘭山	一九四二米	臺北	李	嶼山
丁字山	一九二二米	臺中	霧	社

銅山	一八一八米	臺北	濁水(陸)	カムテン山(北峰)	一七六〇米	臺東	里壠(陸)
南插天山(パボ リナゴ)(西峰)	一九一五米	新竹	李 嶺山	哈里味山	一七六〇米	臺南	竹崎(同)
(舊稱ルベエ山)	一九一〇米	新竹	同	石壁山	一七五〇米	同	同(同)
(舊稱夫婦山)	一九〇六米	新竹	同	北插天山 (舊稱タカイ山)	一七四七米	臺北新竹	李 嶺山
メクイシモ山	一九〇六米	臺北新竹	同	虎頭山	一七四五米	花蓮港	拔子(陸)
肥 嶺	一八九五米	臺中	東 勢(陸)	拔子山	一七四二米	同	同(同)
大樹林山	一八八一米	高雄臺東	枋 寮	小塔山?	一七二六米	臺南	阿 里山
南東眼山	一八七九米	臺中	霧 社	ボンボン山	一七一九米	新竹臺北	ボンボン山
盡尾山	一八七三米	新竹	大 湖	海鼠山	一七一五米	花蓮港	グウクツ社
シナレク山	一八六六米	同	ボンボン山	カタナ山	一七一五米	臺東	ケンドウル山(陸)
大棟山	一八六〇米	臺南	竹 崎(陸)	鳳凰山	一六九七米	臺中	集 々(同)
ウーフトン山	一八四四米	高雄	關 山	チヨチヨス山	一六九七米	臺南	中 埔
カムテン山(南峰)	一八四〇米	臺東	里 壠(陸)	新港山	一六八二米	臺東	新 港(陸)
眉原山	一八三五米	臺中	國 姓(同)	飯包尖山	一六八一米	臺北	コ ーゴツ
下銅山	一八二七米	臺北	濁 水(同)	笋仔林山	一六七〇米	臺中	集 々
十六分山	一八一七米	同	同(同)	大竹溪山	一六七〇米	臺南高雄	茗 濃
光崙山	一八一五米	臺南	竹 崎(同)	大窩山	一六六七米	新竹	油 羅山
ラクラク山	一八一四米	臺中	萬 大	東卯山	一六五八米	臺中	東 勢(陸)
鳥嘴山	一七九五米	新竹	李 嶺山	里壠山	一六四三米	臺東	里 壠(同)
油羅山	一七九〇米	同	油 羅山	雲戴山	一六三四米	臺南	竹 崎(同)
メントユー山	一七八七米	同	同	クワルン山	一六二九米	高雄臺東	大 武(同)

洗水山	一六二八米	新竹	大湖
芩芩園山	一六二二米	臺東	公埔(陸)
トリトリ山	一六二〇米	同	大麻里(同)
チカタン山	一六一五米	高雄臺東	枋寮
鷺公髻山	一六一二米	新竹	油羅山
獅魯凹山	一六〇八米	臺中	萬大山
クル山	一六〇六米	新竹	ホンボン山
藤包山	一六〇六米	臺南	後大埔
新武路山	一六〇三米	臺東	里壠(陸)
カホ山	一六〇一米	臺北	李嶺山
成廣澳山	一五九七米	臺東	加送灣
鳥嘴山	一五八八米	新竹	新油羅山
ヨイアナ山	一五八一米	臺南	中埔
ロツベイ山?	一五七六米	臺北	李嶺山
ケイフイ山	一五七六米	新竹	同
ラバンカン山	一五六二米	臺中	萬大山
カカリ山	一五五二米	臺東	卑南
拳頭母山	一五五〇米	臺北	宣蘭(陸)
白毛山	一五四六米	臺中	國姓(同)
ナセ山?	一五三六米	新竹	李嶺山
關頭山	一五三六米	臺中	萬大山

對萬山 一五二八米 臺中 萬大山  
 次郎山 一五二五米 同 國姓(陸)

× × ×

以上で臺灣の山岳漫談を終る。本篇に關しては臺灣總督府山林課の伊藤太右衛門、吉井隆成氏に負ふ所が多い。附言して感謝の意を表す。尙ほ財團法人臺灣體育協會から今春發行される「臺灣體育史」には、筆者が臺灣登山史を受持つて書いたからその方面に興味を有せらるゝ諸兄は參照せられむ事を希望する。

(昭和八年三月稿了)

× × ×

追補 本稿送附後なほ若干の修正箇所と新しい山名を得たので茲に追補として掲げる。

ランゴスタウラ山(三六一一米)

本稿(一)「山岳」二十八年一號に掲げたこの山は、山林課の鷺頭式氏(二回目の登頂者)によるとランゴスタ

ウラである。ラゴスは蕃女の名。又、初登者吉井隆成氏によればこの附近の山一帯はシボボス山といつて、その最高所がラゴスタウラである。ラゴ又はランゴ、いづれとも決定出来ない。雲峰の蕃名もチンカボンと記したが、チンカンボンと聞いた人もある。要するにこの附近蕃人はブヌン族で、彼等は缺齒の習慣ある爲餘計に發音がはつきりしないのである。

### ハインサザン山 (三四七二米)

東巒大山の前に入れる。新武路<sup>シンプ</sup>方面のブヌンは斯くの如く呼び、打訓社<sup>ダクシヤ</sup>方面のブヌンはシヌベシと呼ぶ。蕃地々形圖公埵圖幅で左上、ブランクの所にある山。草原性の山岳である。初登は昭和五年五月山林課の吉井技師一行。

### シンササコツ山

ハインサザン山と、略々同高の附近にある峰だといふ。これ等の山の南側三四四二米の地點に徑約百七十間の高山池が発見され、シヌベシの池と命名された。

山も池も最初の踏査記録者は前同様吉井氏である。右の池は恐らく日本最高の高山湖であらう。

### 南 双 頭 山

蕃名は郡蕃はアントンコンといふ由。

### 岐 山 (三二四二米)

山林課の地圖によると卑南主山の北に岐山一〇九〇六尺とあるが、恐らくそれは蕃地々形圖卑南主山圖幅の卑南主山北の大尾根の分岐點の山ではあるまいか。初登者はやはり吉井氏、昭和二年。

### 小 關 山

本文に昭和五年十月八木氏等の初登としたのは筆者の聞き誤りで、實は恐らく明治年代に阿緞廳長の石橋氏一行がこれを關山と思つて、西側から登つてゐるさうだ。故に一名、石橋關山ともいふ由。蕃地々形圖に路の記號があるのはその登路かも知れない。なほ昭和五年以後山林課の森林三角測量隊が登つてゐる。

### シヤカバン山 (三二二米)

安東軍山の前に補入。蕃地々形圖公埤圖でシンカン山の略々西方にある一〇三〇〇尺の山。初登は昭和五年四月、吉井氏の一行でシンカン山からこの山をへてターフン方面に下つた。これに次で昭和五年の夏慶應山岳部の人々も通つてゐる。

### タマホ山 (三〇四九米)

大石公山の前に入れる。蕃地々形圖新高山圖幅で雲峰の西にある一〇〇六三尺の山。この山は未だ蕃人外に登つた者がない。この山の南足にラホアセ一派の有名な未歸順蕃の根據地がある。しかし近い間に歸順式を擧げるさうで、この間もこの蕃地から臺北迄觀光團が來たりした。

### ターフン富士 (三〇三八米)

望郷山の前に入れる。蕃地々形圖打訓社圖幅で南双頭山の南東にある。一〇〇二五尺の山。初登は不明だ

が、屢々ターフン社方面ラクラク溪沿岸の警察官が登つて、これを南双頭山と誤認してゐたものらしい。警察官以外では吉井氏一行が昭和五年春に通過してゐる。

### 雲 水 山

本文の初登記録は筆者の聞き誤りで取消を願ひたい蕃人以外は誰が登つてゐるか不明である。但し小關山から雲水山にかけて登頂は別として稜線附近を通過した最初の文化人は明治時代領臺後間もなき頃久留島武彦氏と陸地測量部員二名の一行であらう。臺灣山岳第五號所載、見元了氏「中央山脈を最初に越えたる人々」参照。

——追補了——四月十二日

## 遭難顛末報告

### 大門山遭難略記

〔この遭難報告は、昭和七年八月―九月にわたるもので幸、辻村太郎氏の御好意によつて、當時の遭難者自身による報告が得られたので少し時機が後れたと思はれるが、こゝに載録することにした。参照地圖五万分一西赤尾 編輯者〕

#### 出 發

昭和七年八月十八日早朝金澤出發。我々の間に於て數旬前から懸案であつた大門山方面にキャンプ旅行の途に就いた。

豫定は約八日間で金澤より湯涌<sup>イッ</sup>を経て横谷峠で富山縣に入り、下小屋・ブナオ峠を経て西赤尾に出て、後は庄川に沿うて祖山・大牧に達しダムを見て青島から汽車で歸る豫定で、天幕を持つて氣の向いた所にこれを張つて一夜を過し、明日はこれを疊んでこの遠足を續けようと言ふ呑氣な旅行であつた。

持ち物は約一週間分の食料・防寒具・天幕・手提電燈

等々々三貫宛程の荷であつた。食糧は不足すれば途中の村で買ふ事にして居た。

一行の氏名は 木村直 臣(二十三歳)

島倉義 男(二十一歳)

能登志雄(二十一歳)

全部立派な道のある所を行く積りなので磁石も持たず、地圖さへも私一人しか持つて居なかつた。

八月十八日 快晴

三名共元氣で、愉快に談笑しつゝ歩く。木村がいつもの時よりも著しく疲勞するのが早かつた。

國境附近で行違つた人が、最後から來た島倉と何か話して通り過ぎた。後で分つた事であるが、これは北陸高等女學校の池上氏であつて、同氏が後に新聞紙上に發表された記事によると、この僅かの時間に驚くべき詳細に亘つて、大門山の様子を話し、危険であるから注意するやう懇々と述べられたとの事であるが、他の二人が聞かなかつたのは残念な事であつた。同夜は下小屋より、約半里進んで小矢部川の河原に天幕を張る。



八月十九日 晴

早朝起床。蛇アサに攻められつゝ河原で岩魚を取つたりして正午迄遊ぶ。正午出發しブナオ峠に天幕を張り、五時過ぎ三名手提電燈を一つ宛持つて、大獅子山（一二七米）猿ヶ山（一四四八米）に登り暗くなつてから天幕のあるブナオ峠に歸つた。この夜入口に寝た私は夜風の寒さに耐へ兼ねて、夜半に起きてジャケツを着たが、これが後に私の命拾ひの原因の一つとなつた。空は一面の星。

八月二十日 晴 後雨

早朝三時頃に起きて三町程下の泉に水を汲みに行き、歸つて朝食を濟まし五時少し過ぎに大門山に向つて出發する。正午には西赤尾に向つて出發する豫定なので、「若し七時迄に山頂に達しなければ途中で引返す」事にきめた。

八合目位迄は山道がある。遠く北アルプスの連峰が歴々と見えて居た。時間は午前七時前後であつたらう。八合目で道は無くなり山頂を目指して、丈餘の熊笹を分けて進む中に急に空は曇り、一寸先も見えぬ霧がこ

めて、同時に猛烈な雨が降り出して来た。一同少しの危険も豫想せず、大急ぎで霧の中を引返した積りであったが、實際は全然反對の方向に進んで居たのであつた。

かなり進んでも山道に出ないで笹は深くなる一方なので、恐らく道から左に外れて、不動瀧の方向に向つて居るものと考へ、少し針路を右にとつた。山はますます峻しく、寸前も見えぬ霧の中、幾度か急傾斜面を迂り落ち、互に呼び交しては辛うじて連絡を保ちつゝ進む。やがて霧も晴れると間もなく或泉に出た。

これを小矢部川の源と見てこれより細流に沿うて下つた。恐らく正午頃であつたらう。

水量は少いが、無数の小瀑布に遮られる。二間乃至五間位の高さの瀧を、飛び下りたり、又は山毛櫟マツの枝に縋り瀧壺に飛び込み等して、約二丁程も下りたであらう。

かくして半里程も下つて後どうしても下れない危険な瀧に行當り、右岸は登れぬので左岸の急峻を登る。胸を突く様な斜面を笹を分けて登る中に夜となる。

山毛櫟の幹に掴まつて、立ちつゝ夜明けを待つ中、

沛然たる豪雨となり、全身すぶ濡れで寒さにふるへつゝ、互の聲も聞えぬ雨の中に黎明を待つ。

八月廿一日 雨 後晴

餘りに夜明けが遅いので、未だ暗い中から出發する。各々が二個宛持つて居た燐寸は、昨夜來の雨で完全に役に立たなくなつて居る。

二時間程も登つてから、やうやく薄明となり、時計を見ると、午前四時であつた。この頃より、雨は小降りとなり、やがて晴れて太陽の輝しい光を拜す。

當時われ／＼は、見越山西北方、犀瀧附近に居たわけであるが、先に下つた谷、即ち倉谷川をば境川と、その絶壁の故に誤認せし一同は、現在赤摩木古山に居ると信じて居た。

やがて遠く、礪波、石川兩平野、富山、金澤兩市が遠方に見え出す。これ等を目標として笹を分けて進むと、絶壁の爲進路を斷たれる。止むなく引返へさうとすると、進む時少し後になつた木材が見えない。驚いて附近を探したが、何分にも一尺先も見えぬ藪の中とて、到底見付からない。やうやく探し出した彼は既に



發狂して、猿又一つで靴まで脱ぎ棄て、全裸體となつて居る。

もはや、三人共に前進する事は不能なので、私が木村を護り、鳥倉が東方の針葉樹の生えたオネ（後に私の報告に基いてこのオネが搜索の目標となつた。）の方に道を求めに行く。

私は一昨夜着たチャケツをそのまま未だに、着て居たので、上衣を脱いで木村に着せ、少しづつ進む中に間もなく鳥倉は手を空しうして歸つて來た。矢張り絶壁に妨げられて進めぬ由。廿一日午後一時頃か。

そこで今度は私が代つて、西方の大きなオネの方に進む中に、笹の中で足を踏み外して約十米を迂り落ち。更に何米かを墜落した後頭部を強打して昏倒した。これより數日假死の状態にあつたのである。この瞬間以後は私の時に關する觀念が全く混亂して、その日／＼が何日であるかを知らずに居たのであるが、便宜上、この記録には後に判明した丈けの日附を加へて置く。

八月廿四日 晴 後雨

さてかやうに假死の状態にある間にも、私の精神は

次第に死より蘇りつゝあつたのであらうか、微かながら夜雨に濡れた事、又或夜は星がきらめいて居た事等を記憶して居る。廿四日未明、二羽の「ヒタキ」が梢の上を傳ふ響きに意識を取返す。甚だしい寒さに慄へつゝ、見廻すと絶壁に圍まれた溪の石床で上流にも下流にも瀧がある。

空腹は骨を貫くばかりに苦しく、倒れて居たとき下になつた部には小さい蛆が湧いて居る。

立上る力もないが、友の事を思ひ、倒れたまゝに「オイ／＼」と叫ぶが答へるものは、空しい木靈と溪流のせゝらぎのみ。

最早絶望と思ふと、精神的な苦痛と空腹疲労の爲の肉體的な苦しみに耐へ兼ねて、どうせ一日か二日しか命はなからう。このやうな身で、徒に苦痛を増すよりはと、自殺を企ててバンドを外し、上の樹のある所迄行く元氣は到底ないので一端を足に掛けて、全力をあげて首をしめたが意識を失ふと共に、手足の力もなくなるので成功しない。その内にはその力も盡きて昏睡状態となる。この夜降雨あり、間も無く止んだが、ぬ

れた爲寒さに眠れず終夜悪夢に悩まされた。

八月廿五日 晴 後雨

飢餓の苦痛は恐らくこの日が絶頂であつたらう。錯亂した頭腦は又もや自殺を企てるが、今はその力もない。友達を夢み、幻の人家や食物が眼前にちらつき、死よりも苦しい惱みに一日を過す。この夜も降雨。

八月廿五日 晴

苦痛も既に峠を越して一種の無感覺状態となる。次第に冷靜となるにつれて、同じ助からぬにしても一歩でも前進して死なうと言ふ氣になる。今の様子では絶對に助かるとは思へないが、萬が一にも助ければ吾々一行の消息も知れやう、又幸に搜索隊を募つて他の二人を助ける事が出来るかも知れぬ。途で死んでも、此所にこのまゝ倒れて虫の餌になるよりは意義があらうと思ひ、遂にこの日の午後この谷を出る決心をする。すると今迄身動きも出来なかつた身體が、氣の持た一つで立上る事も出来、よろめく足を踏みしめつゝこの思出深い谷を後にする。危険を冒して上流の瀧を二つ上る。二間餘りの瀧二つ上るのに數時間を要した。

三つ目の瀧は二段になつて約二間半、直向から水を浴びつゝ第一段に登つたときに瀧の水に推し落され、止むなく右岸の崖をよちる。

崩れ落ちる岩の割れ目をたよりに草の根岩角にすがつて登る中に、崖の半ばで日が暮れたので、片手をすゝきの根に片手を岩の割れ目に托して、小鳥のやうな姿勢で一夜を明す。

八月廿七日 晴 夜降雨

暗い中から動き出した。晝頃やつと、山の脊に達する。今から考へると非常に緩慢な速度であつたが、當時は全力を盡したのであつた。山崩れのある山腹を縫ふて進む中力盡きて、倒れ伏したまゝ雨に打たれて一夜を明かす。

八月廿八日 晴

辛うじて山頂（これは高三郎第四峰の頂き千四百米強と思はれる。）に辿り付き、遠く見える金澤を目標に方角を定めて北方に進む。

このオネは大門よりブナオ峠に下るオネに實によく似た熊笹の籤なので、益々大門山に居る事を確信して

藪を分けて相當の早さで進んだが、暗くなつたので大きな山毛櫸の根下に倒れて寝る。遠く金澤の燈火は見えるが體は疲れ果て、明朝は再び日の光が見れるかどうかとも不安の状態である。白いシャツを脱ぎ死體の目標にと山毛櫸の枝にしばりつけて寝て居ると、カサ／＼と藪を踏んで狐か何かであらう、しばらく私の近所を動いて居たが、やがて立去つた。この夜は死體のやうに熟睡した。

八月廿九日 晴 後降雨

起き上つて昨日のシャツを取つて着る。朝からオネ傳ひに下る。下るにつれて山は峻しくなり、遂には藪の中を滑り落ちる。その爲距離は捗つたが求める路はどうしても見當らない。

葡萄の樹を見付け、青い果汁を食ひ吸ふ。残る二房を今後の食糧にと大切にポケットに納める。山毛櫸の果實、露の葉等手當り次第に口に入れて見るが、到底喉を通らずに徒に唾液を失ふのみなので止めた。

振り返ると今下つて來た山頂が遙か後方に、鋭くそゞり立つて居た。何んとかして谷に下らうとするのだ

が、絶壁が餘りに高く餘りに急な爲に近付く事も出来ず、この崖の上を谷に沿うて北西の方に進む。

疲れ果て、立上る事も困難になり、樹の根や熊笹にすがつて數歩進む毎に倒れながらも、相當の早さでころがるやうにして進む。夜は雨に打たれて岩陰に横たはると、終夜二人の友を夢みて夢幻の間に共に語り共に道を求めて居るやうに感ずる。

八月卅日 曇

小さな谷を下る。次第に急になり岩は崩れるし危険の上も無いが弱り切つた身體には寧ろその方が樂なので非常な早さでどん／＼下つた。絶えず友人や近親等の聲で自分を呼ぶやうな氣がして、心を亂されてこの錯覺に困しめられ殆んど發狂しさうになる。

谷川の中に小さな蟹を見付けて、二つ程食つた。結局下つて行つた谷は大きな瀧となつて、下の川に注いで居るが、崖が高い爲と急な爲とで下の川がどちらに流れて居るかすら分らない。到底崖を下る事は不可能の事なので、この上を川の下流と思へる方に（事實下流の方であつた）進む。

危険この上もない絶壁の腹を「すゝき」や「うど」の根に掴まつて渡る。夜は大きな石の上で寒さに慄へつゝ明かす。

八月卅一日 曇 豪雨雷鳴

気分は又比較的落付いて来る！疲労を通り越した身体は無感覚の状態となる。

川を右に見て尾根傳ひに登る。終日登つたが頂上に達せず岩陰で寝て居ると猛烈な降雨で、全身水びたしとなり、凍死せんばかりの寒さに身動きも出来ず、斜面を流れる水流に終夜全身をひたし一睡もせず夜明けを待つ。

九月一日 朝小雨 晝は晴夜雷雨

雨は次第に小降りとなり、全く晴れたのは十時頃であつたらう。昨夜水に冷された爲、全身硬化して手も足もよくは動かない。全く死を覺悟して今は如何なる危険を冒しても谷に下る決心をする。

這ふやうにして進む中に林中の空地に出る。見ると焚火の跡があり、人の來た痕跡が明かに見えるので、大いに力を得て附近を調べて見るが路らしいものもな

いので、最後の決心を固めて谷に下る事にする。

後に聞くとこれは熊狩りや、小鳥を取りに行く人達が野營する場所で、私がこれを見て人里に近いと思つたのは誤りで事實は人里の遠い事を示すものなのであつた。

あけび蔓、すゝきの根にすがりつゝ急斜面を下る中、物凄い大岩壁の上に出る。今更引返す術もなく、あけび蔓にぶら下つて十數尺を下り、僅かの足場に身を支へると、脆弱な岩は忽ち崩れて、危く取すがつた左手で一寸程の岩の突出に全身の重みをかけて何時崩れるとも知れぬ危険に身を曝しつゝ下を覗くと、一間餘り下に岩が五寸程突出て居る。

最早如何なる危険にも、恐怖もなければ戦慄もない。満身の勇を鼓して「ヤモリ」の如く飛び付くと、奇蹟的にも踏み止まれる。斯くの如くして死線を辿りつゝ下る中に、今度こそは如何とも出来ぬ百尺にも餘るであらう一大岩壁の上に出る。

今はこれ迄と着て居るチャケツを脱ぎこれで頭部を包み、死を決してこれを迂り落ちる。耳を聳する響を夢

と聞く中に、兩足に激烈な痛みを感じて石の上に叩き付けられる。よろ／＼と立上つて見ると、實に不可思議にも幸運にも、ズボンはさ／＼の如くに破れて居るが、兩足と尾骨が痛むのみで身には寸傷も受けぬ。

暫く休息して又よろめきつゝ崖を降ると、やうやく下の河原に出る（九月朔日午後）。

これを未だに小矢部川と信じて降る中に、夕暮となり空は墨汁を流したやうに曇つて来る。折よく岩かけに素晴らしい洞窟を発見して、もぐり込むと共に絶へ入りさうになつて仆れると、やがて降り出した雷鳴豪雨に岩穴の中にも水が入つて来てびしょ濡れになる。精神もかなり衰へて来て、朦朧とした中に種々の幻を見、錯覺に襲はれて夢現の中に一夜を明かす。

夜半雨は止んで星が凄惨な光を放つて居た。

九月二日 快晴

薄明失神状態より恢復、身體の疲勞極度に達し、死期の愈々迫れるを感ず。

今日中の斃死を豫想して、今は一刻寸分も惜しく薄暗い中から最後の頑張り、腰迄水に入つて浅瀬を探

しては右岸左岸と渡り、低い瀧を幾つか下り庶二無二下流へ進む。

疲れ果てた身は膝迄の水にさへ押し倒されるが、倒れると水のみ無暗に唯下流へ／＼とあへぎ／＼進む。

もう動けないと思ふ頃、何気なく不圖見ると對岸の山腹にダニの如く喰付いた炭焼小屋から、ゆら／＼と紫の煙が立昇るのが見える。夢かと思ひつゝも叢中に坐つて救ひを叫ぶと、オーイと聲がして炭焼きの男が現はれた。とき／＼に事情を話すと、親切に晝食を割いて分けて呉れる。餓鬼の如くに飯を食ひ食ふと、氣がゆるんだのか腰が立たぬ。所を尋ねると倉谷の上流一里餘りと言ふ。今の今迄小矢部川と信じて居たこの川が、我が家の實に五間前を流れる犀川であらうとは（倉谷は犀川に沿うて金澤の上流約六里）驚きの餘り暫くは口も利けず唯ため息ばかり。一體今日は何日かと聞くと九月二日の午前十時頃との事、指折り數へると實に前後十四日間一口の飯も食はず猪の如くに前進したわけ。よく身體が続いたものと自分ながら呆れる。

匂ふやうにして僅か一里餘りの道を倉谷に辿り着いたのは夕方の六時を過ぎて居た。

事情を話して倉谷區長の宅に一泊。半月振りで人家の屋根の下で眠る。傷や蛇にさされた痕、水中を歩いた爲の凍傷等で全身が脹れ上り、節々は痛んで終夜眠れず三日朝三時頃からやうやく熟睡する。

尙この日午前零時倉谷を出て金澤に向ふ荷馬車に托して、金澤の父に奇蹟的生還を報ずる。

九月三日 晴 驟雨

八時過ぎ目覺める。全身の痛みに身動きするのも辛いが金澤に向つて出發。

耐へ兼ねる様な苦痛に悩みつゝ一里半程行くと、前夜の手紙を見て迎へに来て呉れた叔父と父とに涙ながらに對面して更に一里半を共に歩いて、やうやく自動車を通れる道がある寺津に達し、此所より迎への自動車で永久に再び潜れまいと覺悟した我が家の門を潜つて、家族の看護の下に枯木のやうに瘦せ衰へた身を病床に横たへたのであつた。

直ちに烈しい疲労を推しての、私の報告に基いて數度の大搜索の結果、九月十一日先に私の約一週目を閉ぢ込められた谷の上流に、凄慘極り無き裸體の木村君の死體を發見茶毘に付して郷里の墳墓の地に葬られたが、今一人の島倉君は遂に死體すらも見出されず遂に捜査も中止せられたのであつた。

廿五年前二名の四高生の姿を永遠に吞んだ魔の山の熊笹は、遂に私の友の姿を我々の視野から永遠に隠して仕舞つたのであらうか。私自身は身體の恢復も頗る早く、現在ではもはや略々肉體的には以前の狀態に復したが、日夜友の姿を夢み、友の生前親しく往復した手紙と友の寫眞を机上に飾り、同胞の如く睦みしありし日を憶ひ追憶の涙にその日／＼を暮らして居る。この拙い一文がいさゝかなりとも亡き友の靈を慰めるならば、私にとつてこれより以上の喜びはない。

十月卅一日午前四時 この稿を終る。

〔能 登志雄記〕

## 圖書紹介

### AN EPTOME OF FIFTY YEARS' CLIMBING.

By CLAUDE WILSON.

(119 pp. PRINTED FOR PRIVATE DISTRIBUTION, 1933)

嘗つてアルバイン・クラブの會長を務めた、クロード・ウィルソン氏が、過去五十年間に亘る登山記録を纏め、自家版として僅か一二五部を世に出して、その内の一部が著者の好意により、山岳會の圖書室へ贈られて來た。

大陸判の紙装が清楚な感を與へると同時に、上質のケントに、活字のタイプを忠實に撰擇して、印刷してあることも好印象を與へる。

山の本としては相當異色あるものと云ふことが一讀すると感じられる。もともと著者の登山五十年の記念に、著者が初期から忠實に記録を残して置いたことを知つて知友達が、それを發表することは、半世紀に渡る登山のリストとしても非常に興味あることだと、勧めたのが動機であるだけに、この書の大部分は年代別にした登山記録で埋められて居る。

外には著者の簡單な自傳、山仲間の話、ガイドの話等が三十

頁ばかりし隨筆風に書かれて居るだけである。

著者が長い登山經歷について何等誇り氣に、自慢話の饒舌を行はず、忠實に自己の足跡を記録して、單に事實を事實として、後世に傳へ、資料の一助たらしめやうとした態度には敬意を表する。

この登山記録は、一八七七年より一九三三年に到る迄全部で三六〇回の登山(内一二二回はガイドレス)について、一々年月日、登山経路、パーティ、ガイド、標高、所要時間等々を記す外、アクシデントや、異様な天候、雪質等について特記し、又初登攀の場合等には、それに關する文献の所載誌名、頁等まで附記し、更に附言の要ある時は別頁にノートまでして居る。この登山記録は又丁寧に區域別に一九に分類され、更にアルファベット順にも索引が作られて居るといふ、親切さ丹念さである。

自傳その他の隨筆も面白い。廣汎な山の知己についての追憶、殊に近代登山の全分野に亘る交友關係など羨望を感じさせられる。

A・Cの創始者の内のアルフレッド・ウキルス、ウイリアム及びチャールス・エドワード・マッシュウス等と交つたと同時にスマイスやグラハム・プラウン等の新しい時代の登山家達とも親交のあることを、著者自身満足して記して居る。ガイドにつ

いても過去のおよそ名ガイドと名のつく人達について、挿話を語り賞讃し、或ひは批判して居り、クリスチャン、クルツカカーを稱して NATURE'S GENTLEMAN と呼んで居るのなどクルツカカーの人格が偲ばれて面白い。

これだけでは紹介の役目は果せないかも知れぬが、とまれ饒舌に流れやすい山行記の多い今日、簡にして、要を得た形式でかういふ山の本が作られたことはよいと思ふ。何を語らうと意識しないで、返つてこの本は多くのことを語つて居る。

(島田巽)

### 山とふるさと

河田楨氏著、山と溪谷社發行

定價一圓五拾錢、四六版三〇三頁

寫真一葉尾崎喜八氏撮影。

嘗て同じ著者が「一日二日山の旅」といふポケット入りの小型な、丁度携へるに手頃な、案内記風の山の本を著はしたときは、色々な意味に於て可成騒がれたものであつた。

事實、東京附近の山谷の詳細を一般大衆に熟知せしめたのはこの本によることが多いのであるから、差詰め河田君は筍生する登山會にとつて恩人であらねばならぬところであるが、こ

れが動先の忌途に觸れたものがどうか判らぬが、北海道に轉任になつてしまつた。今日の時世では止むを得ないところかも知れない。

さて、河田君はかくして北海道に移つてから、内地の空を遙かに望みつつ、最近の内地の山の紀行と北海道に關する隨想とを蒐め「山とふるさと」と題して雅致ある一書を上梓した。

内容としては幻想行(金峯と瑞鷹)、利根西入り諸湯、高原の秋雨(神津牧場)その他と北海道の紀文として雪原行、北國雜記、小樽の點描、地名考等である。

河田君の文は實に巧い。我々が何とも思つてゐないやうなことを、實に巧に叙述してゐる。我々が聞流してしまふやうな簡單な會話を織り混ぜてローカルカラーを生み出して行く點、誠に敬服してしまふ。

これあるが爲め彼の「一日二日山の旅」が珍寶珠玉のやうに珍重がられたのも道理である。

實際河田君の文章は、魅惑的なものだ。尋常市中の茶飯事も彼にとつては見過ぎことの出来ない好題目であるのだ。

強いて難を挙げれば先年同じく、山と溪谷社から發刊した同君著「山に懋ふ」に較べて、寫眞の多いことである。寫眞一枚は本文何頁に當るかも知れないが、僅かに一枚は少々情無い氣



がする。殊に北海道の風物を紹介するに方つて、せめて四五枚入れて欲しかった。下手な網版はぶち壊したが、好いものは一層彼の名文を引立たせるといふものだ。

それに、又簡単な地圖が入れて欲しかった。態々案内記様のものを作らすとも、本を讀みながら強いて他の地圖を求めずともよいものがあるとよかつたと思ふ。この點「山に懃ふ」は、圖こそ下手であつたがよかつたと思ふ。

北海道の地名考を入れたのはよかつた。かういふことは北海道に永く住んでゐては氣のつかぬことである。

兎に角、北海道の山らしいところが紹介されてゐないのは惜しいことと思ふが、これは他日の著者に俟つこととして、これから段々と交渉の多くならうといふ北海道の、色んな風物に對して、よき紹介者の出來たことを深く悦ぶ次第である。

今後著者は益々著作に精進せられることと思ふが、圓熟した筆を以て未開と思はれてゐる、北海道の山などしゝ紹介して戴きたいことを切望してやまない。  
(松井幹雄)

X X X

六月一日評者の急逝によつて本稿が遺稿となつて了つた。これは五月中旬に書かれたものであるから同氏の恐らく最後の執筆の一つであらうと考へる。共に働いた編輯者の一

人として深い哀悼の辭を捧げる。

(黒田)

### 山岳寫眞のうつし方

額田 敏氏著、玄光社發行

二九四頁、定價二圓。

寫眞術書に限らず、總て技術に關する著述は理論家の書いたものは理論のみに走つて、實際の經驗に乏しく、實際家の書いたものには何故に、然るやの解答に不明確で寔に心元無い感がある。理論と實際が併行してこそ、完璧な技術書と云ふべきであると思ふが、これは望むべくして、仲々求め得られない所である。殊に山岳寫眞術の如き事専門に屬するだけに、その人を得る事が一層容易で無く、吾人の要求を満す所がなかつた。

今日額田敏氏の「山岳寫眞のうつし方」を手にして始めて茲に理論と實際の心地良き調和を見出した。寔に直ちに實行に移し得る貴重な經驗と、これを裏書する明快な理論とは、如何に山をうつつす事の樂しく、如何に山をうつつす事の容易であるかの科學を教へて居る。山に志し山を再現せんと、望む人々に取つての大きな祝福である。

この一巻の技術書を通じてすら、氏が如何に山を見、山を感じて居るかを窺へて同感を禁じ得ないが、殊に卷頭を飾る四十

個の作品とそれの解説を見ただけでも、少しの経験を持つ人々には如何に貴重なデータであるかと判る。

況や堂々二百頁に及ぶ、内容を精讀するに於ては、根據なき経験の如何に無意味なものであるかを痛感する。

最近長足な進歩を見たエマルジョン化學の進展は、著しく小型カメラ實用價值を高めて來た。殊に小型、輕量、取扱簡潔を絶對必要條件とする。山岳寫真に於て、小型カメラの特殊性を無視したならば、その著述は、昨日の讀者にすらさよならを告げらるべきである。本書は云ふ迄もなく、かゝる小型カメラの比較撰擇から、使用方法更にその實用價值を、決定的ならしめる微粒子現象法に迄、及んで居るのは類書に見ざる所である。更に紙数が許すならば、今尙小型カメラの實用價值に就て疑問を抱く人々に對して、徹底した解答を與へ得た事であらうと思ふ。

參考寫真に於ても、ベスト二枚撮り、ライカ版の如き極小カメラの實例、引伸見本等を收容する所があつたなら、一層効果的ではなかつたであらうか。高山植物の撮影に就ては餘りに氣前良く専門家に城を明け渡し過ぎた。單に參考書を紹介するに止めず、その實際に迄及んで頂き度と思ふ。

山岳寫真の一部門として、重要な位置を占めるべきであり乍

ら、比較的紹介されて居ない望遠撮影に就て詳説された一項はその參考寫真と共に本書の壓巻である。(塚本閣治)

### ヒマラヤの旅

長谷川傳次郎氏著

菊倍版 一七八頁、寫真版二〇三葉

二、〇〇〇部限定版 昭七年八月

中央公論社發行 定價十二圓。

「山岳」二十二年三號の一四〇頁を開いて見ると「ヒマラヤだより」とあつて、その對頁には本書に圖版四四及び二七として收められた二葉の寫真が、夫々チャットへの途上リブレク峠(一六、七五〇呎)附近及びロードテンドロン(海拔一、五〇〇呎花色淡紅)なる表題の許に長谷川傳次郎氏撮影として掲げられてある。さてその「ヒマラヤだより」なる一文は別に誰が書いたとも斷つては無いが木暮理太郎氏の筆になる事は明かである。重複を敢へて承知の上でそれを讀んで見ると「會員岡田喜一氏の親友長谷川傳次郎氏は、ヒマラヤ及び印度の各地を旅行する目的にて、先年漂然として印度に渡航されたのであつたが、四年後の昨年ヒマラヤから西藏へ旅行されたといふ消息が本年一月になつて岡田氏の許に達した。參考に供すべきものがあるので、岡田氏の同意を得て次に書信の一部を掲載

する。」とあつて次に長谷川氏の書信が掲げられ、それから長谷川氏の通過した路に對する甚だ當を得たる臆測が述べられ、最後に寫眞に對する説明が加へられて居る。

現在では、長谷川傳次郎氏に就て識らぬ人は山岳人の中には一人も無いと言つても過言ではあるまい。然し當時この短い記事を読んだ人が何人あつたであらうか？ 多くの西歐への登山家が華々しい活躍に飾られて居るにも拘らず、このカイラーズへの巡禮者は黙々としてヒマラヤの脊梁を超えて西蔵への苦難なる旅を続け、そして亦、この記事が我々に示された頃にはカシミールに在つて來るべきナンガバルパットへの山旅の準備に人知れぬ苦勞を重ねて居た頃なのだ。

然しこの頃の長谷川氏は自分達からはすつと離れた處に在つて、取付く術もないものであつた。

數年を経て木暮氏から長谷川氏の印度より歸られた由を聞き、ナンガバルパットは餘りにもスケールが大きくて、四枚でないと寫眞には収まりきらない等といふ話も耳にして、やがてその寫眞を見、その話を直接耳にする機會も近い事を知つた。

そして遂に昭和五年の十一月に第四十九回小集會に於て「カシミールの山旅」として同氏から親しくその山旅に就いて聽き、且つ數多くの幻燈に依つてその實在に近い感じを得る事が

出來た。

そして最後に、斯くの如くにして我々の手近く見、且つ聽く事を得た、長谷川氏の寫眞とその紀行とを「ヒマラヤの旅」の一卷として繙く事が出來、そして座右に常に具へる事が出来る様になつたのは當然の歸結とは言へ、言ひ知れぬ喜びである。

本書は紀行文の部分と寫眞集との二部より成り、その各々は共に「カイラーズ巡禮」「カシミールへ」及び「ナンガバルパットへ」の三つに分たれて居る。更にこれに追録として三田幸夫氏の「ダーチリンを中心とする山旅」及び木暮理太郎氏の筆に成る「ヒマラーヤ雜記」の二文が加へられて居る。

著者の「カイラーズ巡禮」は一九二七年五月より九月への五ヶ月に互つて居て、一九〇〇年にこれを訪れた河口慧海氏に次いで日本人としては第二である。西歐人でこのパリカルマと呼ばれる巡禮を試みた最初の人は今度のエツェレスト探検隊のリーダーとなつて居るラトレツチ氏夫妻で一九二六年七月の事であり、この山への登攀を志した最初の歐洲人はラトレツチ氏と行を共にしたR・C・ウイルソン氏であると、ロングスタッフ氏は一九二八年五月のアルパイン・ジャーナルに註記して居るが、本書の卷末にある木暮氏の記載によれば一九〇七年九月のスウェン、ヘティンのそれが最初であるさうで、ロング

スタッフは恐らく思ひ違ひをして居るに違ひない。“Western Tibet & the British Borderland” (1906) には一九〇五年この巡禮こそはなかつたが、グルラマンダータの登攀をロングスタッフと共に志して遂に目的を達成し得なかつたシエリングに依つて、このシーバの生誕地であり、ヒンドー及び佛教の傳説に於ける高き地位を占めるカイラス・バルパットの興味深き記述がある。ウイルソンはサタンと名付けられたエヴェレスト探検隊のポーターと共にこの山を南側から登攀を試みたが、明かに登る事は出来る事を確信づけられたものの、時間の不足から引返へさればならなかつた。その登攀の歸途には雪が降り出し、然も何等の豫告もなしに激しい雷鳴が起つた事は確かに靈山の怒りであらうと述べて居る。

長谷川氏はサンティニケタンのタゴール大學で知り會ひとなつた、この大學の美術部出身のマジジー氏と共に五月一日サンティニケタンを出發し、ラクノウを経て、八日に鐵道の終點であるタナクブールに著いて愈々この山旅は始まつたのだつた。これから五日後にはヒトアガラに達し、尙もカリ河に略々沿つて溯り、十九日には谷の間に印度寺院モンディー風の小さな庵と、長い二棟の家が建つて居るトホボン僧院にと到達した。そしてこのアティアの金持の未亡人クマール・デ

ビーの寄進によつて出來たラム・クリシナミツシヨンの修道場に一ヶ月間滞在してカイラースに行く時期には早過ぎる期間を過ごした。六月に入つては、アティアももう夏の部落に移住し、それにトホボンにも一と月の滞在となつたので、どうせ待つなら景色のいゝダルマで待たうと言ふ事になつて、トホボンを出發したのが十九日であつた。ケラーからカリの河沿ひの貿易路と分れて、左にダルマの谷に入り、二十二日にはアティアの大きな夏の部落であるドゥーバトゥーに着いた。そしてまだずつこの谷の奥であると思つたダルマがこのドゥーバトゥーの事である事を知つて、此處に二週間の滞在をする事となつた。

ドゥーバトゥーの西方には水河の上にバンチチュリ(二二、六五〇呎)の雪の峯がドゥーバトゥーの部落から一万余の高距を抜んで、谷の奥深く聳え立つてある。又ドゥーバトゥーの臺地を爲した部落から急に落ち込んで水の流れは見えず、その音だけの聞えて來るダルマの谷を隔て、南東には、コロンラー(二二〇、三〇〇呎)が長大なる尾根を根張らせて居る。そしてダルマの谷の上流には錯綜した岩峯が眼近く迫つてその奥を窺ふ事を許さない。

アティアの娘が眞鍮の壺を負つて水を汲みにと歌をうたひ

ながら集つて来る光景、一行に教室を占領されて、石小屋のその教室の前の平地に黒い石盤を並べて授業を受ける十歳に満たない子供達、羊を追うて歸る母と子、總てかうしたプティアの生活は長谷川氏の鋭いレンズの動きから逃れる事は出来なかつた。滞在の一日はバンチチュリの尾根への登攀に當てられたが、頂上までの半ばにも達せず引返へさねばならなかつた。

七月六日雨雲の低く垂れる中を、この世にも美しいダルマの部落に別れを告げてジョリソカ峠に依つて大ヒマラヤの主脈を越ゆべく出發した。

一万九千呎に近いこの峠を越した七日の日は峠近くは吹雪となつて、クティの部落へ着いた時は一方ならぬ疲労であつた。これからクティの谷を降つてそのカリ本流との合流點にあるガルピアンに出て、トホボンで舊知の僧侶達と會つて共にカイラスに向ふべく打合せをした。然るにこの僧侶達は自分達から一緒にチャットに入り度いと望んで置きながら、偶々印度人の法律家ボキール氏のチャットに向ふのに際會し、長谷川氏一行を排斥するに至つたのであるが、これもクルマ・デヒーの姉であるシュルマ・デビーの盡力に依つて漸くに事無きを得たのだつた。これからは印度政府の生命を保障しない、匪

賊の横行するチャットへと潜入するのだ。そして寫眞の撮影も禁じられたので、絶えず同行の僧侶達の眼を逃れなければならなかつた。二三間の高さの積石があり、上に樹枝を立て枝に結びつけられた赤、白、黄の布片や羊毛が風に飄る、印度、ネパール、チャット三國の境であるリブレク峠(一六、七五〇呎)に達したのが十六日で、ザスカル山脈を越えて愈々チャットにと足を踏み入れた。今までの様にその麓を縁に飾られた雪の峯はもう見られない。然し荒寒であるべきこの樹木の無い景觀も空氣の飽くまで澄み渡つた透徹さの故に比ひもなく美しく見えるのである。然し「如何に巧妙な天然色の寫眞でも、繪畫でも、この大自然を生きたまゝ寫し出す事は出来まい。」と言はれて居るが故に、我々が氏の優れた寫眞から受ける感動も、それ自體を體驗せる氏の感激に比しては到底及びもつかぬものである事を痛感する。此處で最も眼を索くのは曾てロングスタッフ等に依つて登攀を企てられし以來、訪ふ人とてもないダルラマンダータ(二五、三二五呎)の大殿堂である。

タカラコートの城塞に駐在するチャットの長官を訪問して敬意を表し、カイラス巡禮の許可を得る邊りの情景は遺憾ながら寫眞には缺けて居る。長谷川氏は私かに小形のカメラを内懐に入れようとしたのだつたが、若し万一見付かつてカイラ

ラース巡禮がふいになつてはと言ふマサジの忠言からカメラを携へる事を思ひ止まつた結果である。

タカラコートからマノサロツの湖への途中では盗匪と變じたチベット兵の窺ふ處となつたが、彼等は長谷川氏の腰にした寫真機のケースを迂闊にもピストルと早合點して後をも見ずに逃れ去つた。然し彼等の眼からは逃れたものの、荷物や僧侶の一隊はこの日は先に出發して仕舞つたのでその日の夕方

になつて一行と合する事が出来るまでは甚だ心許ない歩みを續けたのであつた。七月二十二日には一万六千二百呎の峠を越えて少し降りた處から、憧れのマナサロツとラクシャタールの二つの湖を隔て、四十哩の彼方に、透徹なる大氣を透してカイラースの楔形の神秘的な姿を望み見る事を得た。その景觀の雄大、壯嚴なるは言語に絶し一同たゞ呆然と佇むのみで、僧侶達はカイラースの靈峯だと跪座して頭を垂れるのであつた。峠を下つてマナサロツの聖湖の西南岸に達すると傳説に名高い黄金のスワンは誰を従へて悠々と泳ぎ廻はつて居るが、曼荼羅に描かれてある蓮の葉も花も見えなかつた。

このマナサロツの西岸傳ひに、グルラマランダタの中廣い山波をその水面を隔てて遠く望みつゝ、カイラースへと近づき行く巡禮者の敬虔なる心構へは寫眞の上にも滲みて出て居る

のは見逃がすわけには行かない。

二十六日にはガルチンを出發して順路通り右廻りにカイラースの靈峯を巡禮する事となつた。遠くなり、近くなり、順次に行手の東に、南に、西にと仰ぎ見るこのシーバの王座は殘る處なく寫し出されて居る。

七月ももう終りに近い二十九日にはガルチンを出發して愈々歸路に就いた。先づインダスの水源を爲すストレチ河に沿うて降り、テトリブリから南に折れてギャニマ・マンディーを経てクングリビンダリ峠から印度に歸らうとするのだ。連日の降雨の爲にストレチは濁流滔々として一行の歸路を阻むのであつたが、残り少くなつた食糧は、この濁流をも敢へて徒渉させて先を急がせるのであつた。

八月の十日になつてクングリビンダリ峠(一八、三〇〇呎)セントイ峠及びウタドゥーラ峠の三つの峠を一日で越えて印度側のソムゴンに達した。曾つてガルマの峠を越える時にも吹雪でひどい目にあつたが、この日も猛烈な吹雪に襲はれ、十四時間休憩なしの奮闘に疲れてソムゴンの石小屋では濡れた着物のまゝ、石のゴツ／＼した地面の上に前後不覺に熟睡した。これからジョホール谷傳ひにアルモラに向つて旅の終りを樂しみつゝ降つて行くのであつたが、期待して居たナンダ・デビ

の雄峯も連日の悪天候にその姿を見せず、クングリピングリの峠を最後として吾々はナンダ・デビの峻峯も、初夏のジョーホルの山村をも寫眞の上に見る事が出事ぬのは聊か残念である。

次は一九二八年の夏に試みられたナンガバルパットへの山旅で、これは「カシミールへ」と「ナンガバルパットへ」の二部に分たれて居る。五月の十日にラホールを出發して、カシミールの水の都、スリナガルに着いたのが十六日で、「カシミールへ」の一章はスリナガルへ着くまでの經過と、そのスリナガルから三十哩程山に近いパワンの聖地に一月以上滞在してカシミールの氣分を満喫した著者の喜びとを書簡體にして略述したものであるが、寫眞版の方はスリナガルやパワンの景觀、カシミール、ヒンドウーの風俗、習慣等を縦横にレンズを馳驅して餘す處なく收め得たものであつて、山自體とは直接の關係はないものゝ、カシミールの美しさはこれで充分に紹介されて居ると見て差支へあるまい。

「ナンガバルパットへ」は紀行及び寫眞版共に著者の最も意を注いだ處であつて、最も讀み應へ、見應へがする。この山旅はパワンを出發したのが八月一日で九月二十五日にワナガムに達したのであるから約二ヶ月に亘つて居る。案内兼料理人として、印度測量部の一行と共に數年間カシミールの山やカラ

コラムの山を歩いた事のあるラリー・メーヤなる五十歳ばかりの山男を伴つた。カイラースへの旅は嚴密の意味から言つて登山旅行と言はんより寧ろ放浪と言はんが巡禮行脚とでも言ふべき過程に包含せられるべきものであつたが、「ナンガバルパットへ」の二ヶ月に亘る山旅は正しく山岳旅行と銘を打つべきものである。

長谷川氏の初め目的とした處はラダーク<sup>1</sup>の山脈を越した彼方のインダス流域であり、そしてバルトロの水河からK<sub>2</sub>を初めとして二万四千呎以上の高峯がその高きを競ふカラコラムの山々を窺ひ、そして歸りにはインダスを降つてギルギットの手前から南に折れアストールからナンガバルパットに近づき、それからスリナガルへと歸つて來る積りであつたのが、この方面への旅行には印度政府から特別許可證を得ればならぬ事を知り、それにカイラースへの旅はいはゞチケットに潜入したのも同然であつたから、今度は大びらにびく／＼しないで旅行したいとの氣持も動いて、スリナガルに再び出て印度政府駐劄所に行つて許可證を手に入れようとしたのであつたが、今年ももう制限人員だけの許可證を發行し、それにレイイまで問合はせるのには一ヶ月も掛ると言ふので、切めの計畫は空しくなつて仕舞つた。それでその特別許可證の要る範圍に立入らない

程度で近くの山から順次ナンガバルパットの見える處まで行く事にしたのだつた。

先づ最初にはジー・ラの東にあるアマルパットの聖地を訪れる事にして、パロンからパハルガムまで自動車の便を借りる。ワリーと言ふガイドもつき今度はサヒーブであり、場合に依つてはマホメダンのラジャーでもあるので、うか／＼天幕を張りて等手傳ひをするわけにも行かず、このラジャー・サーブは懷の中には百ルヒーそこ／＼しか持つて居ないにも拘らず、兎に角悠然と構へて居らなければならなかつた。これからフラスランを経てビシラムナグ(シシラムナグ)の湖尻に達し、この露營地からグロール峠へと登つてマン・クンの山々をカメラに収める事が出来たが、目測で二時間で往復出来ると思つたのは日本流のスケールの小さい處で、すつかり日が暮れて足さぐりで岩場を降る等の苦い経験も味はればならなかつた。五日にはリダーの谷からマグナス峠に達しそれからシンドの谷に降つてナガールカンの露營地に達した。南東から合する谷の奥には弓なりに垂直の幾條かの枝尾根を走らせその間の凹みに同じ様に弓なりに走つた雪の谷を交錯させた縞馬の肌様な極めて特徴のあるナガールカンの山(一七、八六二呎)が望まれる。六日はこの山へと氷河を登つて行つた

が、ワリーと人夫がスリッパしてあきらめて引返へさればならなかつた。その翌日は氷河の左手の尾根に取付いて、東北にシンドの谷の奥の素晴らしい眺望を恣にして歸つて來た。アマールパットの岩窟へ行く積りも、例の通り人夫に足を揉ませながらの午睡に時を過こして仕舞つた。この露營地は近くに羊飼ひが天幕を張つて居るので、乳やバターや焚木や、さては羊の肉にも事を缺かなかつた。八日はアマールパットの岩窟内のパラフィンで作つた様な氷柱はヒンドウ教徒はシイバの神として崇拜するリンガムである。ワリーや人夫達を後に殘して一人その見物を濟まし雪床の落ちたシンドの各傳ひに相當困難の思ひをしながらバルタルまで降つた。ソナマルグの附近の美しい山村はカシミールの避暑地の中でも特に山好きの人でなければやつて來ないのだが、グルマルグやバルガムと共にカシミールの三つの有名な避暑地に數へられるのであつて、スリナガルからシンドの河を湖つて容易に三、四日で來られる快適の地である。ニチナイ峠を越えて左手にソーグフ山脈の鋸の齒の様な岩峯を見て降つて行くとピッシャンサル湖が淺黄色の水を堪へガード・サールの湖水の傍に羊が群れて草を食む情景を見ては豫定を變更して此處に滞在しようとしたのだつたが、これから先トリサンガムまでは食糧を得る當てがない



と言ふワリーの言葉に止むなくまた一つの峠を越えてうす暗くなるまで疲れた足を運ばねばならなかつた。これからまた七哩を隔てたガンガバル湖畔への一日もその次ぎの日のトリサンガムまでロールグール峠越しの日も仲々に難儀な行程であつた。雨に降られて二日をトリサンガムに過ごし、例に依つて薬を乞ふ羊飼ひの襲撃を受けつゝある間に八日ももう半ばを過ぎた。十六日はワリー峠を越えキツサル(一四、二一八呎)の峯の草の山腹をトラバースし、キツサルの東南の谷へと降りバータルワンの露營地に着いた。最初乳やバターの供給を拒んで居た羊飼ひも病人の診察や施薬に有餘る程の食糧を提供する現金さである。ワリーが素晴らしい美人だと言つて居たバータルワンの羊飼ひの女も遂に見る事が出来ずに出發すると羊飼ひが昨夜豹に二頭の仔羊をやられたと言つて羊を入れる夜の追込みを修理して居るのに出合ふ。グレイツの途中テオサイ高原の彼方に、二條の水河を懸けた真黒な三角形の峯を望み二萬四千呎を越えたその山からカラコラムへと思出は馳せ移るのであつた。スリナガールへ註文して置いた小包の届くのを待つて十日間をグレイツに落ちついて滞在して旅の疲れを休め、ナンガバルバットへの新しい元氣を揮ひ起して、イヅマールグに向つたのが八月二十八日であつた。これから尙もキツ

シャンガンガの河沿ひに降つてハルマトンを経てフロウイーで本流と分れて北に溯る。この邊は熊が夥しく出没する處で夜は羊を守るチャット犬の獠猛な叫びに夢を破られる事が再三であつた。サレワラサールの湖の傍では日本でいふ二百十日頃の三日間を豪雨の爲滞在を餘儀なくされて、遂には羊飼ひに施しをして雨歌の呪禁をさへするに至つたが、その効験は立ち所に現れて四日の日は快晴となつた。サレワラ峠への途中で峠への道を間違へて一日を空しくし、その上に人夫達は軽い雪眼になつたりして困難を嘗めつゝ六日の日にこの峠を越したが、その際、ワリーに雪眼鏡を借してやつたのが失敗の因で、今度は長谷川氏自身がその晩から猛烈な雪眼に悩まれて續く二日間ランポールに滞在を餘儀なくされた。折角此處まで來てもうゲンホルの尾根は間近かに迫つて居るのに總て放棄して、歸られねばならないのだらう。總てはあきらめるとしても、この眼でどうしてスリナガールまで辿り着く事が出来るであらうか等と思ひは千々に亂れて堪へ難い兩眼の痛みの上に更に苦惱を加へるのであつた。

然し長谷川氏の眼は雪眼となつてもレンズは雪眼とはならなかつた、これまでの寫眞はヒマラヤ杉が芝生の彼方に立ち並びその又背後から小ぢんまりした雪の峯が聳え立つとか、或ひ

は羊の群が湖畔にさまよふとか、或ひは亦、キツシャンガンガの河沿ひの風景とか、總て人間の生活と巧みに織り込まれたこの世にも美しきカシミールの自然な對象として居たのであつたが、サレワラの峠に掛る頃からかうした山村の生活はもう寫眞の上に見る事が出来なくなつて、それに代つて荒削りのヒマラヤ獨特の風貌を具へた雪と岩との殿堂が展開されて來た。もうナンガバルバットは間近い、サレワラの峠からはそれと覺しき高い雪の頂きの連りが左手遙か遠くに望まれる。峠から降りて行くときチラスの山々が新雪に粧はれて眼を壓し、振り返へる峠の邊りにはホルボイの連山がヒラミツト形に聳え立つて山の深くなつて來たのを感じさせる。

九月九日は二人の羊飼の子供を道案内にしてミルムンリツクの澤を溯り、雪の深いシオンタルの峠ガリを越えてコトリへと降つて行つた。チタカサルルの谷を西南に望み、ハリバルバット(一七、七五〇呎)の尖塔を仰ぎつゝ、峠に達すると、雲足は速くなつてルツバルの尾根をも包んで仕舞ひ、夕暮近いこの峠の上の寒さは身に泌み渡る。やがて峠を一時も降るともう峠の邊りは灰色に吹雪き初めて來た。コトリドミエルの羊飼ひの傍に四日間の滞在をして、皆の怖れをなすゲンボル行きの人夫をやつとの事で雇ひ入れて、ダリワラワラの山麓の谷を西北に

廻つて北へと溯つて、海拔約一萬三千呎の附近で、黒い水河の終端の附近の草地にベース・キャンプを張つた。正面北々西にはルツバル(二〇、七三〇呎)の峻壁が、直立どころかのしか、る様に聳え立ち到底手のつけようもない。その東北に當るチ(二〇、六〇〇呎)の峯も雪さへ積らせない急峻な岩壁を吃て、居り、先年印度測量部に依つてルツバル尾根への唯一の取付きとして目指された雪の丸坊主がその左手に見える。然かも測量部の一行はその下に横たはる水河を渡る事が出來ずに斷念して仕舞つたのだ。

十四日は朝から空は澄み渡つて居る、フェルトの靴の上にかシミールの草ガースチヤリ鞋ヤリを履いてワリーとチラースの入夫と三人でチ、ヒークの左手の雪のドームを目指して進んだ。二時間で雪の峠に達すると其處から目指す雪のドームとこの峠との間に東西に走る縦横に將に龜裂を持つ、暴れ狂ふ麗しい水河が横たはつて行手を阻んで居るのを見出す。新雪に掩はれたこの一哩半の幅もある水河をやつとの事で越してさて氷の斜面に掛つたが時間ももう五時過ぎで、止むなく引返へさればならなかつた。

一日滞在して十六日はもう食料が無いのでコトリまで降ればならぬ日なのだ、四時に天幕から出て空を眺めると一面の

星だ、床に再び潜ぐり込んでどうしても寝られない、十五分間黙想が續く、そして遂に「よし、もう一度行つて見よう」と決心がついたのだ。ワリーは天幕に残しチラス生れのマナフキール一人を伴つて午前六時二十分例の雪の峠へと一直線に向つた。一昨日の足跡の御蔭で早くも十時には氷の壁の下に達した。この氷の壁をクレヴァスを注意しつゝステップを切りつゝ進み、一時には雪の上に達した。然しその雪は表面一尺五寸だけでその下は堅いつる／＼の一枚氷なのだ。これからの危険極まりのないこの氷の上の新雪を這ひ上る様にしてチ、ピークの岩が五六間右手から聳え立つて居る、幅の狭い乾燥粉雪の中を登つて行くと、すぐ斜面の上の空の間に一寸遠近の列らぬ斜面が見えて來た。はてなと思つて二三歩にじり出すともう其處は尾根の上ですぐ前はとても深い崖だ、左手に間近く恐ろしく大きな山が見える。ゲンボルの最高峯にしては高過ぎる。ナンガバルバットか？ 然し手に取る様に近い。狭い岩の間からよく見えないので左手に深い雪の中を二十間も這ひ上つて行くと、とてつもない大きいその氷河の彼方東北に當つて、數知れぬ多くの雪の山が白波を逆立て、怒濤の押し寄せるが如くに水平線の彼方まで連つて霞んで居る、あれはカラコラムだ、して見ると前面の大きな氷河はルツバル氷河であ

り、手に取る様に間近い山はナンガバルバットなのだ。

一と眼にナンガバルバットが眼の中に入つて來ると思つたのが間違ひで、七哩を隔て、聳え立つこの二萬六千呎の大岳は首を左右上下に廻らさねば一つの山である事を知る事が出來ない位にスケールが大きいのだ、寫眞に撮らうにも六枚を組合さなければ収りきれないのだ。純白の雪に彩られ頂上からルツバルの氷河へと一直線に落ち込む一萬五千呎の赤味の強い赫岩の尾根は、曾つて關將マンメリーに依つて志された限り、恐らく今後百年と雖も誰一人手をつける者としてないであらう。そしてそのマンメリーこそはこの世にも大きいピラミットの後の谷に永遠に眠つて居るのだ。スエーターを着る事も忘れてナンガバルバットにのみ心を奪れて尾根の上に過こした一時間、この一時間こそはこの山旅の喜悅と興奮との極みでありそしてそれを讀み、ナンガバルバットの寫眞を喰ひ入る様に見詰める我々に取つても餘りにも大きな感動である。ナンガバルバットを見たい者は來りて見よ、然して讀め、只これだけの爲にこの本が存在したとしても誰一人怪しむ者はなからう。降りも亦登りに劣らぬ危険がある、兎に角二人の中の片足がスリッパしたら萬事休すなのだ。三時二十分に尾根を出發して三時間ばかりで天幕に歸りついたが、喜びに溢れて疲れも覺

えぬ程であつた。

翌日はコトリまで降り十九日にはコトリを出發して歸途に就いた。パライ河に沿うて降ると次第に針葉樹は多く山際には畑も家も見えて来て、キッシャンガンガの谷と落合ふケールの臺地に着く。これから東に少し許りキッシャンガンガの谷を溯り、南にマツチルの谷を登つて再び以前の様な緑に彩られたカシミールの風光の間を縫うてダッティ、マツチルを過ぎナホ峠を越えてローラアの谷へと降りオ、ウラを経てウーラー湖の北岸のワナガムにあるワリーの家に着いたのが二十五日であつた。これから一月近くをワナガムの山小屋に過ごし十月の十八日にはワナガムの村はづれから舟を浮べて湖上に一夜を明かしジェラムの流に沿うて十月二十日の晝過ぎスリナガルに歸り着いてこの三月に亘る山旅もとう／＼終つたのだ。

全く行き方の異なつたこの二つの山旅を通じて我々の知る處のものはヒマラヤの山旅は二萬四千呎以上の高峯を目指す場合には到底少人数ではこれを成し遂げる事は困難であり、従つて總てが大が／＼となるが爲にパウアーの一隊の様に切詰めてやるとしたとしても、圓の安い當節では數萬圓は少くとも要する事になるのだ。どうせやるなら大きいものと大物は

かりを狙ふから結局計畫倒れになつて仕舞ふのであつて、先づ二萬呎位で我慢するとすれば、ヒマラヤではこそ二萬呎は決して高くは無いのもの、登攀そのものとしても相當に困難さを要し、決して相手に取つて物足らなく感じさせない山が無限にあるのだ。そしてかういふ山々を志すとすればそれこそ二月足らずの暇と、百ルビーの金とで、相手はなくとも、自分一人であつた處で別に差支へを來さずに、充分に満足の行く山旅が味はへる筈なのだ。上高地邊りでも一月以上も頑張つてそして餘りにも細かなヴァリエーションの探求に憂身をやつすよりは眼を大きく開いて手近かにある海の彼方を見よ。カシエンチャンガ等と言ふ大物の中の又大物を目指さずにもつと低い然しヒマラヤの山として相應しい山が何程でもあるのだ、或ひは亦、實際山の頂きまで登らなくともよい、峠を越え、谷を降り、山腹をトラパースし、羊飼ひの天幕から天幕へと渡り歩くのでさへ面白いではないか！ 西歐人の様に大がかりにやれば費用も並大抵ではなからうが長谷川氏が範を示された如く、小ぢんまりと切詰めてやれば我々日本人にはそれでもまだ贅澤と思へる山旅が出来るのだ。

次にヒマラヤの山地では金錢の事など餘り問題とならぬだらうと思はれるのに、羊飼ひの間には打算的な考へが根強く浸

み込んで居て、それとの交渉が山旅がうまく行くか行かぬかの分岐点になる事が屢々あるらしく思へる。また人夫連にしても祝儀ホシムに依つて容易に左右され、更に又、地方の役人までが、祝儀に關心を持つて居る事が容易に看取せられる。三田幸夫の「ダージリンを中心とする山旅に就て」、(附登山及び旅行案内)にも斯る對人關係に就ての有益なるサチエスチョンが重きを爲して居る。兎に角本書の出現以來ヒマラヤがそんなに取付き難い遙かなるものとは考へられなくなつただけでも、我が登山界を裨益する事は測り知れない。

長谷川氏の寫眞は既に定評のある處で我々が今更此處に喋々する必要はない。記録的の意味から言つても、又民俗風俗の上から見ても、將又、藝術的に見ても、その他あらゆる視角から見て本書に収められた無數に近い寫眞は又となく貴重なのである。本書は單に山岳人へのみ献げられたものではない、あらゆる階級、あらゆる職業、あらゆる趣味を持つ人をも満足させるのであつて、從來ある山岳に關する内外の寫眞集とは全く趣きを異にして居る。山に全く關心を持たない人が見ても飽きる事の無い作品集である。一冊の本書を繙きながら、科學者も、文學者も、美術家も何れもが一つ一つの頁を共に押しめくつて行く事が出来るのだ。自分達は長谷川氏と共にカイラー

スを巡り、ゲンボルの尾根に登つてナンガバルバットを仰ぎ見る氣持になれるのは寧ろ不思議に近い位である。それに長谷川氏のこの素晴らしいレンズの収獲を引伸しにした人々がその道の大家と言はれるだけあつて、長谷川氏の意圖する處を刺す處なく畫面の上に躍如たらしめて居る。印刷も日本では先づ最高のレベルであらうが、まだ、外國の本に比べると見劣りがせぬでもない。これだけの作品、これだけの引伸しが全く惜しいと思はぬものがないでもない。

寫眞に比べて紀行が亦、決して一步も譲らぬものである事は寧ろ我々を一驚さへさせた。これだけ長い二つの山旅を退齋する事なく一氣に讀ませて仕舞う手際は仲々素人のそれではない。不用意に書かれたと見るべき一字句も實はその場合、それが最もよき表現法である處のものが、注意深く使はれて居るのであつて、寫眞はなくとも、紀行だけでもさながらその場にあるの思ひがする。殊にゲンボルの登攀、忽然として現れ来るナンガバルバットの餘りにもスケールの大きい擴がり等描寫の極致を盡して居る。山が大きければ大きい程、無能なる筆はその描寫を萎縮させるのであるが、斯る大きいスケールの景觀をもさながらに眼前髣髴せしめ得るとは素晴らしいものだ。

巻末に追録として加へられたものの中、「ダージリンを中心

とする山旅に就て、登山及び旅行案内」は日本人としてこの方面に於て唯一の權威者として知られ居る三田幸夫氏の筆になるものであつて、「一般の人々がこの方面の旅行に就て知り度がつて居る事柄に關し、概念的な説明」を述べてあるが、割合手輕るに取付く事の出来るシツキムの山旅に關して實際の經驗なり、インフォメーションから割り出したものだけに間然する處がない。實際の例として田口一郎氏のバルトへの六日間の旅、及びゴウラー氏のローナ峯初登攀の例を採つて經費明細表が掲げてあるのは貴重な參考資料である。

卷末に附せられた他の追録は木暮理太郎氏の筆になる「ヒマラヤ雜記」で、ヒマラヤに關する第一人者として隠れもない同氏の蘊蓄の一端を主としてカイラースを中心として隨筆的にもせられたものであつて、長谷川氏の「カイラースへの山旅」を充分に補うて餘りがある。カシミール及びナンガパルバツトに就ては觸るゝ處ないのは遺憾であるが、僅か十頁足らずの短い中にこれだけの内容を充實せしめ得たのは、到底他人の企て及ぶ處ではない。

尙、附圖として「ヒマラヤ概念圖」「カイラース略圖」「カシミール略圖」及び「シツキム略圖」の四葉の地圖が添へられて理解に便ならしめて居る。

兎に角、本書はあらゆる意味から言つて、これまで日本人に依つて書かれたヒマラヤに關する第一の著述であるばかりでなく、我が山岳文獻中の最も貴重なものの一つとなつた。日本語で書かれた山の本の中では、誰が何んと言つても、最も優れた著作であつて、恐らく斯る立派な本は今後年を経ても二度と容易く發行せられる機會はあるまい。

(渡邊 漸)

## 山日記(一九三三年版)編輯報告

黒田 孝雄

一九三〇年に新しい試みとして創められた「山日記」、その第四輯が五月下旬發行される。この「山岳」が發行される頃には、新しい山日記も、もう登山者の御件をして、そのタツシエに、ルックザックに入れられて、相當に記入され手觸になつて居やう。今年新しくこの編輯に加はつた一人として、編輯の報告をして置く。

主なる内容とその執筆者

- 一、序及び日記欄(昭和八年六月—九年五月)
- 一、登山經歷欄、自由日記欄、住所欄(前年同様)
- 一、登山の注意(松方三郎前年と同様些少の訂正)

- 一、遭難信號及冬期登山（前年と變化なし）
- 一、服装用具及食料（同右）
- 一、登山用品表（同右但し二頁に縮少）
- 一、登山用食料品目録（角田吉夫、新設）
- 一、應急手當及び登山衛生（渡邊漸、増補）
- 一、本邦主要山岳高度表（木暮理太郎、部分的改訂）
- 一、本邦主要山岳高度表（木暮理太郎部分的増訂の上地方別とす角田吉夫）
- 一、山小屋（増補改訂、角田吉夫）
- 一、山案内（増補改訂、角田吉夫）
- 一、帝室林野局營林署所在地（田中管雄、前年と同様）
- 一、日程表（神谷恭、冠松次郎、松井幹雄、角田吉夫、改訂、増補）
- 一、山岳語彙（外國の分を訂正）
- 一、全國登山團體一覽（増補、黒田孝雄）
- 一、各國山岳會一覽（訂正）
- 一、山岳文獻表（増補、黒田孝雄）
- 一、山岳寫眞要項（額田敏、新設）
- 一、日本山岳會會則（細則を加ふ）
- 一、寒暖計及度量衡

山日記編輯報告

一、五万分一地形圖區域一覽表（朝鮮を加ふ）

過去三年にわたる、編輯者諸氏の貴重な努力によつて「山日記」も、その内容及び形式が略々完備されたと考へる。従つて今年の編輯方針は「山日記」に對する從來の一般的要求を出來る限り顧慮しつゝ、その内容を一層完全なものに育て上げる事であつた。

先づ總體に、この日記に對する一般の最多數の要求は、「携行の便」であつた。従つて本年はこの點に最深の注意を拂つた。その結果、厚さの點から約六〇頁の減少を見ることになり、従つて少部分を除き、大部分は組方を全然變更した。又重さの點から上質の薄い紙を使用（記入欄の紙質從來のまゝ）し約七匁の輕減を行ふことを得た。これを從來の山日記と比較すると、その重量及び總頁數は

一九三〇年	約六七匁	約四八〇頁
一九三一年	〃 四四匁	〃 三七〇頁
一九三二年	〃 五五匁	〃 四三〇頁
一九三三年	〃 四二匁	〃 三六〇頁

といふ譯で、量的には大いに縮少ができた。恐らくこのまゝの内容を以つてしての最大限の縮少であらうと考へる。

以下各項目について、本年度の變更を説明する。

日記欄は従來と同一形式だが、唯一頁の曜日、月から日に終る如く配置し、記入多かるべき、日曜欄を最下段に置き多少餘裕あるものとした。來年の一月―五月の曆及び日出、日入、曉、暮については例年の如く黒田正夫氏に負ふ所大であつた。

登山の注意は前年度松方三郎氏の執筆のものに、少しの誤正をなしたのみでまた遭難信號、冬期登山も然うである。

服装、用具、食料は、これ又何等の變更を見ないが、登山用品表欄は二頁に縮少しその代りに登山用食料目録を加へた。これは黒田氏夫人の原案に、少數會員の意見を參酌しつゝ、角田氏の編輯したもので、食料の購入等に際して、少からざる參考ともならう。

應急手當及び登山衛生、これは本年も渡邊漸氏を煩はし、増補改訂することができた。

本邦主要山岳高度表及び本邦主要峠表、は何れも木暮理太郎氏に訂正を加へて頂くことを得た。たゞ峠の方は、更に角田氏がこれを地方別に改めた。兩者ともに、朝鮮の部に於ては、朝鮮山岳會の下出繁雄氏、また臺灣の部分に於ては會員鹿野忠雄氏によつて新しく増補が行はれ、又「山岳」誌上の沼井鐵太郎氏の「漫談」が、よい參考資料となつた。

山小屋山案内については、その問合せ、並に編輯は角田氏に

負ふ所頗る大であつた。山小屋の数は本年にて、次の如き増加

1932	28	40	49	31	12	6	83	25	51	2	7	1	7	12	7	—	379
1933	39	55	58	56	16	6	86	29	51	3	9	1	7	12	7	6	468

道北 那塊 岳塊 ス 駒 山 山 方 山 國 州 灣 鮮  
海 北 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山  
東 父 城 ア ル 木 白 地 大  
北 東 關 秩 八 頭 北 御 南 富 加 近 伯 四 九 臺 朝  
を見た。山案内の内部は變化があつたが、組合數には大きな増減はなかつた。

帝室林野局並營林署所在地は、前年原形のまゝである。

日程表は、前年の原案に對して、新に冠、角田、松井諸氏によつて改訂増補が行はれた。最初の計畫では、關西地方をも加へる考へであつたが原稿が間に合はず見合せてしまつた。

山岳語彙は僅少の正誤を行つた上、外國の分ののみをのせた。

日本の分を割愛したのは、狭い場所に無理な簡単な説明は徒らに誤解を招くだらうと考へたからで、尙調査研究を重ねた上適當の時期に發表する希望を持つてゐる。これに關しては會員柳田國男氏の「山村語彙」はよい參考資料にならうと思ふ。

全國登山團體一覽、は前年の角田氏の調査を基礎として黒田氏が改めて、調査票の早出を乞へるものである。昨年及び本年の



團體の移動を左に示して置く。

1932	7	5	6	7	88	6	17	6	6	1	1	2	9	36	3	50	4	1	14	2
1933	6	12	10	10	116	8	19	9	6	3	2	4	9	37	5	51	3	7	29	4
																350				271

道北海馬群埼玉  
京濱梨野山川阜屋都阪奈戸國岡州他

北東新栃東横山長富石岐名京大和神四中九臺

山岳文獻抄は前年の神谷氏の調査に新しく黒田が増補した。

山岳寫眞要項は、新しく額田敏氏を煩はして執筆して頂いたものである。

日本山岳會則は新しく細則をも加へた。

卷末の五萬分一地形圖地域一覽表は、本年五月出版のものが入手できず、前年のまゝとした。新に朝鮮の部分を加へた。

今度は寫眞のよいがないので全然これを削つた。

編輯經過について大略を記すと、

昨年十二月下旬、角田、額田兩氏及び黒田並に梓書房岡氏相寄りて、山日記編輯に關する大體の打合せを行ひ、一月九日使用すべき原稿紙、各種問合せ調査用紙並に附屬用紙の作成を梓書房に依頼した。一月二十日理事會にて編輯方針が確定され、

同二十三日には前記の書類の印刷が出来した。

二月になつて、早速仕事を始める譯であつたが、雑用に追はれて、實際仕事に着手したのは十日以後であつた。第一に爲さるべきは各種問合せ關係先の調査であつて、登山團體は十五日頃から、その他は二十日頃から始めた。そして山小屋山案内關係は約三五〇通、登山團體は約三〇〇通の發送を了つたのは二月末であつた。いつもならば、角田氏獨りでやられるのであつたが、今年は數名の篤志家の後援を得て、かく短時間に仕事が進ぶことができた。それが仕事の第一段であつた。

かくして、右問合せの回答を待つ(三月二十日〆切)間に、他方記事欄の執筆者に新稿の依頼又は、舊稿の訂正を乞はねばならなかつた。この仕事も、殆んど角田氏獨りの御盡力によつたと云ひ得る。三月半ばには、熱心なる回答がポツ／＼到着したが、發送が少し遅れたため、〆切にはホンの僅かしか集まらなかつた。多少前途を悲觀せざるを得なかつた。それで〆切は三月末日まで延期し、更に四月十日まで延ばした。

ともかく三月末集つただけの回答で、整理を始めることにしたが、圖書室の机上に堆積した回答書は少からず私達を面喰はさせた。一體何から手を付けやうか、迷はざるを得なかつた。幸にも角田氏、額田氏等の協力を得て順序よく整理し、それを

基礎として前の調査を訂正補充し終ることができた。その後の回答は初校にて追加するとし、山小屋山案内並に登山團體の原稿を梓に廻したのは四月十五日であつた。

つゞいて記事欄の他の部分と共に「會則」の最後の原稿を梓に渡したのは五月初旬であつた。最初の分の初校は、四月二十日頃に出て、最後の部の校了になつたのは五月半ばであつた。

校正に當つたのは主なる執筆者及び角田、額田兩氏及び黒田であつた。最後に表紙の色を決定したのは二十日頃であつた。

以上の如く、本年は着手が遅れたにも拘らず、別に大きな手ちがひもなく、出版の運びに至つた。五月二十七日頃には發行の豫定である。

終りに臨み、編輯者一同を代表して、各執筆者を初め、直接間接、多大の御援助を賜はつた諸氏、そして例年、山小屋山案内並に登山團體の問合せに對し、熱心な回答を寄せられたる方々に、深い深い感謝の辭を捧げる次第である。

## 『高山深谷』 一九三三年版

發刊豫告

寫眞 五十葉 四六倍版

隨筆 五十篇 總二百頁餘

定價 金參圓五拾錢内外の豫定

發行所 日本山岳會

發賣所 神田駿河台 梓書房

本會編輯「高山深谷」は大正六年第八輯を發刊以來久しく中絶の姿であつた。今度、その第九輯に當る一九三三年版が、新裝をこらして、七月中旬には發刊の運びに至つた。その詳細なる内容については、改めて發表される筈であるが、これに先立つて、こゝに豫告を兼ね、會員諸兄とその發刊の欣びを相煩ちたい。

# 會報

## 會務報告

### 三月九日常例理事會

出席、小島、高野、高頭、鳥山、神谷、松井、茨木、黒田、浦松、角田、横、額田、福島

- 一、入會申込書様式變更の件
- 一、會計に關する件 前年度決算の報告を承認す。
- 一、山日記編輯の件 編輯事務は順調に進行中。
- 一、「山岳」に關する件 編輯事務は順調に進行なるも、次回の原稿に就き盛んに投稿せられたき旨委員より希望ありたり。

一、高山深谷に關する件 編輯事務は順調に進行中なり。尙蒐集寫真相當の數に達したるも、各位の出品を委員より希望せり。

一、山小舎に關する件 現場調査隊を派遣に決定。

### 四月十三日常例理事會

出席、木暮、冠、角田、額田、横、黒田、浦松、福島、中原、

津田

一、山日記に關する件 角田理事より經過報告あり、五月中旬梓書房より發行、定價一圓。

一、高山深谷に關する件 額田理事より「高山深谷」寫真畫集に關し報告あり、應募寫真誌數約千枚の中より撰擇の上、七月月上旬發行の豫定。詳細は委員會に於て決定を一任す。

一、山小屋に關する件 角田、横理事より報告。計劃中の現場調査隊は同行者の都合にて延引中なるも、近く出發の豫定。

一、關西在住會員の希望による關西集會室設置に就き、中原、津田兩理事より説明あり、追て具體案を懐議することとす。

### 五月十一日常例理事會

出席、武田、高野、高頭、神谷、冠、額田、黒田、伊藤、浦松、鳥山、小島、横

一、「高山深谷」に關する件(額田)

一、山岳資料展覽會の件(額田)

一、「山岳」第二十八年二號に關する件(黒田)

一、會計報告の件(神谷)

一、山日記の件(黒田)

一、關西集會室の件

一、山小屋建設地點調查報告の件 近く役員總會を開催の筈。  
 一、英國山岳會へ我國山岳(主として積雪期のもの)寫眞の幻燈板二十五枚の寄贈致したき件 在來會員松方氏より提案あり可決。

## 臨時小集會記事

昭和八年四月五日於三會堂

高橋健治氏撮影所有にかゝるアールベルグ・スキー術並びにグロックナー連峯の十六ミリ映畫が幸ひ東京黒田正夫氏宅にありて、之を東京並びに附近の會員に公開することは、意義ある事と考へ、角田理事之が交渉に當られて、高橋氏の承認を得たるにより、臨時小集會を三會堂に於て催すこととしたのであつた。

之と同時に高橋健治氏の上京を願ひ、映畫と共に同氏が最近迄彼地に於て研究された、所謂最近のアールベルグ・スキー術に就て一席講演を願ひしも御都合悪しく、御上京出來ざりしはまことに遺憾であつた。その代りとして角田理事は、我國に於ける山岳スキーに

就て、氏が今日迄の長き山岳スキーの體驗並びに、現今日本に於けるスキー術の趨勢と、又、山岳の地勢に従ふその技術の自由自在なる使ひ分けに就き、約一時間に亘り、スキー術教科書以外に關する實際的技術を講演された。又同氏の交渉によりて小西寫眞器店よりサクラグラフ、十六ミリ映畫「白銀の上越國境」「白銀の秘密」「岩と雪への憧れ」「モンブランの嵐」八百呎の映寫をする事を得た。

先づ六時半よりサクラグラフの映寫、次に角田理事の講演、最後に、高橋氏撮影フィルムに關して黒田正夫氏の解説に次ぎ同映寫ありて午後九時半終了した。聽講者實に百六十五名と云ふ豫期せざる盛會であつた。(額田記)

出席者

木村 鑛吉	小島 久太	酒井 忠一	小武海輝彦
増山清太郎	木村久太郎	飯塚篤之助	島田 武時
三溝眞之助	小島 一祐	菊地 孝	吉澤 一郎
山田 力	中村 太郎	小竹 弘	田邊 主計
小原 勝郎	堀田 彌一	松澤幸三郎	廣瀬 潔

多賀 富藏	茨木猪之吉	高橋良之助	瀧	信
中尾 健一	田口 一郎	山下助四郎	三澤	龍雄
星野光之助	淺原 重繼	鹿野 忠雄	飯田	未喜
戸塚 武彦	矢田城太郎	小川登喜男	新庄	球生
高橋 康彦	上原清太郎	矢作 太郎	大村	清
逸見 直雄	宮崎 健一	野口 末延	大賀	智
鍋倉 英夫	斯波悌一郎	伊藤朝太郎	長澤	佳熊
中村 貞治	角田 吉夫	岩崎京二郎	飛川	維之
谷 重雄	長沼 重	塚本 繁松	額田	敏
黒田 正夫	山口 成一	村井 榮一	田中	正男
吉田 竹志	齋藤 雄三	黒田 孝雄	奥平	昌英
安田登茂次	福田 昌雄	吉田 次男	水野啓次郎	
松室 武夫	山田幸太郎	野島 親幸	島田 巽	
塚本 閣治	山根 雅男	木村 一男	黒田 鐵夫	
初見 一雄	村尾 金二	近藤 恒雄	田中 菅雄	
伊東 虎夫	外に會員外八十四名、合計百六十五名			

## 日本山岳會有志晩餐會

今年の花は遅いが、山の話に花が咲いて四月六日午

會 報 日本山岳會有志晩餐會

後五時半から日比谷の山水樓で開いた。遠く筑紫から旅して來られた、竹内亮氏、大阪からの珍客、藤木九三氏等々古い人新しい人、山岳會の歴史の一頁から初めた様な顔振れであつた。山の長老小島氏が風邪の神に見舞れて顔の見えぬのも、うら淋しかつた。席上高野氏の鎌尾根で兎に醬油を甜めさせた昔話、竹内氏の九州の山々と沖の島の奇習の話など、良い面白い話であつた。來會者次の如く、十時過ぎ宴を閉ぢた。

出席者(順序不同) ○印次回幹事に推薦

八木橋豐吉	吉田 竹志	磯貝藤太郎	山田 多市
茨木猪之吉	竹内 亮	○田邊 主計	藤木 九三
飯塚篤之助	大熊 保夫	多賀 富藏	高野 鷹藏
楨 有恒	○黒田 孝雄	○塚本 繁松	星野光之助

## 圖書基金について

昨年度に於て四十八口の御申込を得て、それで本會圖書室の充實整理を期し得ることが出來ました圖書基金は、本年度に於ても會報第二十五號にて御出捐申込を願ひました處、左記の如く、多數の篤志なる會員諸賢より御申込のありました事は、本

會特に圖書係として御禮申上げればならぬ次第であります。

會報第十九、二十及び二十四號に發表しました本會の圖書目錄を御覽なれば判ると思ひますが、和洋共に、内容未だに至つて貧弱でありまして、洋書はともかく和書即ち、日本の山の本も吾々の希望して居る通りには集つて居らないと考へます。少くとも日本の山の本ならば、あそこに行けば一通り見られる、といふ風に致したい我々の理想であります。さうかといつて洋書も等閑に附するのではなくそのうちでも、特に東洋の山の本即ちヒマラヤに關する本は是非一通りはそろへて置きたい希望であります。

又各登山團體(内外共に)の會報、記錄等の定期刊行物も出来る限り廣く蒐集したいと考へて居ります。

尙ほ、藏書目錄は、前年二號で山岳に發表するやうに書かれてありますが、完備した目錄を製作する迄には尙ほ多くの日子を要するので、取敢えず會報を利用して、暫定的なものを發表しましたやうな譯であります。いづれ期を見て製作する考へて居ります。

こんな状態であつて我々の希望する圖書室の整理充實にはなほ多くの費用と勞力と日子とを要求されて居ります。既に御出捐御申込下された向に對して、厚く御禮申上げますと同時に

にこの際、尙ほ篤志の會員諸兄の御據出を切に希望致す次第であります。(圖書係記)

小島 久太(五口) 高木 伊八(三口) 飯塚篤之助(二口)  
 中村清太郎(一口) 横 有恒(一口) 細川 賀茂(一口)  
 酒井 忠一(一口) 加藤 保二(一口) 大橋 進一(一口)  
 柴田 潤藏(一口) 島山 梯成(一口) 松本 善二(一口)  
 島田 巽(一口) 大谷 光明(一口) 高橋良之助(一口)  
 吉田 竹志(一口) 高野 鷹藏(一口) 冠 松次郎(一口)  
 石塚秀次郎(一口) 藤島 敏男(一口) 岡本 三男(一口)  
 別宮 貞俊(一口) 今村 幸男(一口) 中原繁之助(一口)  
 田中喜右衛門(一口) 井花伊左衛門(一口) 伊藤 彦一(一口)

合計二十七名 一十四口



前號主なる正誤

頁 行

誤

正

(目次) 一二

ヴァイルデンカールスコーゲル

ヴァイルデンカールスコーゲル

一 一〇

文字の

文學の

一	一	現由	理由
一〇	七	屏	口繪
一三	一〇	屏	口繪
一七	九	への寫眞	への寄與
三四	一五	手形面	平行面
五〇	八	つかぜす	つかぜす
五三	一七	バツケ	バツケ
六二	七	事が出来	事が出来
七五	五	永めた	求めた
九八圖版		ヴァイルデンカールスコーゲル	ヴァイルデンカールスコーゲル
一二〇	上段六	眺望	眺望
〃	下段七	最低	最低
一五二	上六	會報所載の分(削除)	
一五八	下二五	ボ又はダ	ボ又はア
一六二	上二八	大水窟山だけで	大水窟山及び秀姑巒山だけで
一六五	上二四	十六年	十六號
一六八	上二三	デュキヤツク	デュキヤツク



## 「山岳」投稿規定

- 一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
  - 一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
  - 一、原稿は返却せざるものとす。
  - 一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
  - 一、原稿にはその梗概を付せられたし。
  - 一、紀行には概念圖を添付せられたし。
  - 一、寫眞は光澤印畫紙に焼付けられ度、裏面或ひは別紙に説明記入を乞ふ。
  - 一、校正は編輯者に一任せられたし。
  - 一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。
- 原稿蒐集所  
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室  
日本山岳會編輯所  
原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

## 著者權所有

昭和八年六月廿五日印刷

昭和八年七月一日發行

〔定價金貳圓〕

## 發行所 日本山岳會

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル内

振替口座東京四八二九番

東京市牛込區市谷仲ノ町二八番地

編輯兼發行者 黑田孝雄

東京市神田區表猿樂町二番地

印刷者 中村修二

東京市表神保町

發賣所 東京堂

東京市牛込區富久町一四

廣告取扱所 進恒社

株式會社開明堂東京支店印刷

# 日本山岳會々則

一四六

- 第一條 本會ヲ日本山岳會 (Japanese Alpine Club) ト名ツク
- 第二條 本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス
- 第三條 本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ爲ス
- (1) 機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時又ハ定時ノ出版物刊行
- (2) 其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業
- 第四條 本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク
- 第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理事十五名、監事二名以内
- 第六條 會長ハ本會ヲ代表ス 但シ會長ニ事故アル場合ハ副會長之ニ代ル
- 第七條 會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ヶ年トス 但シ役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長副會長トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ
- 第八條 評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス
- 第九條 評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス 發起人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス 但シ重任ヲ妨ケス
- 第十條 評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス
- 第十一條 常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス
- 第十二條 理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス 但シ引續キ重任スルコトヲ得ス
- 第十三條 監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス 但シ重任ヲ妨ケス
- 第十四條 役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス
- 第十五條 役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル 但シ會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル
- 第十六條 役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其

任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセザルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條 役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條 役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條 役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條 役員ハ總テ無報酬トス 但シ其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條 本會ハ會員ヲ分子左ノ三種トス

- 一、通常會員 會費年額六圓ヲ納ムル者
  - 二、終身會員 一時金百圓以上ヲ納メタル者
  - 三、名譽會員 役員會ニ於テ推薦シタル者
- 右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル

間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條 本會々員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ

申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス 入會許可ノ通知アリタル後一ヶ月以内ニ右ノ手續ヲナサル者ハ入會ノ許可ヲ取消サル可シ

第二十三條 入會ノ許可ハ理事會ノ議決ニ依ルモノトス

第二十四條 本會會則ノ變更ハ役員總會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條 前條ノ議決ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條 本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得 支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

### 細則

一、會費其他ニ關スルモノ

(イ) 會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

(ロ) 毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限リ其年

度ノ會費ヲ二ヶ月間延納スルコトヲ得 但シ此適用ヲ受ケントスル者ハ其旨入會申込ト同時ニ申出ス可シ

(ハ) 毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ

免除ス

(ニ) 本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノ

ハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

- (ホ) 本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ每號一部ヲ本會會員ニ頒布ス 但シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布セズ

- (ヘ) 毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコトヲ要ス

- (ト) 本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閱覽スルコトヲ得

- (チ) 會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

- (リ) 會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

- (ヌ) 本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

- (ル) 團體加入者ノ代表者交付シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

- (ヲ) 本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

- (ヱ) 海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ヶ月以上、三十六ヶ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手数料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル

事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニ

ハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選舉ニ關スルモノ

- (イ) 理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

- (ロ) 役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

- (ハ) 會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ舉グルコトヲ得 但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他

- ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス
- (ニ) 理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

- (ホ) 團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

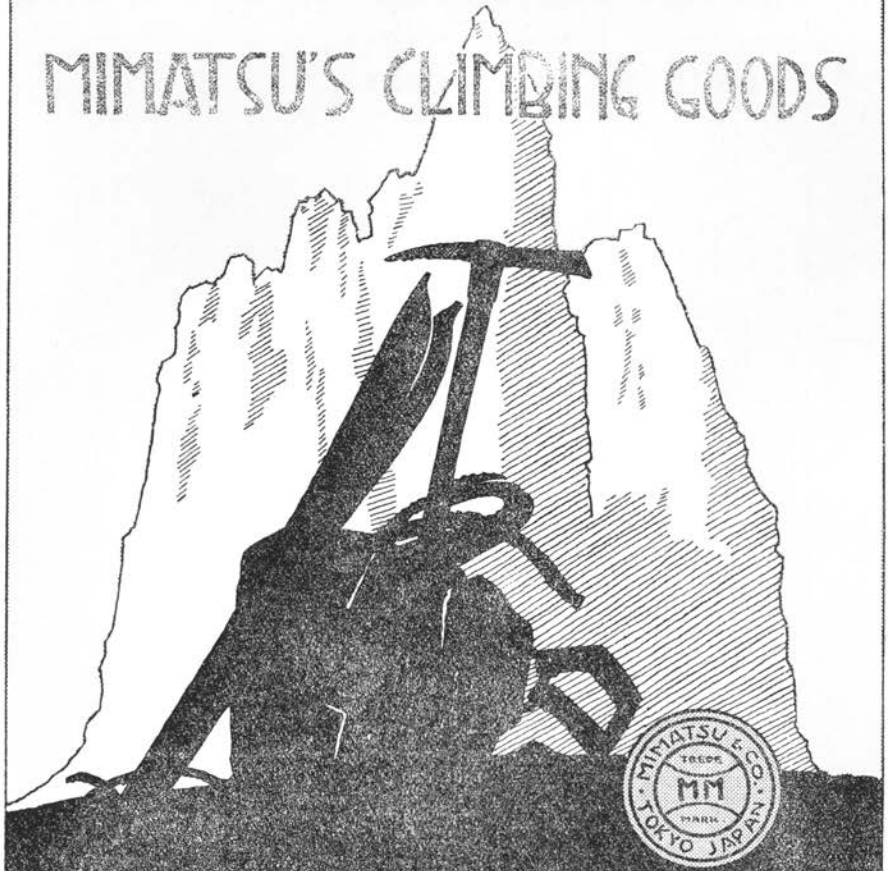
- (ヘ) 候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

- (ト) 候補者ノ數力改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

- (チ) 改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

- (リ) 投票ハ記名連記投票トス

MIMATSU'S CLIMBING GOODS



夏と冬の登山用具全般  
クレ・テライ及スキー用具

合名會社

美満津

東京・本郷

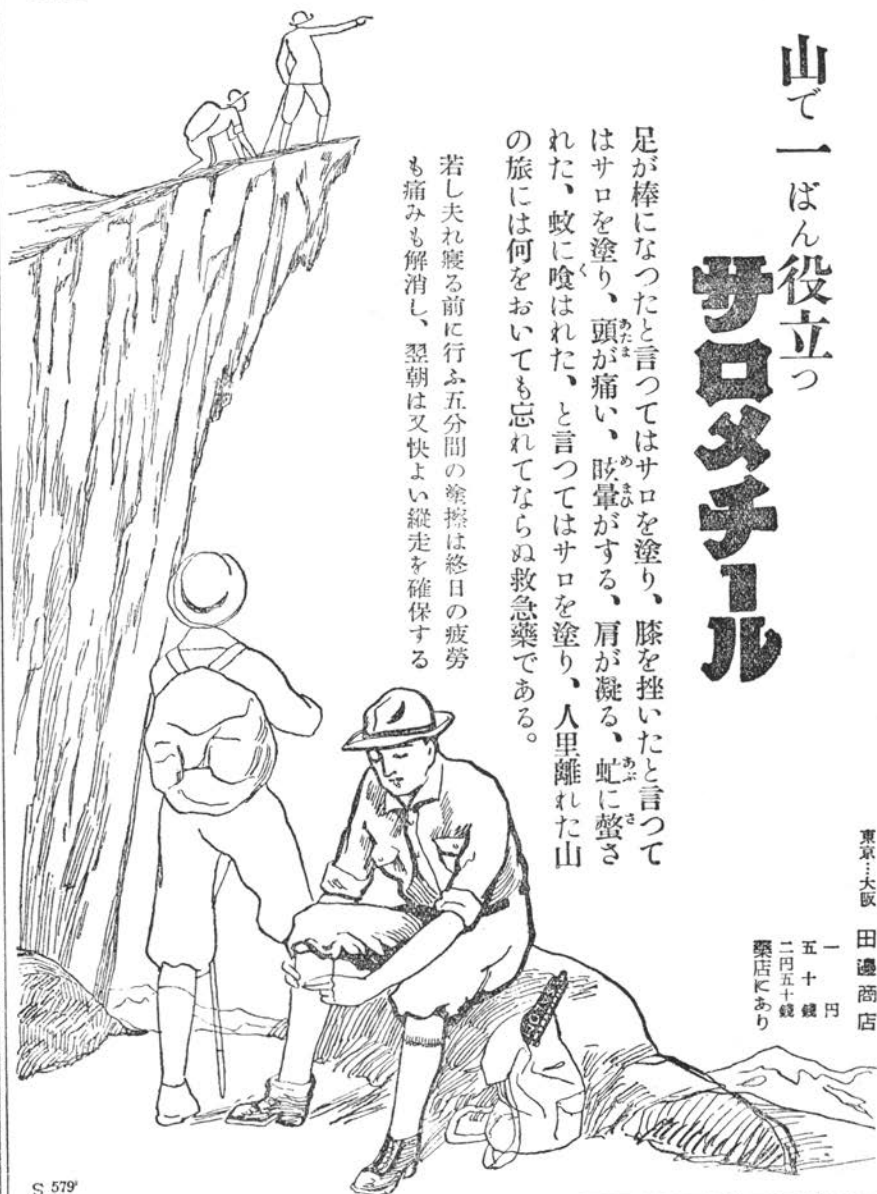
# Salomethyl for Sports

山で一ばん役立つ

## サロメチール

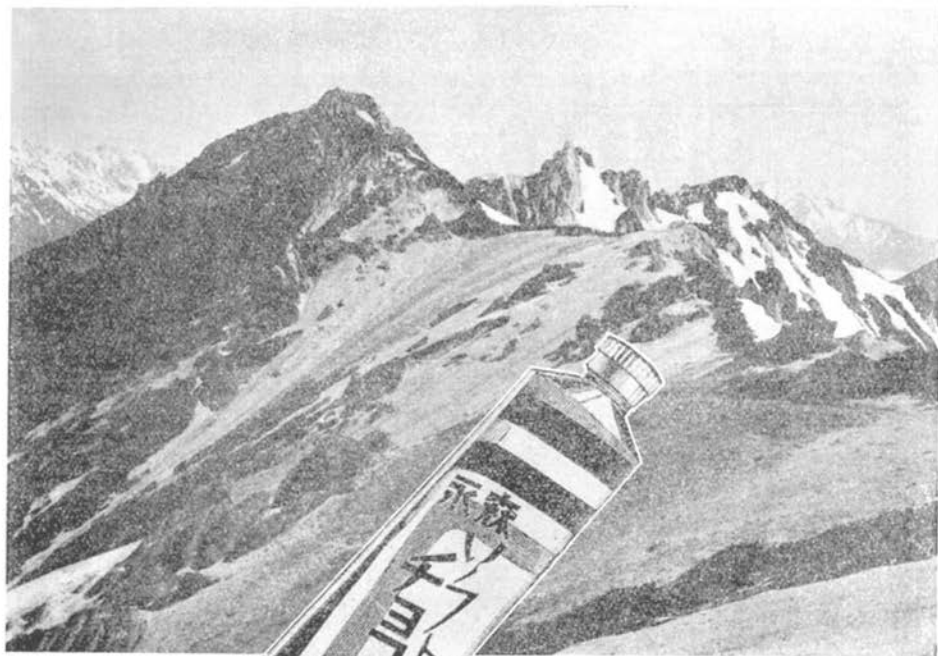
足が棒になつたと言つてはサロを塗り、膝を挫いたと言つてはサロを塗り、頭が痛い、眩暈がする、肩が凝る、蛇に螫された、蚊に咬はれた、と言つてはサロを塗り、人里離れた山の旅には何をおいても忘れてならぬ救急薬である。

若し夫れ寝る前に行ふ五分間の塗擦は終日の疲労も痛みも解消し、翌朝は又快よい縦走を確保する



東京：大阪 田邊商店

一 五十錢  
二 四五十錢  
薬店にあり



森永創作 夏チューブ入り

# 森永 ソフト

くつきりした

スカイライン  
際空線だ！

絶頂に

ケルンを積んで

リュツクに

微笑む

ソフトの味！

10 銭  
20 銭



國産

場工眞寫の一洋東

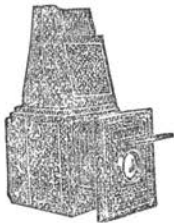
械器眞寫製社櫻六

優良

トツレーバ



アデア  
スクツレフレ



アデア  
グンリプス



場工

社櫻六

社二十京東



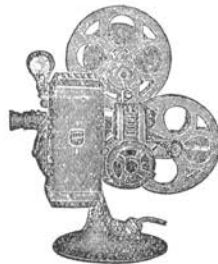
ムルキフらくさ

寫眞器は  
せひ國産!!

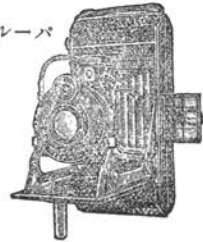
寫眞器械、同材料品は何でも日本で製作され、所謂自給自足時代に入つて居ります、當六櫻社工場に於ては凡そ寫眞に關したものは有りさ有らゆるものを製作し内地需要の過半を占むる外海外へも年々莫大の輸出を致して居ります。

優良、至廉の  
國産品を御愛用下さい

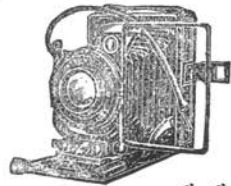
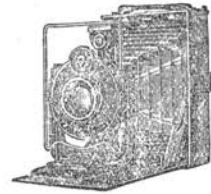
機寫映動活リミ六十  
プーコスラクサ



ルーバ



アデア



ーリリ

店本六西小

目丁三町室京東

司門・所張出 販大・店支

◇賣販てに店貨百・店料材眞寫處る到◇



- |     |           |               |  |        |
|-----|-----------|---------------|--|--------|
| 71. | Ogawa, T. | 1932          | On the Pleistocene Glaciation of Central Japan.<br>Proc. Imp. Acad. vol. 8, pp. 16—19. |        |
| 72. | 小川 琢 治    | 1932          | 第四紀火山活動に對する水河作用の意義<br>火山 vol. 1, pp. 1—4.  | (昭 7)  |
| 73. | 小川 琢 治    | 1932—<br>1933 | 中央日本氷成堆積物の分布<br>地球 vol. 18, pp. 399—415, vol. 19, pp. 1—9,<br>83—96, 163—172,          | (昭7-8) |
| 74. | 今村 學 郎    | 1932          | 本邦の所謂圍谷の形態と氷期の雪線高度(講演要旨)<br>地質雜 vol. 39, pp. 773—775.                                  | (昭 7)  |
| 75. | 小島 烏 水    | 1932          | 氷河と萬年雪の山   | (昭 7)  |
| 76. | 辻村 太 郎    | 1933          | 新考地形學 vol. 1, pp. 369—448.   | (昭 8)  |
| 77. | 今村 學 郎    | 1933          | 氷期に關する最近の研究の二三<br>地評 vol. 9, p. 443.   | (昭 8)  |
| 78. | 辻村 太 郎    | 1933          | 甲斐國仙丈ヶ岳カール底の羊狀岩<br>科學 vol. 3, pp. 193—195.   | (昭 8)  |

70. 小川博士の説が眞ならば、從來の如く地形のみならず、水河縁邊に特有なる現象、例へば氷縞其他にも注目すべきものなりと論じた。

71. (66) 参照。

72. 第四紀に行はれた火山作用と同時期の氷河作用との關係を結びつけて第四紀地史を編むべしと論じ、八ッ岳を例にとつて、氷期は二期あり、ギユンツ、ミンテルに相當するものとした。

73. 既論文で報告せる以外に、飯綱、黒姫、蓼科、岩菅、苗場山等にも氷期の氷成堆積物及び之による地形の存する事を記載す。

74. 日本のカールの形態を計測し、外國のものに比して何れもその底の著しく淺き事に注意し、擬圍谷と稱すべしと主張した。又氷期の雪線は該カール底より高位置にあり、氷蝕は微弱にしか行はれなかつた。隨つて小川博士の説とは相容れぬものなりとした。

75. 日本の氷河問題の経緯や、日本の所謂カールの成因に就いて詳述す。氏によれば日本のカールは積極的に氷蝕によると云ふ論證不充分なれば、寧ろ萬年雪が之を齎したとするを以つて穩當とすると。即ちカール雪蝕説である。

76. 氷河地形に關する現在の知識が79頁に亘つて綜括説明してある。脚註の文獻表は研究者にとつて至便である。

77. 從來の所謂氷期の雪線高度2550m (は地形的雪線であり、氣候的雪線を遙か上方に存せしものなりと述べてある。

78. 昭和7年夏仙丈岳に於ける調査の結果、羊狀岩、條痕ある堆石を發見、從來稍々疑はれてゐたカール氷蝕説に確實なる根據を與へた。又槍澤、横尾谷も之を氷蝕谷なりと結論した。

(昭和八年五月三十一日稿了)

63. 井 黒 彌 太 郎 1931 日高山脈中の水河地形に就いて  
 地理教育 vol. 8, p. 579. (昭 6)
64. 大 塚 彌 之 助 1931 第四紀 岩波講座地理學其他 pp. 1—107. (昭 6)
65. 岡 田 彌 一 郎 } 日本に於ける動物分布に関する考察  
 木 場 一 夫 } 動物學雜誌 vol. 43, pp. 242—243. (昭 6)
66. 小 川 琢 治 1931 中央日本の洪積世水河作用に就いて  
 地球 vol. 16, pp. 321—332, 401—408, vol. 17, pp.  
 1—8, 159—170. (昭 6)
67. 遠 藤 誠 道 1931 日本更新世 (Pleistocene Age) の氣候に就いて  
 地質雜 vol. 28, pp. 526—531. (昭 6)
68. 小 川 琢 治 1932 日本の水河時代に關する問題と其研究法  
 岩波講座地理學 pp. 1—19. (昭 7)
69. 鹿 野 忠 雄 1932 臺灣高山地域に於ける二三の地形學的觀察  
 地評 vol. 8, pp. 196—202. (昭 7)
70. 今 村 學 郎 1932 日本の水期に關する新しい問題と今後の研究法  
 地質雜 vol. 39, pp. 524—536. (昭 7)

侵蝕谷なりとした。

62. 立山御前澤に微弱なる活動性を有する水塊の存在する事を述べ、又同地域に3段の堆石列あり、以つて水塊の二回に亘つて收縮せる事を説いた。

63. 日高山地のカールに關して上掲山口氏(47)の外、當時の新聞に現れしものを紹介した。

64. 山地の平夷面、新火山等との關係より、又古生物學上より見る時は、日本のカールの形成されし水期は、下部洪積期中頃ならんと結論した。

65. 「水河と生物相」なる一節にて、現在に於ける動物並びに植物の分布状態より推して、過去に於ける氣候の變遷を論じたこれ迄の文献を紹介し、之を綜括して水期に於ける本邦の水蝕及び寒冷の程度は、歐米に比して少きものなりとした。

66. 仁科三湖のカールなる事、又同地附近に於ける擦痕ある添石、水河堆積物の發見を端緒として、研究を進めた結果、同地域以外にても諏訪湖盆、釜無川、宮川の溪谷等、八ッ岳、赤石、鳳凰諸山地山麓に廣く水成地形、及び同堆石物の分布して居る事を發表した。之に依れば從來の所論(19, 22参照)よりも更に低く、700m内外の低地に迄水河の存してゐた事になるのである。

67. 鹽原植物化石群の研究により洪積世の日本の氣候は $5^{\circ}$ — $6^{\circ}$ C低かりし事を結論し、然る時は水河の存在を許すべしとした。

68. 中央日本山地の山頂部のみならず、山麓地帯により大なる水河遺跡の存する事を述べ、水河堆積物による水河消長の探求法に就いて注意を促した。

69. 昭和3年夏、次高山北側に認められしカール(底部高度3818m、北東に開口)に就いて述べた。又同山地の他の方面にもカール地形を豫想した。

54. 中村新太郎 1930 日本に於ける洪積統の分層  
日本學術協會報告 vol. 5, pp. 115-117. (昭5)
55. 地球學團 1930 地理教材としての地形圖 第一輯 pp. 94-96.(昭5)
56. 矢部長克 1930 本邦に於ける鮮新期と更新期との分界に就いて  
日本學術協會報告 vol. 5, pp. 117-124. (昭5)
57. 矢部長克 1930 日本群島最近大陸期の地質時代  
地學 vol. 42, pp. 324-329. (昭5)
58. 松本彦七郎 1930 Evidences of the Post-Glacial Cycle of Climatic Change in the North-Eastern Japan, based upon a Study of the Marine Molluscas and Mammals, etc.  
Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ., 2nd Ser. vol. 13, No. 3, pp. 35-43, pl. 11-15.
59. 岡山俊雄 1930 中央日本の小起伏遺物とそれに關聯せる二三の問題 (略報)  
地評 vol. 6, pp. 1663-1664. (昭5)
60. 佐々保雄 1931 登山者のための地質學  
山岳 vol. 26, pp. 523-527. (昭6)
61. 大塚彌之助 1931 日本島の沖積期初期の海岸線の變化と其沿海陸棚に發達せる沈溺谷に關する時代的考察其他  
地評 vol. 7, pp. 447-458. (昭6)
62. 崎田龍二 1931 立山御前澤の谷頭に横はれる氷塊に就いて  
地評 vol. 7, pp. 734-747. (昭6)

53. 日本の氷期並びに氷河に關する當時迄の智識が綜括してある。

54. 主として關西地方の資料より、日本洪積統の層序を設定した。その中で洪積層下部に山砂利層なる多雨期成生物の存在する事が注意に値する。

55. 槍ヶ岳附近の氷蝕地形が説明してある。

56. 關東地方の資料により、標題に付いて論じ、當時の地史と堆積物、地形面との關係より、日本列島の昇降問題に及べり。

57. (51)と同文。

58. 本邦に於ける氷蝕の程度は、歐洲に比して少きものなりとし、後氷河期に於ける溫暖なる氣候の存在を認めたり。

59. 中央日本に散布する小起伏侵蝕面を研究し、該面の形成後にカールが出來たものと結論した。

60. 北海道日高山地に於けるカールの分布を圖示してある。

61. 日本の大陸との分離は沖積期初期の沈水に依る。隨つて多くの溺れ谷は之を洪積期の

46. 早坂一郎 1929 地形及地質に現はれた臺灣島近代地史概観  
臺灣博物學會會報 vol. 19, p. 116. (昭 4)
47. 山口健兒 1929 北海道日高山脈の圈谷狀溪谷  
山とスキー vol. 8, pp. 151-158. (昭 4)
48. 矢部長克 } 1929 On Some Remarkable Examples of Drowned Valleys  
田山利三 } found around the Japanese Islands.  
Rec. Ocean. Works in Japan., vol. 2, pp. 11-15.
49. Yabe, N. 1929 The Latest Land Connection of the Japanese Island  
to the Asiatic Continent.  
Proc. Imp. Acad. vol. 5, pp. 167-169.
50. 矢部長克 1929 最近地質時代に於ける日本群島と亞細亞大陸との陸地接  
續(摘要)  
地質雜 vol. 36, pp. 253-254. (昭 4)
51. Yabe, N. 1929 Geological Age of the Latest Continental Stage of  
the Japanese Island.  
Proc. Imp. Acad. vol. 5, pp. 430-433.
52. 今西錦司 1929 劍澤の萬年雪に就いて  
地球 vol. 11, pp. 267-282. (昭 4)
53. 辻村太郎 1929 日本地形誌 pp. 161-170. (昭 4)

44. 大關氏(28)が氷河遺跡と認めた河童橋附近の圓丘を押しの一部份であると説明した。  
45. 日本氷期研究史が簡単に記された。

46. 下淡水溪沿岸に於ける沈溺谷の存在より、洪積世の臺灣島の高度が5000mに及びしもの  
とすれば、氷河の存在せし事も亦想像される。併しその遺跡は剝削の激しい同島に於いて  
は、その後の侵蝕により地形的に残つてゐないと述べた。

47. 昭和3年夏日高山脈カムイエクウチカウシ岳に登山の途次、觀察せるカールに就いての  
記載、これ北海道のカールに關する最初の文獻也。

48. 日本沿海陸棚上の沈溺谷を研究し、その最近地質時代に於ける日本列島の沈降に由來  
せる事を説き、當時の列島は現在より約700m高くして、アジア大陸に接續し居たりと云ふ。

49. 前論文(48)と同じ。

50. 前説(48, 43)に依り、日本列島が沈降前に700m高かりしとせば、嘗て大關氏の説け  
る洪積氷期の雪線が700m低かつたとする説に近くなり、以つてカールの成生を許すべきも  
のなりとした。

51. 前説沈水陸棚の連續面は、陸上にて成田層基底面に對比されるが故に、日本列島の最  
大大陸期は洪積期直前なりきと説いた。

52. 劍澤には著しく氷化した多量の萬年雪が存在する事を報じ、その分布状態を論じた。

37. 辻村太郎 1923 日本の高山形  
地學 vol. 35, pp. 449-461, 554-568. (大12)
38. 辻村太郎 1923 地形學 pp. 399-438. (大12)
39. Yokoyama, M. 1924 Molluscas from the corel-bed of Awa.  
Journ Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. vol. 45, Art.  
1, pp. 1-10.
40. 神保小虎 1926 長野縣下の地質礦物  
内務省天然紀念物調査報告礦物之部 第一輯 pp.  
2-6. (大15)
41. 西村健二 1927 日本アルプスに於けるカールの分布に就いて  
地理學研究 vol. 4, pp.19-31, 106-112. (昭2)
42. 河野齡藏 1927 高山研究 pp. 38-51. (昭2)
43. 小澤儀明 1928 洪積世の大雨期に就いて  
東洋學藝雜誌 vol. 42, pp. 181-186. (昭3)
44. 富田達 1928 上高地盆地及び其四近の地質礦物  
内務省上高地天然紀念物調査報告の内 pp. 5-7.  
(昭3)
45. 藤本治義 1928 日本に於ける氷河問題の経緯  
大塚地理學會會報 No. 4, pp. 9-11. (昭3)

ると同様に、第三紀末より甚しく寒冷に向ひ、第四期初半に入りてその極に達せしも、後半より急轉溫暖となり、後幾分低下して今日に及びたりとした。

37. 雪蝕、氷蝕、カールの成因、其生成の時期、堆石、雪線其他に亘り、特に日本の高山地帯に就ての詳細なる吟味を試みた後今日の日本の高山形を齎せる主要なる營力は、氣候寒冷なる時期に於ける氷蝕の外なしとした。當時迄の資料、文献等に依て周到に論ぜられたものである。

38. 氷河地形並びに本邦の氷蝕形に関する當時迄の智識が簡潔に纏めてある。

39. 房州沼の珊瑚礁層の貝化石に就いて述べ、該層を以つて最新洪積層即ち洪積期中の後氷期のものなりとした。この論文のみに依れば、博士は必しも本邦の氷期を認めないと云ふのではないらしい。

40. 長野縣の偽氷河遺跡と題してヘットナー石、白馬大雪溪谷壁の擦痕、高山地帯のカール等の如きは何れも之を氷河遺跡とせずとも説明し得るものなりとした。

41. 日本アルプスに於ける殘雪の分布、カールの分布並びにその形狀を記して、殘雪はカールを破壊し、僅に雪塚を作るのみ。カールは過去の小規模なる氷河によるものなりとした。

42. 我が國の氷河問題に関する諸説を紹介した。

43. 近畿、中國地方洪積層上部に激流成生物たる礫層あり、恐らく洪積末期のウルム氷期に當る大雨期の所産ならんと述べたり。

- 地學 vol. 28, pp. 44—54, 107—117. (大 5)
28. 大 關 久 五 郎 1916 梓川上流上高地盆地四邊の地形に就て  
地質雜 vol. 23, pp. 55—67, 101—110, 145—157,  
189—206, 223—236. (大 5)
29. 田 中 秀 作 1916 信濃梓川溪谷に於ける氷河遺跡に就て  
地學 vol. 28, pp. 176—182. (大 5)
30. 大 關 久 五 郎 1916 飛驒山脈の中心に横はれる雙六三俣山塊の地形に就て  
地質雜 vol. 23, pp. 423—429. (大 5)
31. 大 關 久 五 郎 1916 日本に於ける氷河問題  
山岳 vol. 11, no. 1. 附録 pp. 1—10 (大 5)
32. 大 關 久 五 郎 1917 羽前國月山の萬年雪に就て  
地質雜 vol. 24, pp. 366—373. (大 7)
33. 大 關 久 五 郎 1917 木曾駒ヶ岳頂上の地貌  
地質雜 vol. 24, pp. 511—522. (大 6)
34. 横 山 又 次 郎 1918 前世界史 p. 639. (大 7)
35. Yamashita, N. 1922 Glaciation of the mountains of Japan.  
Amer. Jour. Sci. 5 th Ser. vol. 3, pp. 131—137.
36. 矢 部 長 克 1922 日本洪積世氣候論  
東北帝大地質學古生物學教室邦文報告 vol. 3, pp.  
1—38. (大11)

28. 上高地附近の地形を述べて、その地質構造に支配されて先づ溪谷を生じ、後に氷期の氷蝕が之を深刻せるものなりと説明した。即ち横尾谷上流には溪谷氷河、岳川谷には懸垂氷河が存在せしものとす。

29. 大關氏の反對に對する辯明である。即ちヘットナー石は漂石たらざるを得ず、故に之を齧した大氷河の存在を認めざるを得ず。

30. 標題地域附近の異狀なる緩起伏地形に注目、羊狀岩の存在等より之を氷蝕地形と看做した。

31. 日本山岳會第九回大會の講演速記。當時この問題に對して専門學者のとれる態度を批評的に論じてある。

32. 月山の殘雪、大雪城（おほゆきじろ）を調査の結果、之を以つて運動量なき小氷塊、又は小氷河なりとした。

33. U字谷、カールの存在等を指摘し、之等より該地氷期の雪線高度を 2700 m なりとした。

34. 洪積期に日本には氷河存在せず。ヘットナー石は山崩れに依るものなりと。

35. 16に記せし事項を、況太平洋學術會議席上にて紹介せるもの。

36. 古生物學上の資料より洪積世の氣候を論じて、當時の日本は北半球の他の部分に於け

- 地質雜 vol. 21, pp. 417—421. (大 3)
18. 山 崎 直 方 1914 高山に於ける雪の營力 Nivation につきて  
東洋學藝雜誌 vol. 31, pp. 53—58. (大 3)  
山崎直方紀念論文集前編 pp. 546—552. (昭 5)
19. 小 川 琢 治 } 1914 常念山脈南部に於ける氷河作用に就いて  
中 秀 作 }  
地學 vol. 26, pp. 667—678, 768—777. (大 3)
20. Simotomai, H. 1914 Die diluviale Eiszeit in Japan.  
Zeitschr. Ges. Erdk. Berlin. Jahrg. 1914, pp. 56—59.
21. Oseki, K. 1914 Die Eiszeit in der nordjapanischen Alpen.  
Geol. Rundsch. vol. 5, pp. 346—353.
22. 小 川 琢 治 1914 信濃國梓川の氷河遺跡  
地學 vol. 26, pp. 1—7. (大 3)
23. 大 關 久 五 郎 1915 ヘットナー石  
地學 vol. 27, pp. 934—936. (大 4)
24. 大 關 久 五 郎 1915 信州の氷成粘土  
地學 vol. 27, p. 936. (大 4)
25. Oseki, K. 1915 Some notes on glacial phenomena in the North-Japanese Alps.  
Scott. Geogr. Mag. vol. 31, pp. 113—120.
26. 大 關 久 五 郎 1915 梓川溪谷島々谷附近の地形に就て  
地學 vol. 27, pp. 982—993. (大 4)
27. 大 關 久 五 郎 1916 再び信州島々附近梓川溪谷の地形に就いて

地帯の雪線は之によるものならんとした。

18. ヘットナー石は氷成物ならず。流下岩片の河蝕にて圓磨され、大礫の地變に際して、擦痕を生じ、且埋れたるものと考へられる。

19. 梓川流域の段上、河畔堆積物を調査して、その氷成なる事、氷期の3期に分たるべき事を論じた。

20. 當時迄に知られた日本に於ける洪積期氷期に関する智識の紹介。

21. 當時迄に知られた日本アルプス地帯に於ける氷河問題並びに氷期に就いて説明した。

22. ヘットナー石の氷河漂石説に左袒。又同岩を含む小丘の氷河堆土なる事を説いた。

23. 同岩の氷成説をその形状並びに條痕より疑つた。

24. 小川博士の梓川上流扇狀地に於ける氷成粘土は、單なる氷成堆積物であると指摘した。

25. (21)参照。

26. 標題地域の地貌を詳述し、小川博士の氷成説を否定した。

27. 前論文より更に上流區域に調査を及ぼし、小川博士の説に對する反證を擧げた。

10. Lepsius, R. 1912 Keine diluviale Eiszeit in Japan.  
Geol. Rundsch. vol. 3, pp. 157—163.
11. 辻村太郎 1913 本邦のカルは氷河之を形作りしや否や  
地質雜 vol. 21, pp. 326—336, 355—373. (大 2)
12. 横山又次郎 1913 日本の珊瑚期  
現代の科學 vol. 1, pp. 10—15. (大 2)
13. 矢部長克 1913 ブライストン世に於ける日本の氣候に就て  
現代の科學 vol. 1, pp. 552—557. (大 2)
14. 小島鳥水 1913 日本アルプスに果して雪線なきか  
山岳 vol. 8, pp. 121—125. (大 2)  
日本アルプス vol. 4, pp. 252—258. (大 4)
15. 山崎直方 1913 氷期に關する論争  
現代の科學 vol. 1, pp. 614—621. (大 2)  
山崎直方紀念論文集前編 pp. 518—525. (昭 5)
16. 山崎直方 1914 飛驒山脈に於ける氷河作用に就て  
地質雜 vol. 21, pp. 1—12, 51—61. (大 3)  
山崎直方紀念論文集前編 pp. 525—545. (昭 5)
17. 加藤鐵之助 1914 ヘットナー石に對する疑義

10. 先づ横山博士の説を紹介し、外國に甚しかりし氷蝕の日本に見られざるは、自説の如く、氷期の汎世界的現象ならずして、寧ろ地方的狀況、主として地變による高度の變化に支配さるゝが爲なりと解釋してゐる。

11. 先づカールの成因に就いて考察し、次に日本に於けるカール 38 箇の分布及び性狀を述べて、カールはカールグレッチャーの侵蝕によるものなりと結論した。本邦水河地形に關する最初の綜括的な詳細なる報告である。

12. 著者の1911年の論文(6)に對する、シムロート、プリユツクナー、レブジウス諸氏の批評を擧げ、之を論評し、房州沼の隆起珊瑚礁層は洪積期のものにして、その存在は氣候の溫暖なりし事を示すが故に、同期の氷期たる事は許されないと説いた。

13. 貝化石群より關東地方の第三紀末より第四紀に入りての氣候を論じ、日本の洪積世の氣候は、外國と平行的に寒冷であつたと結論した。然して横山博士の洪積期と認めた沼の珊瑚礁層は之を沖積世初期のものなりと斷じた。

14. 日本アルプスに万年雪の存在する事を以つて、その雪線(地形的)を認めんとした。

15. 當時迄の日本氷期に關する論争、即ち横山、レブジウス、ベンク氏等の諸説の評論。

16. 當時迄の資料により、日本に氷期隨つて氷河の存在せし事を説き、氷期の雪線を 2550m 附近にありしものとした。又有名なるヘットナー石を紹介した。

17. 高山に於ける雪に侵蝕力のある事を、マセス Mathews の説に従ひて述べ、日本高山



- |    |              |      |   |
|----|--------------|------|---|
| 3. | 山崎直方         | 1902 | 氷河果して本邦に存在せざりしか<br>地質雜, vol. 9, pp. 361-369, 391-398. (明35)<br>山崎直方紀念論文集前編 pp. 503-517. (昭5)                          |
| 4. | 石川成章         | 1904 | 地球發達史 p. 239 (第二版) (明37)  |
| 5. | 山崎直方         | 1905 | 高山の特色<br>地學 vol. 17, pp. 5-20, 77-86. (明38)<br>高頭式: 日本山嶽志 pp. 12-39. (明39)  |
| 6. | Yokoyama, M. | 1911 | Climatic changes in Japan since the Pliocene epoch.<br>Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, vol. 32, Art. 5, pp. 1-16. |
| 7. | 辻村太郎         | 1911 | 日本アルプスと既往の水河<br>山岳 vol. 6, pp. 399-418. (明44)   |
| 8. | 小島烏水         | 1911 | 日本アルプスと萬年雪の關係<br>山岳 vol. 6, pp. 514-543. (明44)<br>日本アルプス vol. 3, pp. 54-117. (明45)                                    |
| 9. | 小島烏水         | 1912 | 日本アルプスと氷河問題<br>日本アルプス vol. 3, pp. 118-155. (明45)  |

て水田と見做すべし」と自ら慰めてゐる。邦書にして氷河問題に關心を寄せた最初のものか。

3. 明治34年白馬岳地質調査の途次、大日向岳下に3段の堆石、北俣澤に端堆石及び岩壁上に擦痕、雪倉岳にカールを認め、以て日本に氷蝕行はれたりと主張せし最初の論文。之は先づ地質雜vol. 9, pp. 352-3 (明35)に豫報され、又地學 vol. 14, pp. 853-854 (明35)に抄録された。又翌年ライト Wright 氏は Science, vol. 17, p. 349, 1903 に之を紹介してゐる。

4. カール狀地形は氷河作用によるか、雪崩によるか、遽かには斷じ難しとせり。

5. 高山の特色として氷雪の地形に及ぼす影響の大なる事を説き、日本アルプスにその例を引いてゐる。

6. 關東地方の第三紀、第四紀(特に房州沼の珊瑚礁層)の化石群より當時の氣候を論じ、洪積期の日本は溫暖なりと結論した。即ち西洋とは反對であり、隨つて氷期の存在の如きは否定されるならんと。

7. 日本アルプスに於けるカールを氷期に存せし懸垂水河の所産なりとし、その分布の卓越風及び氷蝕前の地形と關係ある事に注目した。同時に日本水河分布圖の最初の試みが示された。

8. 日本のカール地形の外國のものと異なる事、又氷蝕地形の的確なるもの無き事より、カールは萬年雪の侵蝕によるものなりと主張した。

9. 當時迄の研究、特に横山博士(6)の論文を紹介し、之に對する懷疑的意見を述べた。

# 本邦の氷河問題に關する文献

佐々保雄・今西錦司編

## 例言

附  
録

本邦の氷河問題に關する文献

1. 本文獻表は本邦の氷期並びに氷河問題に關する文献を集録するを目的とせり、隨つて直接之を主とせざるものは多くその關係頁を掲げるに止めた。
2. 新聞、通俗雜誌、一般教科書に現れたもの等は之を省き、又可及的創見的なるもののみを撰ぶ事とした。
3. 文献は年代順に並べた。同年中のものも大體之を發表月順に揃へたつもりである。
4. 各文献には脚註として簡単な解説を附した。それ故これを照合する事に依つて本邦氷河問題の経緯の大略を知る事が出来ると思ふ。
5. この脚註執筆は主として佐々が當つたものである。
6. 略號  
地質雜——地質學雜誌  
地學——地學雜誌  
地評——地理學評論  
明——明治  
大——大正  
昭——昭和

- 
1. Milne, J. 1881 Evidences of the glacial period in Japan.  
Trans. Asiatic Soc. Jap., vol. 9, pp. 53-86.
  2. 志賀重昂 1894 日本風景論 p. 41. (明27)

---

1. 日本の氷河問題に關する最初の文献。白らの考察(山地の殘雪狀態, 氣候, 生物, 地層, 月山の羊狀岩に關する)の外, 日本アルプスの先遊者達の觀察(アトキンソン Atkinson は立山, 百山の氷狀萬年雪より雪線を, 又月山に羊狀岩を, キンチ Kinch は針ノ木峠に小氷河を, ダイバース Divers は立山の氷河狀雪田に堆石を認めたと云ふ)より, 日本洪積期に氷河ありきと説いた。又ガーランド Gowland の日本に氷蝕遺跡なしとの説も卷末に記してある。

2. 日本にして今少し寒からんには「氷田」ありしものと嘆じ、「針木嶺上に雪田あり, 以



# 本邦の氷河問題に關する文獻

佐々保雄 編  
今西錦司

1933



